心のゆくえ

JJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
心のゆくえ

【Ｎコード】
Ｎ３３９０Ｙ

【作者名】
ＪＪ

【あらすじ】
ある研究所で造られた目覚めない体。それを目覚めさせるため研究員がとった行動は？
救い出された彼→彼女の日常を楽しくも悲しくも、つづっていきます？

ep1. 目覚め（前書き）

初投稿です。

ep1. 目覚め

「……ぅう……」

ァ……が……いた……い……。

――奥の方からドクンドクン、ズキンズキンと脈打つように……。

イタ……イ……イタイ……かぁ……さ…ん、イ……タイよぅ……。

……。

「……うぅぅっ……」

「……！」

小さなうめき声に気づき、そばにいた人影が驚く。

「……イ……タ……ぃょ……」

今度は、か細い声ながらハッキリと言葉となって聞こえてくる。

驚いた人影が慌てて声のする方へかけ寄り、多少動揺しつつもその状態の把握をはじめる。

そして確認を終えると、静かに、しかし急いでその部屋から出て

行った……。
　呼び出しのベルも備えられているというのに。
　このことを少しでも早く、直接伝えたい……という気持ちがそうさせたのであろうか？

　声の主は、病室のベッドに寝かされていた。

　そこは一人で使うには多少広めの部屋に、ジェル状の素材によって作られた少し特殊なベッドと医療用の機器がいくつか並んでいて、その華奢というより痩せ細った体には、そこからいくつものチューブがつながれ痛々しいさまを見せている。

　寝かされているのは、年の頃は１０～１２才くらい？　……の女の子であろうか？
顔色は寝たきりのせいなのか、もともと白いであろう肌は真っ白……というより青白いといったほうがよく、ほほもやせ細っている――　が、その愛くるしい天使のような顔を貶めることできていない……。
　そして更に目立つのはその肌以上に真っ白な髪。　子供の姿に不釣合いであろう白い髪……。
しかし、よくある、年をとった人がやがてなっていくであろう白髪とは一線を画す、くすみのない白――　、白雪のようなキレイな色。

「……ぅぅ……ん……」

　またも、声がもれる……。

しばらくして先ほど慌てて出ていった人影、看護師？の女性……が、その病室に白衣をまとった男を、せかせるようにして連れ戻ってくる。

「ほんとなんです！　かすかではあるんですけど、言葉を…うわ言を……」

「この1年、いかに手を施しても目覚める兆候がまったくなかったが……、今になってなど――、ほんとうなんだろうねぇ？」

と、連れられてきた白衣の男、長身痩躯のひきしまった、それでいてやさしげな顔の男……が、いぶかしげにしながらもやはり急いで入ってくる。

そして、ベッドに向かい……

「！」

「ああっ！」

そこにはベッドで横たわる少女が、まだうつろではあるが……しかし、しっかりと開いていた。

その真っ赤な、ルビーのような目を――。

ep2．感涙

「先生！　そ、蒼空（そら）ちゃんが！」

「あ、あぁ、こんな奇跡が……」

病室に入って、今まで――まる1年以上眠って、目覚める気配、いや、身動き一つすらなかった……、その少女が。

間違いなく目を開け、ほんとうにうつろでぼんやりと、ではあるが目を開けて――。

先生と呼ばれた痩身の医師は、そのまま少女の横たわるベッドへと向かいながら言う。

「西森君、ご家族の方は？　今日は来ていないのかい？　……もしそうなら至急連絡してあげてくれ！」

「はい……あ、いえ確か、ひな――お母さまが来ていたはずです。たぶん何かの用で少し離れただけかと……、探してきます！」

「ああ、よろしく頼む。急いでな！」

西森と呼ばれた女性の看護師が、少女を気にしながらも足早に病室から出ていく。

医師は、それを見送ると再びベッドへ、少女のほうへと目を移しつつそちらへ向かう。

少女の目はそんな医師に気づいているのかどうか？　反応はまだない……。

かたわらまで寄った医師が、その手を少女の方へと伸ばしかける。

「……いた……い……」

また、少女がか細い声を出す。

医師は、伸ばしかけた手をそんな少女の頭にそっとやり、やさしくなでてあげる。

だが、それに対する反応はまだ…ない……。

そしてやさしく声をかける。

「蒼空くん、蒼空くん……、聞こえるかい？」

「……」

ふたたび、今度はもう少し大きめの声で。

「蒼空くん！？」

蒼空と呼ばれる、まだ幼さの残る少女のまぶたが今度はかすかに動き……

「……ぅ……おかぁ……」
愛らしい唇から、言葉が漏れ出す。
だんだん少女の意識もはっきりしだしたのか、目も意思の光を帯びてきたかのよう……。

医師がふたたび声をかけようとしたそのとき――。

「蒼空っ！！」

病室に入るなり大きな声をあげた、細身で背の高めの女性が、少女のもとへ1秒でも早くとばかりに駆けよってくる。
その後ろから、看護師の西森も同じように駆けよる。

「ソラっ！……蒼空くん！？」
また声をかける。かけるその声は、かすかに震えている。

「蒼空くん、お母さんよっ！……わかるっ？」

その声を少女が聞いたとたん、……大きな反応が現われる。

「……お……ぉかぁ……さ……ん？」
言葉とともに、その目も動きを見せる。
呼びかけるその声の、その声を出すお母さんの姿を探すために……。

「蒼空！」

ふたたび呼びかける母親。

少女の目が、そのルビー色のキレイな目が、今度はしっかりとその声の方へ向く。

「そ、蒼空……」

声をかける母親の声はすでに涙声になっている。

「お……おかぁ……さん？　おかあさん！？」

か細いながらも、とうとうしっかりした声で少女が呼びかける。

その目も、母親を見ようと輝きをます。

そんなかわいい我が子を、ようやく意識が戻ったかわいい子を、ついに我慢しきれなくなったのかその両手でやさしく抱きしめる。

母親の、その優しい目からは涙があふれている。止め処もなく……。

でもその涙は今までとは違う、暖かい涙。

少女が目覚めない間、我が子を想って泣いていたその涙とは違う暖かい涙……。

少女の目からも涙が流れている……。

そしてその表情は、やわらかい安心した笑顔。

意識なく眠っていたときとは違うやさしい微笑み。

抱きしめていた体を離し、少女の顔を見つめて母親はこうささやく……。

「おかえりなさい……」

ep3．感涙　2

なぜこんなにアタマが痛いんだろう？

アタマの芯から、湧き上がってくるように痛みを感じる……。

……ズキンズキンと、脈打つように……。

激痛というわけじゃあない。

でも、気にならないってことは、全然ない……。

この痛みはいったいいつから続いていたの？

……そもそもいつから痛いと想うようになったの？

……それすらわからない……。

蒼空はいつ治まるともしれない痛みに悩ませ？られながら、いつしか茫洋とした思考の波にゆられ始めていた――――。

＊　＊　＊　＊　＊

どれくらいのときが経ったのか、その想いがついにはその唇から……。

ベッドで身動き一つとることもなかった、その少女から……うめき、……更にはコトバとなって……。

こぼれ出していく……かすかに、か細く、やさしい母親への想いとともに……。

「……ぅう……」

「……うぅぅっ……」

「……イ……タ……いょ……」

最初に出るのはやはり、アタマの痛みのこと……。

そして――。

「……ぅ……おかぁ……」

長いあいだ会っていないような……声も聞いていないような……やさしい母親のこと……。

それに合わせて蒼空の周りにも変化が起きていた。

……蒼空の変化に気付いた看護師や医師たちが――、あきらめの気持ちでいたその人々が……。

意識を取り戻しつつある蒼空に向かって、つなぎとめるように……、また戻ってしまわないようにと声をかける。

そんな外の雰囲気に蒼空は、目を開き様子を確かめようとこころみる……。

まだ朦朧(もうろう)とした、アタマの痛みも続いているなかで蒼空は懸命に外へと意識を向ける……。

その努力は報われる。

懐かしい、ずっと聞きたかった声。

「ソラっ！　……蒼空くん!?」
やさしい、お母さんの声。

うまく動かない口、〝つかっていない〟　のど、で……一生懸命声を絞りだす。
「……お……おかぁ……さ……ん?」

「蒼空!」
ふたたび母親が呼びかける。

その声に蒼空は確信を深め、その声の方へと注意を向ける。　…
…声の主を見つけようとする。

「そ、蒼空……」

母親のその声は、もう涙に濡れている。

「お……おかぁ……さん？　おかあさん！？」

蒼空はよりいっそう声を高め、そこにいるであろう母親に声をかけ、そのまだよく見えない目で見ようと見開く。

そしてとうとう、蒼空の頬に、その頭に、そして肩に……やさしい母親の手が差し出され、蒼空の体は包まれた。

蒼空は頭の痛さも忘れ、その母親のぬくもりに、そのやわらかいやさしさに包まれ……。

その目からは暖かい涙が流れ出す。

抱き寄せる母親も、そして抱かれる蒼空も……やさしい涙、そしてふたたび会えた喜びで満たされていく。

やがて抱擁をとき蒼空を見つめて母親は言った――。

「おかえりなさい……」

と……。

ｅｐ４．困惑

しばし母親は、蒼空を見つめている。

そして、指先でその愛らしい蒼空の、キレイな目、その目じりから流れ出た涙をそっとぬぐう。

蒼空もそんな母親をじっと見つめている。

その目は、すでに母親の姿――、色白ですっきりとした目鼻立ちの中にも、やわらかさを感じさせる面長のキレイな顔に、自然な感じにウェーブさせた髪を背中に届こうかというほどに伸ばしていて…、蒼空に見せてくれる表情はどこまでも優しい――、お母さんの姿を余すことなく捉えている。

見つめる蒼空に、母親のその手がふたたびのび小さな頭をやさしくなでる。

蒼空は、気持ち良さそうに目を細める。

「蒼空……、本当に……目覚めてよかった！」

母親がふたたび声をかけ、やさしい笑顔を見せる。

蒼空も、その愛くるしい顔にまだぎこちないながらも、かすかに笑顔を浮かべながら……。

「おかあ……さん、……お母さん！」

と声にだしうれしさを表現する。

そうしてなでてもらいながらも、蒼空はだんだん考えはじめてい

た。

目が覚め、頭痛はまだするものの頭がハッキリとしだし、どんどんその考えが大きく占めるようになってくる。

蒼空は、まだまだ微妙にこわばる表情ながらも、その考えの答えをもとめ母親に問いかける。

「お母さん……お母さん？　……ぼ、ボクっていったい……」

……なんでこんなところに……なんでこんなに自由がきかない……なんでこんなに……。

そう、意識がハッキリとし母親になでられたことで、自分自身もお母さんにさわろうとした。　のだがその意思とは裏腹に、……自由のきかない体、……顔を横に向けるのにも苦労をするほどの。

……何なのコレ？　……自分のカラダじゃないみたい……。

目覚めて間もない蒼空は、だんだんと自分のカラダへの違和感がにじみ出てくる。

そんな蒼空の問いかけ、様子に母親は表情を曇らせる。

……先ほどまでの笑顔がだんだん沈んだものへと変わっていく。

「柚月さん」

いままで後ろでひかえ沈黙を守っていた医師が母親に声をかける。

医師の方を見る母親。

それにうなずき、
「柚月さん、ここからは私のほうから蒼空くんにお話しましょう？」
少しほっとしたよな表情になる母親。
蒼空に問われたことを、自ら話すには自身もまだつらい……、たとえ1年以上の時が経っていたとしても……。
「お願いします……」
そう医師に伝えつつ軽く頭をさげる。
「それじぁ……」
と、医師は蒼空の寝るベッドへと近づく。
看護師の西森が、不安げに医師の顔を見るが、医師は気付かないそぶりで蒼空の方を見るて声をかける。
「やぁ、蒼空くん……はじめまして！」
と医師は話かける。
蒼空もようやく医師に気付き、かすかに驚くがそれでも挨拶をかえす。
「はじ……め…まして？」
「うん……、私らにとってはホント言うといつも君のこと見ていたから、初めましてって感じじゃないんだけどネ。　……まぁ、君にとっては初めましてだ」
地がオシャベリなのか余計なことをいう……。
「私の名前は、イシワタ、石渡　徹っていうんだ……。　君を担当

している　”脳神経外科”　の医師だよ」
よろしくなと、微笑を蒼空へ向ける。

蒼空は、一瞬目を大きくしたが言葉を発することもなく石渡医師を見つめている。

肩をすくめつつ続ける……。

「と、その前に蒼空君……、今の体の具合はどんなもんかな？　気持ち悪いとか……ない？」

蒼空は、素直に頭が少しうずくように痛いことを告げ、でもガマンできないようなものでもないから……と、話を促すように言う。

「そっか……、頭が痛いねぇ……（意識が戻って脳の活動が活発になったから？　……とかかな？）、まぁ……いいでしょう」

石渡は、じゃあと言って再び話しはじめる。

「とりあえず君の体におこったことを端的に説明するよ……。　ホントは今すぐじゃなく君がもう少し落ち着いてからにしようと思ったんだけど……な」
（石渡の中ではずっと担当してきたからか妙になれなれしい話し方である）

まあ、いいさという表情で話を始める。

母親は心持緊張を深め、蒼空の方を心配げに見やる。

どこからかゴクリとつばを飲み込む音がする……。

（看護師の西森だった……）

ｅｐ４．困惑（後書き）

読んでくださる方々がみえるようでウレシイです、ありがとうございます。

そういうのってすごい励みになるものなんですネ。

書いてみて初めてわかった気がします。

ep5．過去

「まず……、君の今おかれている状況なんだけど……」

といいながら、石渡はベッドの脇に座面のみある小さなイスを持ってきて座る。

その様子を見ながら、不安そうな顔を浮かべつつも話を聞こうとする蒼空。

「君は……1年と、え～5ヶ月ほど前？　になるかな、……事故にあったんだ。　覚えているかな？」

蒼空に質問したように聞こえたが……返事は期待していないのかそのまま続ける。

「その事故で君は、すごくひどい怪我を負ってしまってね……、そのままではとても助からないほどの重症だったらしいんだ……」

蒼空はおとなしく、じっと聞き入っている……。

「私自身がその時、直接かかわっていたわけではないけどね……その当時、の関係者――　が、ある方法で君の命を……もてあ……いや、助ける手段をもっていてね」

石渡は一瞬表情をゆがめ……すぐになにもなかったかのように話を続ける。

「で、その関係者…のもとで治療……を重ねた結果、君は一命をとりとめたんだが、さっきも言ったけど……、それは1年以上前の話なんだよね……」

色々話を端折っているような説明ぶりだが、蒼空はまだそこまではとても頭がまわらず、気付くこともない。

そんな蒼空の様子を見て、苦々しい表情をしながらも石渡はさらに続ける……。

「君は非常に難しい手術を受けたものの……、無事手術は成功した。……したんだけど、君の意識が戻ることはなく――　色々、ホント色々、手は施されていたようなんだが……ね」

ここでもまた石渡は顔をしかめながら話している。

「その後、またひとも……ゴホッ、色々あって……病院も変わって、今私のいるここ…　”国立医療研究中央病院”　っていうんだけどね・・・ここに移ってきてからも可能な限りに治療を施していたんだが、力及ばずでね」

申し訳なさそうな表情を浮かべる石渡。

だけど、と続ける……

「ご家族のみなさんにもホント申し訳なかったんけど……今こうやって、君は1年5ヶ月ぶりに……こうしてお母さんと……言葉を交わせるようになった！　目を覚ましてくれた！」

そう言いながら、そっと手を伸ばし蒼空の頭をやさしくなでる。

蒼空は、びくっと一瞬身じろぎするが……蒼空なりに感謝しているのだろう、おとなしくなでられている。

「君が今になって目を覚ましたのは何が原因なのか？はわからない……始めから時間が解決することだったのかもしれないし、今までの治療が遅まきながらも効果を現したのかもしれない……」

やるせない気持ちで話す石渡。

「あと、君は手術後ずっと目を覚まさず1年以上寝たきりだったからね……、体が動くことにそもそも慣れていない……。それに、例え……動く機能が完全となっていた……としても、筋力も衰えているからいずれにせよ動けないだろうし…ね」

今度は少々意味深な発言をする。

「ま、これから少しずつ体を慣らして、あせらずゆっくりとリハビリをすることだ。大丈夫、必ず普通の生活が出来るようなるし、私たちもその為なら誠心誠意、、努力は惜しまないつもりだよ！」

下がったところにいる西森もうんうんと、一人うなずいている。

そして石渡は、ポンっと蒼空の頭を軽くたたき、これで話はおしまいというように、イスから腰を上げる。

蒼空はまだまだ聞きたいことは、たくさんあるのにっ　…という風に石渡の方をぎこちなく見上げるが……。

「今日はもうこれくらいにしとこうな？　まだ目が覚めたばかりだと

いうのに……、無理してはいけないよ。　これから色々検査もしなくちゃいけないし……、君自身もいろいろと……ネ！」

石渡の調子がまた軽くなってきた。

「は、はぃ……」

残念だけど、蒼空自身まだ頭も痛いし……お母さんも気になるし……、と納得し返事をした。

まだまだ肝心なコトの説明が大きくぬけているのだが……今、蒼空にその話はすることは酷なことなのだろう……。

蒼空には、今しばらく母親と、目が覚めたばかりのこのひと時を……穏やかに過ごす時間が必要だろう……。

「じゃあ、私は一旦失礼させてもらうよ……、こう見えて結構忙しい身でねぇ……」

軽く微笑みながら、

「西森君、あとのことはよろしく頼むよ？　蒼空君は目覚めたとはいえまだまだ安静が必要だしね」

「はい、わかりました。　任せてください！」

胸をポンっとたたきながら石渡に答える。

うん、と西森にうなずきながら…石渡は、じゃあ、と蒼空に軽く手を振りながらベッドから離れ……

母親についでのように声をかける。

「柚月さん……、ちょっと――」

入り口近くで手招きをする石渡に、母親が近づいていく。

そばに来た母親に石渡はいくぶん声を落として告げる。

「彼の姿のこと……ですが、……まだ目が覚めたばかりで彼自身、周りのことは見えてないし、自分のこともしかりでしょう……。今すぐそのことを彼にいうのはショックが大きすぎる……、と思いましたのでいいませんでした。それに事件――、のことについても……」

一旦言葉を切り、母親を見る。

そして続ける。

「このことは、明日あらためて私からいってもいいし、あるいは……」

と、いいかけたところで母親がさえぎりながら言う。

「そのことは私から伝えます……。あの子にはゆっくり……おびえさせないよう、落ち着いて話してみようと……、そう思います」

母親は毅然とした表情で……、しっかりと石渡医師に告げる。

「そうですか……、何かあったときはいつでも相談してください。西森君も、もうしばらくは専属でつけますので、そちらもなんでも使ってやってください」

そう言いながら看護師の西森の方を見る。

笑顔を見せながらうなずく西森。

「ありがとうございます」

感謝の気持ちをこめお礼をする。
石渡医師、そして西森へと……。

そして去りぎわに石渡がもう一言……。
「明日からは忙しくなりますよ！？　蒼空君の検査、今後のリハビリ、ご家族もいろいろあるでしょう？　……蒼空くんの妹さん、彼女にも早く教えてあげなきゃ…ね？　よろこびますよ、きっと」

最後の言葉を聞いて母親は満面のやさしい笑み……を浮かべる。

「それじゃ！」

妙にさわやかな雰囲気を残しつつ、石渡は去って行くのだった……。

ep6．苦悩

しばし石渡が出て行った方を、ぼーっと見ていた母親だったが、はっと我に返り蒼空を見やる。

蒼空は先ほどの話……を聞いて、ちょっと考えるこむそぶりをみせていたのだが……疲れたのだろうか？

まだ目覚めて間もないというのにいきなりの説明だったせいもあるのだろう……、すでにうとうとしだしている。

そんな蒼空のそばに静かに近寄り、かわいらしい頭をふたたびやさしくなでてあげる。

「うぅ……ん……」

気持ちよさそうな表情をみせる蒼空……そしてそれが、その安心感がさらに眠気を誘ったのか……、いつしか眠りにおちていく。

「日向（ひなた）さん」

看護師の西森が母親に声をかける。

名前で呼びかけるあたり、二人はずいぶん気心が知れているのだろう……。

声をかけつつ近寄ってくる、西森。

「日向さん……、蒼空ちゃん目が覚めてホント……よかったです！！」

そう言いながら母親の手をとる西森。

「ありがと…ありがとぅね……香織ちゃん！！　今までいっぱい助けてもらって……どれだけ感謝してもたりないくらいだわ……ホント、ありがとね……」

話しているうちにまた感極まってきたのか目が潤みだす。

「ううん……、そんなことないです！　日向さんやご家族の苦労に比べたら……私なんてほんと大したことしてないです」

手を振ってそんなことないと言う、西森。

そんな西森も目が涙でにじんでいる……。

母親……日向は、先ほどまで石渡が掛けていたイスにすわり、穏やかに眠る蒼空を見やる。

そして西森も、日向の横で同じように蒼空を見る。

二人の目はやさしく蒼空を見つめている。

しばらく感慨ぶかげに蒼空を見つめていた二人だったが……。

「蒼空ちゃん……、気付きますよね？」

西森がいう。

「そうよねぇ……」
日向がちょっと困ったふうに答える。

さらに続けて、
「石渡先生には、さっき大見得きっていっちゃったけど……、やっぱり言いにくいわぁ……」
日向が悩ましい口調でいい、最後に　はぁ……と、ため息をつく。

「さっきはまだ目覚めたばかりだし、状況がつかめない状態だったから自分のことに気付く余裕もなかったでしょうけど……、今度起きたときには……やっぱぁ……」

う～ん……と、考えながら話す西森。

「目が覚めたからには、食事もあるし、顔も洗わなきゃだし、更に体も拭いてあげないといけないし……、なによりお手洗い……の問題もありますし」
更に言う西森。

それを聞いて更に悩ましい顔になる日向。
「やっぱり早く伝えておかなきゃいけないわよね…ぇ……」

「この話…を、聞いた時の蒼空の気持ちのこと考えると……」

と言いながら蒼空を見る……。

西森もつられて蒼空の方を見る。

つい半日前までの、身動きしない人形のようであった蒼空と比べ

ると……まるで違う。
やわらかい雰囲気が出てきて、その白雪のような白い髪、透き通るような肌、かわいらしい顔は天使のよう……。

と、二人は思う。

そんなかわいい、キレイな姿……人が見たら、みながうらやましがるような女の子、なのではあるが……。

蒼空は、男の子。

そう、あのいまいましい事故、いや事件――　までは、１３才の男の子だった。
あれから１年以上たって、今は１４才……、もうじき１５才にもなろうかという年頃の男の子なのだ。

対して、今の姿は普通に小学生で通用する女の子、無理に見てもせいぜい６年生がいいところ。

それに、ひとつ下の妹の春奈が今１３才……、外見では逆転してしまうのも悩ましい限り……。

「ああ、もう！」
日向が顔を仰ぎつつ小さくもさけぶ。

「蒼空が目を覚ましたら言うわ！　先送りしていい問題でもないし、本人が気付く前にきっちり説明してあげるが家族の……、母親としての務めだわ」

開き直っていう日向。

そして、

「私、春奈に蒼空のこと伝えなきゃ！　あの娘もずっと心を痛めていたんだもの……（それに一緒にいてもらえた方が私にも蒼空にもいいだろうし……）……よし」

「香織ちゃん、ちょっと携帯で連絡してくるから蒼空のことお願いできる？」

日向の決意にガンバレという表情を浮かべながら、

「はい！　まかせておいてください。　それにベッド周りの整理とかもありますから……」

気にせず行ってきてください……　と、言いつつ早速動きだす西森。

それを見て、それじゃお願いね……　と、日向は病室を出て行くのだった。

ep7．再会

……ん……。

……なんだかいい匂い……がするなぁ……。

懐かしい……。

……いつの間にか……ふと湧き上がってきた想いとともに……。

そして今度は、心地よい……なんともいえない感覚が、ボクのココロを満たしてくる……。

あぁ、暖かい気分……、気持ちいい……。

その感じ……は、ボクのアタマのほうから来ているみたいだ……うぅん。

……だんだん覚醒してくる蒼空。

そこには静かに眠っている蒼空の頭を、やさしくなでている日向がいる。

結局、蒼空は眠りこんでその日は目覚めず……、翌朝を迎えていた……。

日向は病室に入り、蒼空を見るとその愛らしいアタマをなでずに

はおられず……蒼空が目を覚まさないよう、やさしくなでていたりする。

「……う……ぅ……」

蒼空のそのかわいい唇から、小さく声が漏れる。

「う……う～ん……」

あら、と日向は軽くしまったという表情を見せる・・が、すぐうれしそうに微笑み、蒼空を見る・・なでる手はそのままに。

「お母さん？……」

蒼空が問う……、昨日よりもその声はしっかりしているよう。

「はい、そうよ……蒼空、おはよう！」

「うん、……お……はよう？　……今は朝なの？」

「ええ…朝、お天気もよくて気持ちのいい朝よぉ……」

ふーん、そうなんだぁ……と蒼空はいいながらも外を確認することは出来ないのであまり関心はもてない。

そして自分の頭をなでている日向に、さきほどの起きがけの感覚の答えを得、その心地よさに満足げに微笑む。

蒼空は、ふと軽く体を起こそうとしたが肩を浮かせるのがやっと

で、全然思うようにいかない。

その様子に、慌ててなでていた手を蒼空の肩にやり、
「そ、蒼空……まだ無理して動こうとしないで!?　……あなたの体はずっと寝たきりだったんだから動くことに慣れていないのよ!」

「う……、うん……」

相変わらずの自分の体のふがいなさに……悲しくなってくる。

ボクの体……全然いうことをきいてくれないや。　まるでボクじゃないみたい……、声もなんだかちょっと違うし、これも事故のせいなのかなぁ……。

さみしげに考えこむ蒼空に、日向は慌てて声をかける。

「そ、蒼空っ、それじゃちょっとベッドを起こしてあげるわ……、そうすればお話しもしやすいでしょ?」

そういって、ベッドの背中の部分を起こそうとベッド脇のリモコンをいじりだす……が、あれぇ……と、頼りない声を出す。
どうやら使い方がわからないらしい。

蒼空はちょっとあきれたふうに……。
お母さん、変わらないなぁ……、相変わらずのメカ音痴だ……と、思いながら　”くすっ”　と笑う。

そこにうまい具合に病室に入ってきた西森……と、もう一人。

そして日向の様子を見て察する。
「日向さん？私がやりますよ！？」
と、小走りにベッド脇にきてリモコンを日向から受け取り……
「体を起こしてあげたいんですよね？　蒼空ちゃんちょっと動くから驚かないでね？」
操作とともに、寝床の上半身側が腰あたりを軸にせりあがり、そこが背もたれになる。
「はいできた」
「あ……、ありがとう……」
蒼空が看護師に感謝のことばを伝えると……
「うっ……」
いきなり動きが止まる西森。
いぶかしげに見る蒼空。
「そ…蒼空ちゃんが私に――、あ…ありがとう……って、言ってくれた！　コトバを向けてくれた！」
そう言いながらも感きわまって泣き出す西森。
「え？　なに？　……何なの？？」
急に泣き出した看護師に蒼空があたふたしていると……
日向がやさしく蒼空の肩に手を置き、
「蒼空？……彼女はね。　……あなたがこの病院に転院してきてからずっと、献身的に……、それはもう一生懸命お世話してくれてい

たのよ。　……私たちもどれだけ彼女にはげまされたか」

動かない、目が覚めない蒼空をずっと世話してきて、そんな蒼空が目を覚まし自分にコトバをかける……、軌跡が起こった……、そんな想いが、感情が、彼女を泣かせてしまったのだろう……。

「ごめんなさいね……、急に泣き出しちゃって」

と涙を指でぬぐいつつ蒼空を見る看護師……、まだちょっと涙声だ。

「私は看護師の西森……、西森　香織っていいます」

と自己紹介を始める西森。

「病院での蒼空ちゃん担当の看護師だから、何かあったらいつでも私にいってくださいね」

やさしく微笑みながら、かるくお辞儀する。

「よ…よろしくお願い……します……」

蒼空もあいさつをする。

それにまた西森が喜び、ニコニコしているのを見ながら……

かわいくてキレイな人だなぁ…、背の高いお母さんよりはちょっと低いけどスタイルも良くて……やさしそうだし、お母さんよりメカにも強そうだし（病院の人なんだから当たり前か）……ふふ。

お母さんとも親しそうだ……。

そんなたわいもないことを考えつつ、起こしてもらって視界のよくなった周囲を何気に見渡そうと努力する。（まだ体が動かしずらくて大変なのだ……）

すぐもう一人の小さめの人影に気付く。

その人影、……ボクのまだたよりない記憶をたどると、でもすぐに出てくる……。

女の子は……ボクの見知っている女の子で……、ボクの記憶よりちょっとだけ大人びてる。

……いつもそばにいた――、女の子。

そう……。

「は……はる……な？……」

ボクがそう問いかけると……

人影は、たまらず駆け寄ってくる。

そして、……ボクのベッドへ……、飛び込んできた！

「お兄ちゃん！！」

その声もまた涙に濡れていた……。

ep7. 再会（後書き）

なかなか話しが前に進まないなぁ……難しいです。

ep8．動転

飛び込んできた妹……春奈…は、ボクの体に抱きついて顔をシーツにうずめる。

「は、……春奈？」

ちょっと慌てて、変な声を上げるボク……やっぱ、声の調子…オカシイかな？

ボクは、まだ自由のたいしてきかない体なのでどうすることも出来ない。

頭をなでてやりたいのだけど……。

そんなボクの様子に気付き、春奈はボクの手をとってやさしく包み込んだ……暖かいな。

「お兄ちゃん……」

つぶらな瞳でボクのほうを見てくる、……やっぱ涙目だ。

「春奈……し、心配かけてごめんね？」

「よかった……、よかったよぅ……、うぇ～ん！！」

再び、抱きついてきた。

とうとう感情のダムは決壊したみたい……、思いっきり泣きだしちゃった。

「春奈……」

ボクは、外に出ていた手をにらみながら力をこめ、妹のふわっとしたポニーテールにしている頭まで運びきり……なんとかなでる動きをした。

たかだか３０ｃｍくらいの距離だったけど一日分の力を使った気がした……、それにしても白くて細い、華奢な手になっちゃったなぁ……。

春奈はそれに気付き、泣いていた顔を上にあげ……ニッコリと、笑顔になって喜んだ。

「これからはまた一緒に過ごせるね」

まだ病院からは出られないけど……と苦笑いしながら春奈に言う。

「うん！今までの分も取り返さなきゃね！」

明るくかわいい笑顔を見せる春奈に、ボクの顔も自然と笑顔が出るようになってきた気がする。

それにしても春奈、１年半近く？　ぶりのせいなんだろうか？

なんだかずいぶん大きくなったような……、さっき見たときも微妙に大人びて見えた気はするけど……。

たしか春奈は、ボクよりも背が低くて小柄で、当時で１５０ｃｍ前半だったと思うけど……、そばでこうして抱きつかれたりしていると何か変だ？

なんなんだろ……、この違和感。

笑顔から一転し考えこみ出したボクの表情を見て、春奈は一瞬

”はっ”　とした表情になって、そしてお母さんを見た。

お母さんは、春奈を見てうなずくとボクの方に近づいてきた……。

春奈はボクをちらっと見てから、そばに来たお母さんにちょっと不安げにすがりついた。

ボクは何かいやな感じがしてきた……。

お母さんは、ベッドの横のイスに腰をかけるとボクの手をとり……

「蒼空……、落ち着いて聞いて欲しいことがあるの。……大事なお話よ」

と言い……続けて、

「蒼空も目が覚めて、2日目。　体のほうはまだまだこれからだけど、それでも気分はだいぶ落ち着いてきたみたいよね？」

「う、……うん」

そういえば、昨日あれだけしてた頭痛も今日はほとんど気にならない……。

「だけどね、お母さんね　――――　まだ、蒼空に伝えていない大事なことがあるの……」

真剣な表情のお母さん。
……なんだかこの先、聞くのがこわい。
「聞いてくれる？」
「うん……」
ボクがうなずくと、お母さんは話はじめた。
「蒼空……、あなたは1年5ヶ月前の事故で、手の施しようのない…もう助からないほどの重症だったの……」
「えっ」
「それで助かるためにはその体を……、蒼空の体をあきらめるしかないくらいだったの……」
「で、でも……ボク」
自分の体を目が覚めてから初めて見ようとする……。
そんなボクにかまわず話しを続けるお母さん。
「それでその時の医師から出された治療案は……」
そういった時のお母さんの表情はすごく悔しそうな……悲しそうな表情……。
「蒼空の……蒼空のアタマ、脳を、別の体に移植するってことだったの……」

聞いていて、わけが解らなくなってきたボク。
「え？……い、移植ぅ？　……別の体って……でもこの体……、ええっ？」

「落ち着いて、蒼空！　……落ち着いて」
そういってボクの手をギュっと握るお母さん。
そしてボクの頭をなでつつ、再び話しを続ける……。

少し後ろで、春奈と看護師の西森さんも、つらそうな表情を浮かべながら聞いている。

ボクの口のなかはカラカラだった。

「選択肢はなかったの……、そして蒼空、あなたの意思を確認することももちろん出来るはずもなくて……」
こう話すお母さんはほんとに辛そうな顔をしている……。

「昨日、石渡先生がいってた手術というのは、その手術のことだったの……」

「手術……、脳移植って手術はね。　まだ世界でも例のない大変なものだったようなのだけど……、一縷（いちる）の望みをかけて――　手術に同意したの……」

お母さんは一呼吸おき、更に続けた。

「手術は無事成功したわ……。　でも蒼空……、あなたの意識が戻ることは一度もなかったの」
お母さんはとうとう涙声になり……

「その時は、どれほど手術に・・手術に同意したことを後悔したか……」

「ごめんね……蒼空、ごめんね……勝手にそんなことをしてしまって……」

ボクの手をとりそっと頬ずりをする。

お母さんの顔からは涙が止め処もなく流れてる。

そんなお母さんを見ながら……

ボクは……さっきからの違和感はそのせいだったのかと、案外落ち着き出してぼんやり考えていた。

それに結局生きてここにいるわけだし……。

でもそんな落ち着きも、次の一言でくずれさった。

「そ、それでね……、蒼空の体はね……」

「うん？……」

「お……、女の子になっちゃったの……」

お母さんのその爆弾発言に、ボクは耳を疑った。

「え、えぇ～！！」

出た声は目覚めてから一番大きい……、しかも可愛らしい女の子の声だった。

ｅｐ８．動転（後書き）

脳移植はまだ実際には成功してないようです。
あくまでお話しってことでよろしくお願いします（笑）

でも動物実験では成功って話しも……すぐ死んじゃうようですが。

でも人体実験……どっかでやられてるのかも？

こわっ

ep9．決心

その声の高さ、かわいい？声に自分でもびっくりしつつ、まだ信じられないって声を出すボク。

「おっ……おんな…の……こっ……て？」

「え……えぇぇ？」

聞いたことにまだ現実味がわいて来ないボク……。

自分の体を、見て…触って確認したい気持ちにかられたけど、まだうまく体が動かせない自分ではそれもかなわない……無力だ。

それでもなんとか顔をなでるくらい……は出来た……けど顔触ってもよくわからなかった。

そうしてる間に看護師の西森さんが何か持ってきて、それをお母さんに渡す……。

「蒼空……これを見て？」

お母さんが見せてくれたのはちょっと大きめの鏡……。

そしてイスから立ちあがり、ベッドに腰かけてボクの見やすい位置に鏡を掲げてくれた。

ボクは恐る恐る鏡を見る……。

そこには、真っ白な髪が肩近くまで伸び、顔色は病的……ってい

うほど青白く……そしてその鏡を見つめている目はウサギのように真っ赤……な、少女の顔が映っていた。

「こ、これ……が、ボク？」

女の子ってだけでもビックリするのに――　白い髪に赤い目だなんて……しかもよく見るとまつ毛まで白い……、これっていったい!?

そ、それに写ってる顔つき……とてももうじき１５才になろうかって年の子の顔じゃない！　どうみても小学生だ……。

でも顔つき……は、なんとなくその頃のボクに似てるような気もする……けど。

しばし呆然と……鏡を見つめ続けているボク。
心の中はもうぐちゃぐちゃだ……。

……やっぱ、体も女の子？なんだろうか……自身の感覚を澄ましてみるけど、まだよくわかんない。

そんなボクを、みんなは押し黙って……ボクの気が済むまで……という風に見てくれている。

どれだけの時間がたったのだろう……（たぶんそう大した時間じゃないかも）

「お母さ……ん……」
ボクは思わず心細げな声をあげてしまった。

お母さんはたまらずボクを見つめ……そしてやさしく抱きしめてくれた……。

「蒼空、蒼空ちゃん……」

やさしく声をかけてくるお母さん。

「心配しなくていいから……、どんな顔、どんな姿になっても蒼空は蒼空なんだから……ね」

そういいながらボクのアタマをなでてくれる。

……気持ちいいなぁ……。

目覚めてからっていうもの、すごく甘えんぼになった気がする……もう年頃の男の子だったというのに。

でも、いいよね……今は甘えてしまっても……（それに外見は女の子…なんだし――）

このままずっとこうしていたい気もするけど……。

まだ疑問に思うことがあるんだよね……。

「お母さん？」

「なぁに？蒼空……」

「さっきのお話の中で、わからないことが……あるんだ…けど？……」

お母さんの表情がこわばる……。

「な、何……かしら？」

「あの……、ボクのこのカラダ……は、誰のモノなの？　ううん、誰のモノだったの？」

そうなのだ、この体は誰のモノなの？？

この女の子は誰なの？

脳移植？するには、移植するための体が必要なのに――、そんなにうまくその体って見つかるものなの？

この女の子はどうなっちゃたの？

……もし、ボクのために女の子が……。

……。

お母さんはボクの質問に、言葉を失ったように無言になってしまった……。

後ろの二人、春奈と西森さんも表情を失ったようにして立ち尽くしている。

「そ、蒼空……」

お母さんがポツリと言う。

「そ、その話しはお母さんも詳しくなくて……ね」

すごく言いにくそうに話すお母さん……なんかつらそう。

「でもね……蒼空、あなたはもしかして自分のせいで誰かが犠牲になった？…と、考えているのかもしれないけど…ね、そんなことだけは絶対ないから！」

「この話しはまた…ね、もっと落ち着いてから……詳しい人……に、キチンと説明してもらうようにするから……」
お母さんは、つらそうな顔をして、それでもボクに心配せさないよう一生懸命話してくれている。

そう……。
お母さんも、ボクが目を覚ますまでいっぱいいっぱい苦労して、悲しい思いをしてきたはずなんだ……。
妹の春奈もそうなんだろう……。

ボクはお母さんを――、家族を、困らせたくなんてない。

「うん、わかった！」
ボクはなるべく軽く、明るく聞こえるよう答えた。

「あ、ボク、女の子になれるようがんばるよ！？　お母さん……、それに春奈も協力してくれるよね？」

そんなボクの様子にお母さんはちょっと呆けてる……、意外…な展開？　なんだろう……ふふ。
正直、ボク自身まだイマイチ実感もわかないし、これからどうなるのかもわからない……。

そんな先のこと考えても今はしょうがない。
まずは動けるようにならなきゃ、歩けるようにならなきゃ、迷惑ばっかかけるのはいやだ！

これは元男の子のプライドだ！

「蒼空！」

そう言うと、お母さんが　”ぎゅっ”　と抱きしめてきた。

ボクは抱き返せないので代わりに頬をお母さんの頭によせた。

自然と涙が出てきた。

お母さんも泣いてるみたい。

春奈と西森さんも泣いてる……。

今日はゴハン……、食べられるのかな？

そんな中、へんなこと考えてるボクだった。

ep9．決心（後書き）

ゴハン……は無理でしょう（笑）

ep10．兆し

あれから１０日ほどたち……。

今は、上半身の力をつけるためガンバってる。

外はもう８月も半ばになるところで……まだもうしばらくは暑さは続くのだろう……。

妹の春奈は毎日ボクの様子（面倒）を見に、病院に通って来てくれている。

今は夏休みだから学校の心配はいらないから……と言って、毎日来なくていい……っていうボクのコトバは軽く流され、相手にされない。

友達とも遊びたいだろうに――。

ボクのことは香織さんが見てくれているんだから無理しなくても大丈夫なのになぁ。

彼氏とかいないのかな？　春奈はかわいいんだから中学で男の子が放っておくはずないんだ……。

お母さんは、さすがに仕事があって毎日はこれない……平日は夜、週末のみ朝からって感じだ。

「お姉ちゃん！」

「お姉ちゃん！　聞いてる？」

「えっ？　ぼ、ボク？」

「そう、お姉ちゃん！　私がここで呼ぶのはお姉ちゃんしかいないんじゃなぁい？」

「あ……そ、そうだね……ご、ごめん……えへへ…へ」

「もぉ！　いいかげん慣れてもいいんじゃないかなぁ？　それともやっぱ見た目に合わせて私がお姉ちゃんってことにしましょうかぁ～？」

と、途中から”からかう”ように言う春奈。

「そ、それはちょっと勘弁してよぉ！　ね、これからはホント気をつけるから!?　さっきはちょっと考えごとしてただけなんだ」

話し声だけ聞いてたら（まぁ実際は外見もそうなんだけど……）間違いなく春奈の言ってることが正論になってしまうから始末に負えない……年上ぶっても出てくる声は小さい女の子の、かわいい声なんだから。

春奈、そしてお母さんもボクのことはもう「お姉ちゃん」って呼ぶことにしている。

病院の……事情を知ってる人にもそのように話してる。

外見が女の子なのにいつまでも「お兄ちゃん」ではあまりにも変だ。（ホントはお姉ちゃんっていうのにも相当な違和感があるわけなんだけど……春奈に妹扱いされるのだけは、ぜったい却下だ！）

ボクの名前については、この病院に入ってすぐ話しはついてるらしくって「蒼空」のままだ。

女の子でもある名前だし、無理して変える必要もないよね……ボクも変わってなくて良かったと思う、１３年間使ってきた名前だし

けっこう気に入ってるんだ。

「お・ね・え・ちゃん！？」

「は、はい！！」

し、しまった、また考えごとしてしまってた……。

「な、なに？」

「さっきから話しが進まなぁ～い！」

春奈が頬を膨らましてふてる……かわいいな。

「今日は、やっとあれ……とってもらえるんでしょ？」

といってニヤリとする春奈。

「う！　知ってたんだ？　春奈」

「知ってますよぉ……お姉ちゃんのことならなんだって」

何それ？……いやすぎなんですけど……。

「香織さんとはもうすっかりお友達なんだからぁ♪」

か、かおり…さん……看護師さんには守秘義務はないんですかぁ？……身内はスルーですか？

やっぱ、ないんだよね……はぁ。

「でも、よかったね？　これで病院の中だけでも動けるようになれるし、ようやくリハビリも本格的に出来るようになるね！」

「う、うん！　そうだね、ありがとう」
春奈が言ってるのは、は…恥ずかしながらカテーテルのことで…
…点滴はすでに1週間前に外してもらってて、軽いスープとかゲル食を食べるようになってたんだけど、その……おしっこのほうは上半身がある程度しっかりするまでは、大変ってことで……。
もう勘弁してください！　ハズカシイ。

動くのが大変だった上半身も、毎日体を起こしてもらい…軽い動きを繰り返しさせてもらうことでずいぶんマシになってきて、上半身くらいなら自分で起こせるようになってきてる。
もちろんサポートは、お母さんに春奈、香織さん……、感謝してもしきれない。

石渡先生にもいろんな検査をいっぱいされたけど、結果は問題無い？のか特に何にもいってこない。
まぁ、元々目が覚めないだけで体自体には何の問題もなかったみたいだし。

代わりに病室に来ると、変なことを言って帰ってく――、よくわからない人だ。

「あぁ、早く外に出てみたいなぁ……」
ついそんな想いを口にしてしまうボク。

「お姉ちゃんったら……気ぃ早すぎ！　まだこれからリハビリだっていうのに……もう」

「それに初めて出るのがこんな真夏の……強い光が照りつける中じ

や……」
そう言ってちょっと心配げな顔をボクに向ける。
「う……ん、そうだけどさ……」
しょぼくれるボク。
でもめげずに、
「じゃあさ、朝とか夕方とかさ、日差しの弱いときなら大丈夫だよ……ね？」
「う～ん……どうなんだろぉ？……」
お、悩んでる悩んでる？　もう一押しかな♪
春奈もホントは一緒に外を歩きたい（ボクは車イスだろうけど）と思ってるから、悩んでるんだろう……。
「大丈夫だよ……そんな…」
ともう一押ししようと言いかけたところに……
「あら、春奈ちゃん……今日も早くからごくろうさま！　お姉さん想いのいい娘ちゃんネ」
香織さん……看護師の西森さん登場。
「もう、香織さん子供扱いするぅ」
春奈がふてる。（そんなこと言うのはやっぱ子供だと思う……）
軽く笑顔で、あっさりスルーし、
「聞こえてきたわよぉ？　蒼空ちゃん、お外に出たいの？」
「でも、まだダメよぉ……もうちょっとガマンして欲しいなぁ」

すらっとしたスタイルの、程良いくびれの腰に手をあてて、ショートボブの髪が似合うそのキレイな顔でかわいく睨む。

そして、ここからちょっと真剣になる。

「先生からもお話しがあったでしょう、蒼空ちゃんのその体のこと……お日さまの光を直接浴びるのは体にも、なにより目にもすごく良くないの」

諭すように話す香織さん。

「それに体自身もまだ免疫力が付いてないから外の悪いウイルスなんかにすぐ侵されちゃうでしょう？」

「ん？」

最後に問いかけるようにボクを見る香織さん。

「はぁい……」

あきらめて返事するボク。

そう……ボクの体って、お日さまの光――、紫外線に弱いみたい。白い髪に赤い目、白い肌は、”先天性白皮症”　といって体の中のメラニン？　って色素が欠乏してしまっているためそう見えるらしい。

だからお日さまに当たると、ひどい日焼けや目を傷めちゃったりするから十分な対策をしなきゃいけないみたい。

おかげでボクの病室の窓もずっとカーテンが引かれたままで、明るいうちは外も見れない。

免疫力も、ずっと寝たきりだったせいもありすごく弱くて……ちょっとした風邪でも大変なんだって。

命あってのこととはいえ……悲しいなぁ。

しょんぼりしてしまったボクのアタマをなでながら香織さんが言う。

「大丈夫、これからずっと出るなって言ってるわけじゃないのよ？　それについては私たちにまかせて？　ね？」

そう言いながら最後にぽんってボクのアタマを軽くたたくと、

「さて、それでは今日はお待ちかねのぉ……」

と言っていたずらっぽく笑う香織さん。

それを見てこちらはニヤリと露骨に笑う春奈。

ボクは恥ずかしくてたまらない……のだけど多勢に無勢。

思わずこう言ってしまった……。

「や、やさしくしてね……」

ｅｐ１０．兆し（後書き）

回復のペースは実際とは違うと思いますし、色々な病状・表現についてもシロウトの想像です。
物語ということでその辺はご勘弁いただけたらうれしいです……はい。

ep11. 春雪

……その日は3月も2週目に入ったというのに寒い日だった。

お昼すぎから降りだしていた雨は、夕方前には雪に変わり辺りは薄い白に覆われだしていた。

ボクたち兄妹は、その季節外れの光景に大いにはしゃいでた。

晩ごはんは久しぶりに家族4人で食べに行くことになったからなおさらだ。

お父さんは、有名な製薬会社でコンピューター関係のお仕事をしてるらしいんだけど、いつも忙しくてなかなか一緒に出かけることが出来ない。

今日もホントは仕事だったみたいなんだけど、なにかの手違い？で仕事に使う荷物が届かなくなった――　とかで急遽出なくてよくなったみたい。

……だから今日みたいな日は、春奈と一緒になってついついはしゃいでしまうのだ！

ボクももう中学2年になるんだからもっと落ちつかなきゃいけないんだけどなぁ。

春奈にもしめしがつかない……お兄ちゃんの威厳をみせなきゃ！

「雪……ずいぶん降ってきたようだけど大丈夫かしら？」

みんなで出かける準備をしている最中、お母さんがリビングの窓から外の様子を伺い言う。

ボクらは、え～！大丈夫っ全然平気だよぉ～　とお母さんにまくし立てていると……

「まぁこのくらい大丈夫さ、車は４ＷＤだしまだ冬用のタイヤが付いたままだしね」

と、お父さんが頼もしい返事をお母さんにした。

「「そうそう、大丈夫、大丈夫だよぉ～！」」

ボクたちは、ここぞとばかりにまた大丈夫のコトバを繰り返す。

「はいはい、そうよねぇ…そうだよねぇ……わかりました。　じゃ、行きましょ～かぁ～……うふふっ」

お母さんは、あんなことをいいながらもやめる気は全然なかったみたいで、もう準備はバッチリみたい……お母さん子供ですかっ。

「「わ～い、出発、出発っ！」」

ボクたちは嬉々としてお父さんの車に乗りこみ、郊外にあるファミリーレストランに向け家を出た。

運転はモチロンお父さん、その横にはボク。お父さんの後ろにはお母さんが座り、春奈はその横……ボクの後ろって感じだ。

「お父さん、ボクはチーズ入りのハンバーグがいい」

「私はスパゲッティ～！　でぇ、イチゴのショートケーキ、それにプリン！あとえっと、えっと……」

「ええぇ春奈、ごはん食べる前からもうデザートの話しなのぉ？
しかもデザートのが多いじゃん！」

「お兄ちゃん、ウルサイ！　今日はせっかくお父さんも一緒なんだ
からお食事もフルコースなの！」

「何なのそれ、わけわかんないよぉ？」

車の中はボクたちの声で騒々しい限りだ。

「まぁ、まぁ、二人ともケンカしない・・・なんでも好きなモノを
頼めばいいさ？　今日はお父さんにドンとまかせなさい！」
えへんといった感じで胸を張るお父さん。

は～い　と答えるボクたち。

それを見て微笑むお母さん。

背が高くてかっこよくて、いつも優しいお父さん。
お父さんの横でいつも微笑んでるお母さん。

そんなお父さんやお母さんに甘える兄妹（ボクたち）。

あの日、雪がもっと強く降っていたら。

お父さんの仕事が急にキャンセルにならなければ。

いつものように家でごはんを食べていたら……

結果は違ってたのかな？

＊　＊　＊　＊　＊

それは唐突なできごと……。

……

ボクたちの乗る車の前方から、雪でスリップしたワンボックスが対向車線から飛び出してきて……

……

……

……

気が付くとボクは、車の外に投げ出されていた……

目の前は半分真っ赤で……体の感覚は……全然…ない。

顔を横に倒す…と、お父さんの車の前半分……は、ワンボックスがはまり込んだようになって止まってた――――。

クルマの中から春奈の泣いてる声……が、聞こえる……良かった……春奈は無事なんだ？

……お母さんは大丈夫かな？

ボクの頬っぺたの周り……なま暖かい液体がたまってきてる……。

目がかすんで……きちゃ…った。

ボ…ク……死……ぬのか、…な？

……

「おと……う…さん……」

……

雪がすべてを覆い隠すように……激しく降り出していた……

それでも赤い色は隠されることもなく広がっていった。

＊　＊　＊　＊　＊

……

「……蒼空！……」

……う…ん……？

「……蒼空ちゃん？……」

……

「うぅ……うん？」

「蒼空ちゃん？　起きて！？」

日向が心配そうにベッドで眠る蒼空に呼びかけていた。

「んぁ？　お、おか…あ……さん？」

呼びかけられて目が覚めてきたボク。

「蒼空！？　大丈夫？」

心配そうに声をかけてくるお母さん。

どうやらボクは、リハビリに疲れていつの間にか眠っちゃってたみたいだ。

「お母さん？　どうしたの？」

「どうしたのじゃないわ・・・蒼空、あなた眠りながら泣いてたわ・・・」

そ、そうなんだ。

頬に手を当てると涙でまだ湿ってた・・・目じりにもいっぱい溜まってる。

「怖い夢でも見た？　ん？」

優しく問いかけてくるお母さん。

ボクが、さっきまで見ていた――、生々しい夢。

……つい最近まで忘れていた、いや……忘れようとしていたのかもしれない……出来事……。

思い出してしまった……。

おとう……さん。

あえて口に出さなかった……、聞きたくなかったのかもしれない。

みんなもそのこと何にも言わなかった……。

「蒼空？」

ボクの目からはまた涙が出てきていた。

「蒼空・・・？」

お母さんはそんなボクを見て、だんだん心配になってきたのか…

…ボクの頬をやさしくなでる。

「お母さん……」

「なぁに？」

「……お父…さん……」

「…！」

「もう、いない……んだ…ね……」

「会えない…んだ……よ…ね……」

ボクは、自分に言い聞かせるように言って……

そんなボクをお母さんは抱き寄せて……

ボクに頬ずりをしながら……、一緒に泣いていた……。

ｅｐ１２．発端（前書き）

しばらく〝うつ〟展開かも……

ep12．発端

とある山麓の研究学園都市の一角――、篠原製薬の広大な敷地内にある再生医療研究所。

＊　＊　＊　＊　＊

蒼空の父親、柚月（ゆずき）　雅行（まさゆき）はその研究所の情報システム部門システムエンジニアとして従事しており、母親の　結城（ゆうき）　日向（ひなた）はそこへコンピューター関連のオペレーターとして派遣されていた。

二人は同じ職場で働く仲間として知り合い、友人となり、いつしか恋人に……お互い無くてはならない存在となり……そして結婚したのだった。

結婚当時、雅行が２６才…そして日向は２２才であり、まだまだ若く未熟な部分もあったにせよ二人して力をあわせ、幸せをかみしめながら日々を楽しく暮らしていた。

……結婚して１年ほどたち新しい生活にもなれた頃、日向はうれしい知らせを雅行に伝える。

赤ちゃんを授かった……そう伝えると雅行は精悍でありながらもやさしい顔をクシャリとゆがめ、大いに喜んだのだった。

そして１４年前の１０月――、かわいらしい男の子……蒼空は生まれた。

蒼空を生んでしばらくの間は、育児休暇をとり育児に専念した日

向だったが、育児休暇の終了とともに職場へ復帰。
その後の蒼空の世話は、日向や雅行の母親（蒼空の祖母）に見てもらっていたのだが、日向に二人目の娘、春奈が生まれたためまたもや育児休暇をとることとなり、嬉しいやら忙しいやら……なんとも微笑ましいことこの上なかった。
そんな中、蒼空が3才になろうとした頃、研究所内の福利厚生に力を入れるとの副所長の施策で”保育施設”が設けられることとなり……柚月親子は渡りに船とばかりにその恩恵に預かることになったのだった……。

思えばそこから柚月夫妻――、そして蒼空の悲しい運命は始まったのだろう。

篠原製薬再生医療研究所の副所長……篠原　征二（せいじ）、そして彼の率いる先鋭的な一部の研究者らによる、ある企てによって……。

＊　＊　＊　＊　＊

研究所内のある一室で、スクリーンに投影されているデータを興味深げに見る研究者たち……。

その中で、３０代前半に見える、痩せぎすの男がそのスクリーンのデータを指し示しながら報告をしている。

「……保育施……のおかげ…”素体”のベース……細胞の入手が…非常に……となり……

……所内の健康管理センター内においても同様に……
……
サンプル提供者との近親者がいることも非常に……であり……ですが……
……により、素体の成長は順調であり……で……といったところです」
と発した言葉と同時にある映像が、スクリーンに映しだされる。
それを見た一堂から静かな歓声が上がる。
「おぉ……スバラシイね！」
そこに写っていたのは、浅めの透明な水槽の中で人工の羊水に浸かり、いくつかのチューブに繋がれた状態の……人間の〝胎児〟であった。
……その水槽は、７つ　――――　写っていた。
もはやこの集団に、正常な倫理感に基づく思考は存在しえないのかもしれない……。
最後に言葉を放ったのは、副所長である篠原征二であり……〟篠

原製薬社長”　篠原　正剛（せいごう）の息子である。

彼は、元”国立医療研究中央病院”の脳神経外科の”一流”と呼べる医師であったのだが、普段からの言動……そして、やはりその倫理感が問題となり病院を追われたのだった。

しかし、父親の庇護のもと、３５才の若さでこの研究所の副所長にまんまと納まっていた。

ちなみに所長は、社長である正剛が兼務しており、彼は事実上の最高権力者といっても過言ではなかった。

彼の周囲を固めているのは、そんな彼に付き従って病院をやめてきたもの、あるいは同じ研究を行う同志として（彼が利用できると見て）、倫理にもとる行為にもかかわらず行動を共にするものたちである。

本来の再生医療研究からかけはなれて、犯罪行為といえるところまで行っているにもかかわらず、権力を使い隠蔽し露見させない・・・どころか更なる暴挙に出ようとしている彼ら……。

社長であり父親の、正剛　――――　は、そのことについて、息子のその・・・所業について、きっちり把握することが出来ているのであろうか？

あるいは正剛もまた……？

彼らの行為はこれから更に……悪い方へと、深みへと、沈み込んでいく……。

ｅｐ１２．発端（後書き）

ごまかし多くてすみません……なにぶん知識ないもので……

しかし、やっとあらすじの話しが……

ep13．狂気

それらは、篠原らが無作為に選んだ”サンプル”提供者……より採取した組織によって生み出された……。

その組織から作成された人工多能性幹細胞（ＩＰＳ細胞）……を元に作られた、彼らが”素体”と呼ぶ哀れで悲しい……子ら。

彼らのゆがんだ探究心は、今だ実現されていない（表向き、ではあるが）とされる、ヒトＩＰＳ細胞からの子供の誕生を現実のものにしようとしていた。

彼らはまた、誕生させるだけでは飽き足らないとばかりに、作り出された受精卵に更に遺伝子操作を加え、それにより知力・体力を向上させる――技術、をも樹立させようとやっきになって操作、調整を進めていた。

しかし、その技術はとても完成したものとは言えず、その代償は”素体”へと押し付けらていく。

＊　＊　＊　＊　＊

この悪魔の所業が始められてからすでに１０年以上の時が過ぎ去っている……。

７体あった”素体”のうち１体は遺伝子操作の失敗――、２体は生きることを拒んだように死を選び、残りは４体となっていた。

また篠原らの集団も、当初いた9人から1人、2人と抜けて行き……残っているのは3人のみとなってた。

ここにいたってもまだ成功と呼べる結果が出ていない。

”素体”……は、そのかかった年月通り成長は進んでおり、その年齢は世の中で普通に生まれ……成長していれば11才の誕生日を迎えようとしているはず……の子らであったはずだ。

しかし、その年月を経てもそれら”素体”は生命活動はしているものの、その体に意識が宿ることは無く、ただの一言の声を出すこともなかった。

目や口を開くこと――はあってもそれは意識的なものでも、なんでもなく……ただ生命活動のなかでの反射的な動き?といっていいのか、その動きでしかなかった。

そんな篠原らをあざ笑うかのような現実は、犠牲になった子らのせめてもの反抗といえるのだろうか。

「なぜ目覚めない!」

篠原は、ここまで来ておきながら、解決の糸口さえつかめない状況、無駄に時間のみが過ぎていく焦燥感……により本来の目的からずれた、危険な思想にとらわれるようになってきていた。

すなわち――”素体”が目覚めない、の解決を”素体”自体への処置や調整、治療?により行うのではなく……。

目覚めないのであれば、すでに活動していた脳……生きて生活していた同じような年齢の子供の――　脳髄を使えば！　すべて解決すると……。

そういう結論に行き着いてしまったのである。

やはり、彼……彼らは、狂っていたのであろう……。

＊　＊　＊　＊　＊

篠原は、”生きた脳”を入手するため　――　非道な計画を画策しだす。

”素体”　の遺伝子提供者（サンプル）（提供者というのもおかしなものだが）……は全てわかっている。

そのため、脳の挿げ替え時の相性の心配は不要といえる。　なにしろ本人の細胞、遺伝子から造られたある意味、一卵性双生児よりも近い――と、呼べる存在なのだから。

脳移植自体も相当な難易度であるはずだが、篠原はそれには自信があった。

”国立医療研究中央病院”　の脳神経外科の一流の医師であった自分への自惚れともとれるほどの自信が。

設備も研究所内に、権力にあかせて作ってあり、またサポートに

は彼の、残り少なくなったとはいえ同志がいる……。

「……それに”素体”自体の予備は多めに揃ってる……」

篠原は、そんな悪魔のような呟きをこぼす……。

そうして計画は、秘密裡に・・・そして確実に、実行へと移されようとしていた。

時はある年の3月……

その日は、昼からの雨が雪に変わっていった……寒い日。

残る4体、その内の2体こそ……柚月夫妻の子供たち、”蒼空”と”春奈”をサンプル提供者とする”素体”であった。

ep13. 狂気（後書き）

話しが、暗い……

次で暗い話しは終わりにしたい。

ｅｐ１４．暗転（前書き）

サブタイ変更。

ep14．暗転

篠原の立てた計画は、凝ったものでもなんでもなく単純であった。

提供者をなんらかの手段で脳移植をするしかない状況に追い込み、”素体”への移植を行う。

それだけのこと。

篠原は、手っ取り早く交通事故という手段を用い、事故患者として遺伝子提供者を研究所に引き込もうと目論んだ。

その日……。

一人目は失敗だった。

派手にやりすぎてしまい、提供者を死亡させてしまった。

乗っていた車が軽自動車だったことも災いした。

――――次はうまくいくといいのだが。

そして次のターゲットとして選ばれたのが……、柚月　蒼空、そして春奈の兄妹。

篠原は研究所のＳＥである蒼空の父、雅行が休日出勤して片付けようとした業務に横やりを入れ、仕事を無くし自宅にいるよう仕向けた。

雅行が休日に家にいる場合、子供たちを連れて外食に行くことが

多いことも、どこに食事に行くことが多いか……も調査済みであった。

それでもこの日、外食に出るかは賭けだったが、ダメならまた別の手を使えばいいだけのことなのだ。

結果、まんまと図に当たった。

篠原は金でやとった男達に、雅行の運転する車へと衝突事故を起こすよう、今日二度目の指示を出した。

子供たち（どちらかといえば妹の方が良い……兄のほうの”素体”は遺伝子操作のミスで性別が違い、更にアルビノ化してしまっていた）に、瀕死の重傷……極論……脳さえ無事ならいい……を負わせ、後は救急車を装って現場へ行き、子供を回収……研究所に搬送し移植手術を行う段取りであった。

事故を起こす車は盗難車であろうし、その辺りは実行犯である男達……は、その道のプロなのだから篠原が心配することもなく、うまくやってくれるはずだ。（一度目は失敗してはいるが……）

男達は、今度はうまくやった。

父親を死なせてしまうヘマはやったものの、子供の方は完璧だ。

妹の方でなかったのは残念だが、まあ大した問題でもない。

兄の方、蒼空といったか？　は、体のほうはもうダメだな、半分

逝ってる……これを見せれば母親への手術（脳移植）の理由としては最適だろうさ。

救急車を装ったため、母親と……娘まで付いてきてしまった――が、どこに入るかは見せていないし（救急車は外はみえにくい上に、見る余裕もなかったろう）、かえって説明の手間が省けたともいえる。

あとは移植手術をするだけだ……。

＊　＊　＊　＊　＊

研究所の手術用に準備した部屋――。

篠原は、そこに母親と娘を案内した。

……運び込んだ蒼空と　”素体”　についてはサポートメンバー（篠原の同志たち）に任せて、準備を進めさせた。

母親にはこの際、事実を伝えてやる――、やらなきゃ死ぬんだから了承せざる得まいさ。

もっとも、今この状態でまともな判断が出来るかははなはだ疑問ではあるが……な。

母親を見ると、ここまで搬送されシーツを被せられた父親の遺体の横で放心状態に陥っていた。

娘の方は、事故のショックと……泣き疲れてしまったのか、ベン

チシートで寝てしまっていたため面倒がなくていい。

父親（　すでに死亡確認済みだが……　）が寝かされた台の横で脳移植の話しをした。
余計判断力が鈍るだろうさ……息子にまで死なれたくなかろう。

とにかく脳移植すれば助かる……との説明と、
ドナーとなる体があり、それはかねてから成長させてきた「蒼空」君そのもの……と、言っていい体であってこれ以上に相性のいい、脳移植に適した体は存在しない……と説明した。

ドナーについての説明で、母親は顔色を失いながらこちらを見やり、非難する視線をあびせてきたが、今はそれしか助かる方法は無い、（移植を）やらねば死ぬ、それでもいいのか？と、強く出てやると……そもそもこの状況、心身共に疲弊した状況で正常な判断が出来ようはずもなく……半ば強引に同意を得ることに成功し、書類にもサインをさせた。
（実効力のあるものでもないのであるが、サインしたと思わせることに意味がある）

まぁ実際のところ、同意があってもなくても手術はするが、得ておいて損はない。

そして蒼空の脳髄を・・・蒼空の”素体”へと移植する手術は実行され……

……見事成功した。

＊　＊　＊　＊　＊

蒼空の母親……日向と、妹の春奈はあの日から研究所内の隔離棟にある一室で蒼空の様子を見ていた。

蒼空の頭には痛々しく包帯が巻かれていて、そこからはチューブが出て横に設置されている機器に入っている。酸素吸入もされ、体にも数本のチューブが繋がっていて、それで体力を維持させているのだろう。

父親の雅行を荼毘に付し（篠原が付けた、付き添いという名の監視と一緒だが）母娘だけでお別れはしたものの、葬儀は出来ないまま軟禁状態に近い扱いをうけていた。

学校へは連絡を入れさせられた。

交通事故のことを説明し、しばらく休まさせていただきます……と、連絡を入れたため、しばらくは大丈夫なのだろう。

日向は、心身ともにすり減らした状態で顔色も優れず、今にも倒れてしまうのではないかという様子を見せていた。

春奈は、そんなお母さん……そして変わり果ててしまった兄、”蒼空”　を見て心を痛める。

蒼空の姿は事故前のものとはかなり違っていた。

背丈は、春奈より小さくなっているし、その体は華奢というよりやせすぎで、その顔色は青白く、血管が透けて見えるようだ。
それに見える限り……の毛髪は、全て白い。

頭には包帯、顔には酸素吸入用のマスクが付けられているため、その様子は伺いにくいが、表情にはつい数日前までの兄の面影が見え、兄の遺伝子から…っていうのもあながちウソではないのだろうと思えた。

「お兄ちゃん……大丈夫だよね？」
そんな蒼空に話しかける春奈。

当然返事はない。

「どうなっちゃうんだろ……私たち……、お父さん……お父…さん……おと……う……さん……」

「助けて……」

春奈も限界は近い。

日向は、ぼーっと、どこを見るでもなく無気力に座っていたが、そんな春奈を見てはっと我に返り、そして春奈をやさしくその胸に抱いた。

二人はしばらくそうして抱き合い、涙を流した。

日向は、今になっても現実と向き合うことが怖かった。

雅行が、最愛の夫が突然いなくなった。

死んでしまった……、もう二度と会うことは出来ない。

そして息子の蒼空……。

事故で大怪我で……、脳移植をしなければ助からない。

移植をすれば助けられる……と、言ってドナーまで用意してのけたこの研究所の副所長。

おかしい！

おかしすぎる……しかもドナーとなった体は、蒼空の体組織、遺伝子から造った――――、などという。

そんなモノいつの間に準備していたのだ！？

目の前にある蒼空の脳を移植された体はどう見ても１０才以上に成長した体だ。

そんな昔から蒼空は、蒼空に使われた体は”奴”の、奴らの、おもちゃにされていた？

そして今回の事故……。

偶然？　そんなことはありえない！

しばらくして、ポツリと言う。

「嵌められたんだわ・・・目的が何かはわからないけど……」

「雅行さんは殺されたんだわ――――、そして蒼空はこんな目に……」

日向の目から……今は、悔し涙が流れ落ちる。

春奈は胸の中で泣きつかれて眠っていて、母親の言葉は聞こえてはいない……。

そして手術から1週間を経ても、蒼空が目を覚ますことはまだ一度としてなかった……。

＊　＊　＊　＊　＊

しかし、こんなことをしておいて篠原は今後どうするつもりなのか？

いくら篠原製薬社長の息子で、再生医療研究所副所長とはいえ、物には限度というものがあるのではないのか？

更に母親にまでその”素体”のことを知られ……、どう切り抜けていこうと考えているのか？

＊　＊　＊　＊　＊

……篠原は実際のところ、この後のことなど何も考えていなかった。

”素体”が目を開き、動きだすことのみを考え、そのこと意外に考えを及ぼすことが出来なくなっていた。

脳移植を発案したとき……いや、それ以前、狂気に囚われたその時から――――。

彼は破滅へ向かって突き進んでいっているよう……

それは自らが招いた結果。

その時は近い……。

ｅｐ１４．暗転（後書き）

やっぱ展開に無理ありすぎだなぁ……難しすぎだ。

ep15．羞恥心

8月も終わりが見えてきた頃……

日々のリハビリは大変だけど、みんなボクのために一生懸命協力してくれている。

ボクもそんなみんなの気持ちに答えられるよう……いや、ボク自身も早く自由に動きまわれるように……。

何よりも懐かしいあの家に……、家族で暮らしていたあの楽しかった家に、早く帰れるよう――。

ガンバって苦しいリハビリを続けてる。

初めは車イスに乗り移るのも、抱えてもらっての移動だったけど、今では自分でベッドの上を這いながらだけど……なんとか車イスへ乗り移ることができるまでなった。

車イスを押してくれるのは、主に香織さんだけど春奈が来ているときは（なので夏休み中は、ほぼ春奈がその係りだ）その役は春奈がしてくれてる。

トイレに行くのにも大変だ。

今ではもう食事も、固形物の食事も出されるようになってきた（やっぱ普通のごはん、いいよね♪）ので早い話……もよおしてきちゃうのだ。

その時はもちろん、トイレまで車イスを押していってもらう（まだ自分で車イスを動かすことはキツイ）んだけど、春奈ったら心配してなかなかボクを一人にしてくれない。

病院のトイレはボクのように体が不自由な人でも使えるよう、考慮されてるんだから大丈夫って言ってもダメなのだ……。

もちろん、ホントはまだまだとってもキツイんだけど……やっぱ、恥ずかしいよね。

いつもそんな感じで、舌戦を繰り繰り広げつつ最後は出て行ってくれるけど……いいかげん勘弁して欲しいなぁ。

恥ずかしいといえば…今さら？……ながらなんだけど――。

この体。

女の子になっちゃったんだよね……。

目覚めてすぐのころは、そんなこと気にする余裕もなく……まぁ気にしようにも、動くこともままならなかったから仕方ないといえば、そうなんだけど……。

そんなことから、とまどうことが多々あるのは……まぁ、仕方ないことだよね？

元、男の子……としてはさ。

最初にその違いを実感させられたのは、寝たきりだったボクの体を拭いてもらうとき。

モチロン今までもずっとそうしてもらっていたんだろうけど……今まではボクに意識はなかったわけで、今回はボクにはバッチリ意識もあるわけで……。

そのとき体を拭いてくれたのは、いつもホント、お世話になっている香織さん。

春奈はその時は居なかったんだけど、逆に居なくてホッしてるボク。

居たら絶対、私がやる！とかいって聞かないはずだ・・・、そうなったらボクは恥ずかしくてたまらなかったと思う。

いくら同じ女の子になったからって、この歳で妹にハダカを見られるのは恥ずかしいし……、っていうかボク自身、自分のハダカを見るのは初めてだったわけし……。

”？”……、なんだか自分でも何考えてるんだかわけわかんなくなってきた。

自分の体は、キレイだった。

透けるような白い肌で、うっすらピンク色に染まってた。

まだまだ、痩せて華奢な体つきだったけど……目覚めるまではも

っと骨ばって痩せてたらしい……食事をすこしずつでもキッチリとるようになって、ずいぶんマシになってきたんだって。

胸……は、まだほとんど……ちょっぴり膨らんでる程度、しかなかった。

香織さんいわく、これから大きくなってくるから心配いらないわよ？って、……別に大きくなりたいなんて言ったわけじゃないのに……。

そんなに残念そうな顔してたのかなぁ？　ボク。

これからボクも胸が大きくなりたい……とか考えるようになっちゃうのかな？

そして大事なところ……には、やっぱり付いてなかった。

まぁ、自分の体だから最初のころと違って、しっかり感覚で無いことはわかっていたし、体がある程度動くようになってからは、興味本位でそこに触れてみた……こともあったけどさ。

でも目で見るとやっぱり、違う……よね……。

香織さんは、温かいタオルで体を拭いてくれながらも、体に慣れず恥ずかしそうにしてるボクに話しをする。

「蒼空ちゃん、女の子の体はね……とってもデリケートなの。だから赤ちゃんの肌を扱うような気持ちで……大事に、やさしく扱わなきゃだめなのよ？」

いいながらもやさしく拭いてくれている……、あぁ、暖かいタオルが気持ちいいや。

＊　＊　＊　＊　＊

そして今日。

目が覚めてから初めてお風呂に入れてもらえるのだ！

この病院のお風呂はかなり大きくて、１０人くらいは余裕で入れるらしい。

でもボクは、立ち上がることはまだまだ難しいのでそっちには入れず、一人で入る浴槽での入浴になるみたいだけど。

入れてくれるのはお母さんと、香織さんだ。

春奈も手伝いたがったけど、歩けないボクをサポートするには春奈じゃ無理だしね。

春奈には悪いけど、ボクもそのほうが安心だし……ハダカ見られるのもやっぱまだ恥ずかしいし。

「お姉ちゃん、今日はあきらめるけど……いつか、リハビリが進んで歩けるようになったら……一緒にお風呂、入ろうね？　約束だよ！」

春奈がけなげ？に言う。

そんなこと言われて、恥ずかしいからいや……、なんて言えないし……。

「うん、わかった。約束する」
と答えるしかなかった……男の子のままだったらそんなこと、この歳でありえないよね。

＊　＊　＊　＊　＊

「蒼空、お風呂の準備、できたようだから入りましょう」
お母さんがそう言いながら、ボクの服を脱がしにかかる。
香織さんは、浴槽の方で準備をしてくれてたようだ。

ハダカになったボクをお母さんが抱きかかえて、香織さんの待つ浴槽へと向かう……ちょっと恥ずかしい。
でも一人でボクを抱き上げるなんて、お母さんスゴイ！と、変なところで感心してしまうボク。

浴槽は一人で入るのがちょうどいいくらいの小さいもので、家にあるユニットバスよりも狭いくらいだった。
シャワーで体の汚れを流してもらったあと、お母さんと香織さんが二人でゆっくり浴槽に入れてくれる。

いつからお風呂に入ってなかったんだろう……。

久しぶりのお風呂はホントに気持ちよくって……。

「蒼空、どう？　気持ちいい？」

「うん！」
気持ちいいよっ！とお母さんに満面の笑みで答えるボク。

「蒼空ちゃんに気に入ってもらえて良かったぁ！　準備した甲斐があったわ」

香織さんもそんなボクを見てうれしそう。

ボクは恥ずかしい……なんて気持ちは、とうの昔にどっかに消え去ってしまっていて、久しぶりのお風呂を心ゆくまで楽しんだ。

「お母さん、香織さん、お風呂入れてくれてありがとう！　とっても気持ちよくってサイコーな気分だヨ」

感謝の気持ちを言葉にした。

二人は目を合わせてニッコリと笑った。

そしてお母さんはボクのアタマをやさしくなでてくれた。

＊　＊　＊　＊　＊

これからは、1週間に1度くらいらしいけどお風呂に入れるようにしてもらえるみたい。

回数が少ないのが残念だけど、楽しみが増えてウレシイ。

お風呂から出てさっぱりした気分で、香織さんに車イスを押してもらい病室に戻ると、春奈が待ってくれていた。

お母さんは携帯に着信があったらしく、確認しに行くため別行動

だ。

気持ちよかった？と聞かれたので、うん！と笑顔で答えた。

それを見て春奈も、よかったね！と喜んでくれた。

ボクはベッドに寝かせてもらい、ゆったりした気分……、春奈はそれ見て笑顔を浮かべる。

香織さんは用があるからと、病室を出て行き……、入れ違いくらいのタイミングでお母さんが戻ってきた。

お母さんと春奈は軽く目を合わせて頷きあっていた……、なんなんだろ？

そしてお母さんがボクに向かって言った。

「蒼空、明日はここにお客さまが来るの」

「お客さま？　ボクに？」

「そうよぉ、とは言っても蒼空は会ったことない人なんだけどね」

へぇ、そうなんだぁと言いながらもボクは何しにくるんだろ？と疑問に思っていると。

「その時、お話しもあるから明日のリハビリは無しにしましょうね」

「は～い」

疲れてお客さまの相手するのも失礼かな？と思い、ボクもそう答えた。

それにしてもお話しってなんだろ？

……お母さんと春奈の目配せも気になるし。

お客さまってどんな人なんだろ？　と考えながらも、お風呂に入って心地のよい気分だったこともあり……いつしか眠りに落ちていった。

ｅｐ１６．来訪者

今日はお客さまが来るってことで、お母さんがボクの〝おめかし〟をするって言い出した。

ここは病院なんだし、ボクは患者なんだし、患者服のままでいいじゃないって言っても聞いてくれない。

お母さんと春奈は、ずいぶんとその人のお世話になったみたい（ボク自身もお世話になってるらしい…、ボクは当然知らないけど）で、失礼なカッコでは会わせられないって…、ボクの意見は総無視の構えだ。

春奈もモチロンお母さんの味方だから、ボクに勝ち目なんてあろうはずもなく……。

ボクは、生まれて初めて……、す、スカート！　を履くこととなった。

元男の子だから、当たり前といえば当たり前なんだけど、うぅ、複雑だ……。

だいたい会うにしても、どうせボクは車イスに乗ってるんだから、わざわざスカート履く意味あるのかなぁ？　と、まだブツクサ言ってると、

「お姉ちゃん、いいかげん覚悟きめたら？」

春奈が、にやけ顔でおっしゃる。

「お姉ちゃんは、すっごくかわいい女の子なんだからキレイなお洋

服着ないと、もったいないよ？」

「それに今日来てくれるお客さまも、お姉ちゃんのかわいい姿見たらきっと喜ぶよ！」

春奈め、たて続けにだめ押ししてきたよ。

「じゃ、今日はこれを着てもらうからね～♪」

そう言って、春奈はボクに着せるために買ってきたのであろう、洋服の入った包みを見せる。

「昨日、お母さんと二人でお姉ちゃんのために選んできたんだからね？　きっとすごく似合うよ！」

「かわいさ１００倍かも？」

ついにそんなことまで言い出す春奈。

更に……、

「ね～？」

と言いながら、春奈がお母さんに振る。

「そうよねぇ～、きっと喜んでくれるわぁ」

「それにお母さんも、かわいく着飾った蒼空ちゃん、見てみたいしね」

「……」

＊　＊　＊　＊　＊

ボクは、お母さんと香織さんに支えてもらいながら春奈の着せ替え人形と化していた。

みんなすごく楽しそう。

かわいい、かわいいって言いながら、ボクはなすがままにされてる。

そんな着せ替え人形だったボクの前に、春奈がある物を立てかけた。

「はい、お姉ちゃん！　これ見て？」

それは、全身を見るための姿見だった。

こんなものいったいどこから持ってきたんだろ？　病院の備品なのかなぁ？　と、どうでもいいことを考えつつも鏡を、恐る恐る見てみると……

鏡の中には、上目遣いでこちらを伺う、真っ白な髪に透き通るような白い肌、それにウサギのような赤い目をした、触れれば壊れてしまうんじゃないかと思える、かわいらしい女の子が写っていた。

女の子になってからの……、全身の姿をこうやって見るのは初めてじゃないだろうか？

ボクは写ってる自分の姿をじっと見つめた。

春奈とお母さんが買ってきてくれたのは、胸元にリボンの付いた淡いピンク色をしたワンピースだった。　それに、七部袖のカーディガンを羽織らせてくれて、足元にはレースのソックス。

（ついでに下着まで買ってきてくれてあったのはどうかと思うけど……しっかり履かされたし）

まだじーっと見つめているボク。

じれてきた春奈が問いかけてくる。

「お姉ちゃん、どう？　気に入ってくれた？」

はっきり言って……、我ながら……、かわいいって――、思ってしまった。

自分の姿なのに。

「う、うん……、まぁ、い、いいんじゃないか…なぁ？」

ボクは、顔を…たぶん赤くして、うつむきながら答えた。

「ふ～ん？」

そう言いながら、春奈はボクの顔を覗き込んで…、見透かすように笑うと――、

「お姉ちゃん？　思ってることは正直にいった方がいいよぉ？　すっごく気に入りましたって顔してるもん？　ねぇ、お母さん？」

「春奈、お姉ちゃんをあんまりからかっちゃダメよ。　まだ女の子の姿になれてないんだから……ね」

やっぱりお母さんだ…、春奈とは違うよ、とボクがうれしそうに顔を上げると……

「でも蒼空。　ほんとにすごくかわいいわぁ！　似合ってる、もう

食べちゃいたいくらいにかわいいわぁ！」
やっぱり、お母さんも一緒でした。

更に、

「ほんと、すっごくかわいい！　せっかくかわいいのに、ずっと患者服ばっかりで、かわいそうだなぁ　って思ってたんだけど、こんなに可愛い服着せてもらっちゃって、よかったねぇ？　蒼空ちゃん」
香織さんまでそんなことを？　……ボクに味方はいないようです。

ボクは、（たぶん）耳までまっ赤になったままうつむいて、みんなが飽きるのをじーっと待つしかなかった……。

やれやれだよ。

＊　＊　＊　＊　＊

お客さまを迎えるために、お母さんは談話室を借りることにしたみたい。

談話室はいくつかあるものの、僕たちが貸し切ってしまって、ちょっと他の患者さんに悪い気がした。
（まだ他の患者さんとお話ししたことはないけど……）

ボク自身の体調は、元々病気ってわけじゃなかったから、特に問題はない。

とは言ってもいろんな病気に感染しやすいから、うかつに出歩いたりしちゃダメ　っていわれてるけど――、それでもずいぶん体力も付いてきたから、そのうち外に出してもらえるんじゃないか？と期待してる。

携帯をしてたらしいお母さんが、病室に入ってきて言う。

「蒼空、お客さまがもう少しで病院に着くみたいだから、談話室に行きましょうね」

「は～い」

ボクが答えると、春奈がボクの車イスに寄ってくる。

いつお客さまが来てもいいよう、車イスに座って待機してたのだ。

「春奈、それじゃ談話室までよろしくね！」

「うん、まかせて！」

そのままボクと春奈は、談話室に向かい、お母さんはお客さまを出迎えに１Ｆのロビーへ向かった。

（ちなみに、病室は３Ｆ、談話室は２Ｆにあるのだ）

看護師の香織さんも、今日のお客さまとは面識があるらしく同席するみたい。　先に談話室の準備があるから…と、出ていってるので今はもういない。

今さらながらどんな人なんだろ？　今から会うお客さまって？

みんな、どんな人なのか聞いても教えてくれないし。

ちょっと不安になってきた――。

そんな気持ちが態度に出ていたのか、春奈が話しかけてきた。

「お姉ちゃん、心配しなくていいよ？　今から会う人は、すっごくかっこいい、いい人なんだから！」

春奈は、そう言って車イスを押す力を強めた。

＊　＊　＊　＊　＊

談話室で、ボクと春奈、それに香織さんがそろって間もなく、お母さんが入ってきた。

お母さんの後ろから、もう一人…お客さまだろう、入ってきた。

ボクは、恐る恐るその人を見ようと、不安でうつむいていた顔を上げようとしていた矢先に……

「きゃ～！！　蒼空ちゃんね～！」

「か、かわいい～！！」

そう言うなり、そのお客さまは…ボクに飛びつくように抱きついてきた。

ボクはしばらくあっけにとられ、呆然としたまま抱きつかれていたのだった……。

ep16. 来訪者（後書き）

ファッション……わかりません。
適当ですのですみません。

ep17．狂気のゆくえ

「え？　えぇ～？」
何なのこれ？　何が起こったの～？？
お母さんに連れられて入ってきたお客さま……、いきなりボクに抱きついてきちゃったよぉ！！
抱きついてきたのはスーツを着た女性みたい、なんだけど……困ったボクは、その女性の肩越しに周りを見やる。
みんな、やれやれといった感じで苦笑いしてる……。

「あ、あのぉ～？」
ボクが戸惑いつつ声をかけると、ようやく我に返ったのか、ぱっとボクから離れ周りをうかがうと……、ペロッと舌を出しテレ笑いする。

「ご、ごめんなさいっ。　あまりのうれしさと、蒼空ちゃんのかわいさに……思わず～～！」
といいつつ手を合わせ、ゴメンっとゼスチャーをする。
そして、お母さんと顔を合わせてうなずき合い、改めてボクの方に体を向け目線を合わせるようにしゃがんでくれる。

「こんにちは、蒼空ちゃん。　はじめまして！　さっきはいきなりでごめんなさいね」
と再びあやまり、改めてあいさつを始めるお客さま。

「私は、朝比奈（あさひな）　麗香（れいか）っていいます。　蒼空ちゃんとは、こうして会うのは……初めてなんだけど、お母さんや春奈ちゃん、それに西

森さんとは仲良くさせてもらってるの」

「は、はじめまして……。　ゆ、柚月　蒼空です」

ボクもわかってることとはいえ、一応あいさつを返し、自己紹介してくれた女性…朝比奈さんを見る。

朝比奈さんは、ショートヘアで目元がキリっとしててすごく活動的な雰囲気のする、かっこいい…お姉さんみたいな人だ。　背も高くてお母さんよりも上じゃないかな？　香織さんと歳は同じ（香織さん…春奈に聞いた話だと２６才らしい）か、ちょっと上みたいな感じだけど、タイプ的にはぜんぜん逆かなぁ？

「う～ん、それにしても蒼空ちゃん！　か、かわいすぎるわぁ…、そのワンピースもすごく似合っててかわいいっ、もうお持ち帰りしたいくらいだわぁ！」

そう言いながらボクの手をとりつつ、自分のほっぺにすり寄せ、うれしそうに微笑んでる。

そんな感じで盛り上がってる朝比奈さんを見つつ、お母さんがボクの方に近づいてきて、

「蒼空。朝比奈さんはね、刑事さんなの。　蒼空が目を覚ましてすぐにお話ししたこと……覚えてる？」

「う、うん」

朝比奈さんが、刑事さん？　それであの時の話？　……なんだか聞きたくない。

ボクは、楽しい気分が一転、心が暗く沈んできた気がする……。

でも聞かなきゃいけないんだ、と嫌な気分を押さえ込んで聞いた。

「脳移植のときの……、お話し？」

「そうよ…、蒼空が事故にあって、移植を受けたときのお話し」

ボクは、こわばった表情になり見るからに落ち込んだ雰囲気になってしまった。

お母さんは、そんなボクを気遣いながらも朝比奈さんに席へ座ってもらうよう促し、話しをお願いしていた。

どうやら朝比奈さんが、この前の話しで言ってた〝くわしい人〟みたい――、そりゃそうか、刑事さんなんだもん。

席についた朝比奈さんは話を切り出した。

「まず私のことなんだけど、Ｉ県警刑事部の捜査第二課で警部補をしてます。　まぁ、当時はまだ巡査部長だったんだけど……」

と自分の立場を説明してから続ける。

「蒼空ちゃん、すごくつらい話しで聞くのがこわいって気持ちもわかるけど、ガマンして聞いてね？　この話しは蒼空ちゃんのためにも知っておいてもらわないといけない話だから……」

「は、はい」

ボクは、こくり…とうなずいた。

春奈は、沈んだ顔をしてお母さんの横に、すり寄るようにして座ってる。

香織さんは、朝比奈さんの隣で無言のまま座って、ことの成り行きを見ている感じ。

朝比奈さんは、静かに話を始めた――――。

＊　＊　＊　＊　＊

……。

あの事故が偶然じゃない？

ボクの脳髄が目的だった！　……しかも春奈も同じように狙われて？

お父さんは、それに巻き込まれて……。

聞かされる話は、ボクの気持ちを切り裂くように、深くえぐるように――。

”素体”　？ボクの体の一部から造り出した体？　今のボクはそれに脳移植された……。

女の子になったのはその時の遺伝子操作のミス…、先天性白皮症（アルビノ）になってしまったのもその時の影響。

篠原　征二……、そいつが、ボクたちの家族を、お父さんを……。

「篠原　征二はね、研究所でその　”素体”　を胎児から子供の姿

になるまで成長させることまでは成功させてしまったのだけど……、その子達はどうやっても目覚めなかった、らしいの」

「それで、何をどう考えてしまったのか……、活動している人間の脳髄に入れ替えれば目覚める、と考えて――、あんな悪魔のような計画を実行に移してしまったの」

「入れ替えてしまったら、それはもう”素体”っていう、1個人が目覚めたことにはならないのにね」

「篠原　征二は、その時点である意味、すでに精神に異常をきたしてのかもしれない――、といわれてるわ」

朝比奈さんは、さらに申し訳なさそうな顔をして続ける。

「実は、この事件の少し前から私たちは　”再生医療研究所”　の副所長である篠原　征二、及び彼の取り巻きである研究員について、内偵を進めていたの」

「篠原　征二の　”元”　取り巻きだった男からの内部告発もあって、もう少しで検挙にこぎつけるって所まできていたんだけど――、一足遅かったの……ごめん、ね」

「私たちが捜査令状をとり、研究所内の研究施設に強制捜査に入ったときには全てが終わったあとだった……」

そう言って朝比奈さんは、お母さんを見て悲しそうな顔をした。

「突入したとき、蒼空ちゃんはすでに手術が終わって数日経っていて、でもやっぱり目覚めてなくて……。　お母さんと春奈ちゃん、二人もそこで軟禁されてたの」

春奈は泣いているようで、お母さんに慰められてる。

ボクは、呆然と――、でも聞き入ってる。

「お母さんと春奈ちゃんは、かなり憔悴はしてたけど無事保護して、蒼空ちゃんも……取り返すことが出来たのだけど、お父さんについては――――」

朝比奈さんが、辛そうな顔をする。

ボクは代わりに言った。

「はい、わかって…ます。　わかって……」

言わなくてもわかってます……、だから、無理して言わなくていいって、言いたかった。

思い出してたのだから……、あの事故のことは。

「ごめんね、蒼空ちゃん」

朝比奈さんはそう言うと立ち上がり、ボクの方へ近づいてきて……、ボクの頭をやさしく胸に抱いてくれた。

ボクは、ガマンしきれず……その胸の中で泣き出してしまった。

＊　＊　＊　＊　＊

ボクの気持ちが落ち着いたところで、もう少しだけ朝比奈さんは話しを続けた。

篠原　征二は、強制捜査のとき、研究施設内に立て篭もった末に……、世の中から永遠に姿を消した。

研究成果であり残った3体の”素体”と、その設備と共に。

自ら起こした、

大気を震撼させる大きな爆発――――、によって。

残った篠原の協力者、同志の研究者は逃亡していたもののすぐに捕まり、この事件はほぼ解決へと向かっていたが、交通事故を装った男達の消息については結局、ようとして知れない。

篠原製薬の社長であり篠原　征二の父、正剛は、その責任を取って社長を辞任し潔く引退をしたという。　またその息子の行いに気付くこともなく?、多くの人々に迷惑をかけたことを悔やみ、その保障は私財をなげうってでも行うと言っていると……。

裁判も行われている（主犯格はすでにいない）らしいけど、その費用も被害者には迷惑をかけないと言っていると。

――なんだか、この元社長の態度は釈然としない……。

なんか納得できないし、したくない……。

これは、ボクなんかが言っても仕方ないことなんだろうけど。

お父さんが、かわい…そう…だよ……。

＊　＊　＊　＊　＊

結局、話しは2時間近くに及んで、終わったのは15時をまわったころだった……。

ep18．目標

「思ったより時間、かかっちゃたわね。　蒼空ちゃんごめんねぇ、疲れちゃったでしょう？」
朝比奈さんがそう言いながらボクのアタマをなでる。

「それに今さらの言葉になっちゃうんだけど、目が覚めてほんとに良かった……、こうして蒼空ちゃんとお話することが出来る日が来るなんて夢のようだわ！」
　朝比奈さんは目に薄っすら涙を浮かべながら言い、続いて春奈にも話しかける。

「春奈ちゃんも良かったね、お姉ちゃんの目が覚めて。　あきらめずにずっと見守ってきた気持ち……報われたね！」

　労わりの言葉をかけられた春奈は、うんうん　とうなずきながら泣き、お母さんにぎゅっと抱きついてる。　午前中のはしゃぎようがウソのようだよ――、心配……かけてたんだなぁ。

　ボクはお母さんや春奈、香織さん、それに朝比奈さんがこうして涙を流してくれてる姿を見て、どれ程みんなが心を痛めていたのかがわかった。　そして、目が覚めて良かった、みんなを安心させることが出来てよかった……と、心の底からそう思った。

「みんな――、今まで心配かけてごめんね。　助けてくれてありがとう！」

「こうしてお母さんや春奈にまた会えて、ボク……」

最後は言葉が出なくなって……ボクも涙が止まらなくなり、そばに来てくれたお母さんに抱きよせられて、そこで思いっきり泣いてしまった。

＊　＊　＊　＊　＊

みんなで泣き合った？あと、香織さんが遅めになっちゃたけど”おやつ”　を食べましょう　と提案してくれたので、そのまま談話室でのお茶会へと早変わりした。

暗くなった雰囲気を拭い去るいい提案、香織さんグッジョブです！

香織さんは、あらかじめ準備してくれてたみたいで、すぐテーブルにケーキと紅茶（朝比奈さんはコーヒーだ）を並べてくれた。

春奈もそれを手伝って、ボクには昔から好きな苺のショートケーキを手渡してくれた。　ちなみにお母さんと香織さんはモンブラン、春奈はボクと同じ苺、朝比奈さんはチョコレートケーキ、……みんなおいしそうだなぁ。

さっきまでの暗い話しからガラリと変わって、楽しそうに話を始めるみんな。

「蒼空ちゃん、私のことも名前で呼んで欲しいなぁ？」

朝比奈さんがそうボクに要求してきた。

「え、名前でですか？　いいのかな、そんな初対面で」

ボクが遠慮してそういうと……

「いいのいいの！　私も蒼空ちゃんって呼んでるんだし、香織のことは名前で呼んでるのに私は呼んでもらえないなんて、なんか不公平っ」

そういって拗ねたふうの朝比奈さん――、あなた子供ですか？

「じゃ、じゃあ、麗香…さん？」

恐る恐る呼んでみる。

「そうそう、それでいいのよ～、うふふっ」

目を細めて、うれしそうに笑う麗香さん。　かっこいい女の人が笑うとすっごく魅力的だよ。

「もう強引なんだから、あまり蒼空ちゃんを困らせないでくださいね？　麗香さん」

それを見て呆れる香織さん。

そんな中、ケーキを味わうボク。

目覚めてから初めて食べるケーキ、味は以前（の体で食べたとき）と同じでおいしく感じて安心した――、と言うより以前より更においしく感じるようになった気がした。　これってすっごく久しぶりに食べたせいなのか？　それとも女の子の体になったせい？

まぁ、どうでもいっか……おいしいんだしっ♪

食べながら楽しい話に花を咲かせてるみんな……、いいなぁこういうのって。

すごくホッとして、気持ちが落ち着くよ。

そんな安心感からつい気楽に――、

「あ、そういえばちょっと聞きたいことがあるんだけど？」
ボクは最近疑問に思いだしたことを、せっかくみんなそろってるんだからと聞いてみることにした。

「ん？　なんなの、蒼空？」
お母さんが聞き返す。
みんなのボクの方を注目する……、そ、そんなに注目されると恥ずかしい。

「あのね、ボクって男の子から女の子に変わってしまったわけじゃない？」

「それにボクは今１４才で、１０月には１５才になるんだけど、そのぉ…見た目は、よくて中学生になったくらいの子、なわけでしょ？」

だから――――、

「僕の性別とか、それに学校……とか、どうなるのかな？って思って」

思いがけない質問にみんなは一瞬かたまって、シーンとなってしまった。

いち早くお母さんが立ち直り、
「そ、そうねそのことはお母さんもどうしようか悩んでたんだけど……」
ちょっと動揺しつつもお母さんは、香織さんや麗香さんの方を見ながら話しを始める。

「まずね、男の子から女の子になってしまったことに関しては、もう女の子として認められてるから安心して」
そう言ってボクのアタマをなでる。

「前例のないことだったから色々大変だったけど、裁判所との対応や手続きなんかは、警察や病院の方々から、色々手を尽くしていただいたのよ」

「麗香さんや石渡先生、もちろん香織さんにもね」
お母さんはお礼の意を込めて、軽く二人に頭を下げる。

それを受けたように香織さんが、ちょっと補足してくれる。
「まぁ、”性同一性障害”　とかと違って、蒼空ちゃんの場合、ほんとに体は女の子なんだから認めてもらうのは当然で簡単なほうだったと思うよ、蒼空ちゃんの気持ちはともかく――、なんだけど」

ボクの気持ちかぁ……、女の子になる決心はしたけどそう簡単には割り切れないよね、やっぱり。

「それでね、学校のことなんだけど……」
お母さんが続きを始める。

そう、学校！これ大事だよ。　どうなっちゃうの？

「蒼空は中学1年終わりくらいから今までずっと授業を受けてなくて、今はもう3年生の途中の時期になってるのね、――義務教育の半分以上を受けてない状況なの」

「それに、まだまだこれからリハビリをして歩けるよう頑張らなきゃいけない状況の中で、残りの期間を中学に通うなんてこと無理で

しょ？」

ボクはそれを聞いて愕然とした――。

先の高校のことはともかく、このままじゃ中学すら卒業出来ないのかな？

ボクは悲しい表情を浮かべてしまったのだろう、それを見てお母さんが言う。

「心配しないで、蒼空」

そう言ってボクをなでてくれるお母さん。

「中学の勉強については、家庭教師をつけて勉強を教えてもらうようにするわ。　かなり詰め込みの勉強になってしまうと思うけど……蒼空、頑張れる？」

そう聞いてくるお母さん。

「うん！　ボク、がんばるっ！！」

「そう、良かった。　ちゃんと頑張れば中学を卒業したって資格も、もらえるのよ。もちろん中卒認定試験（正確には中学校卒業程度認定試験）っていうのを受けなきゃいけないんだけど」

中卒認定試験…そんなのあるんだ？

「ただ、その試験があるのは１１月なの。　蒼空、さすがに今年の１１月に受けることは難しいと思う……、ホントなら来年から高校生の歳だけど、１年我慢してその次の年から…、春奈と一緒に高校に行くことを目標に頑張らない？」

ううっ、1年遅れの高校入学か……でも仕方ないよね、今のボクの状態じゃそもそも外にも出れないわけだし――。
春奈と一緒に高校入学かぁ、それもいいかもしれないなぁ…ふふ。
でも、まだ入学試験ってのもあるんだし！　……ああ先が思いやられるなぁ。

「蒼空？　どうしたの？」

「う、うん。　そうだよね、今年いきなりそんな試験受けられないし……」

「お母さんの言う通り、今年はあきらめて来年、中学卒業の資格取れるようがんばる。　そして、出来れば――だけど、春奈と一緒に高校に行けるよう努力するっ！」

「お姉ちゃん！　私も応援する。　私もお姉ちゃんと一緒に高校行けたらうれしいもん！　一緒にがんばろっ♪」
そう言いながら春奈は近寄ってきて、ボクの手を握った。

「春奈、あ、ありがとう！」

なんだか、おやつ時のちょっとしたお話から、すごい展開になってしまった。
まぁ、元々話を振ったのはボクなんだけど――――。

でも、これから漠然と、目標もなくただ過ごすよりはよっぽどいいよね。
リハビリするにも、勉強するにも、何か目指すものがないとやる気が出ないもんね。

でも、勉強かぁ……ちょっと、というか、かなりいやかも。

「蒼空ちゃん、いい目標が出来たじゃない？　私も応援するからね、何かして欲しいことがあったらいつでも言ってね！」

麗香さんが言うと、

「あ、私もモチロン応援しますよ！　リハビリもビシバシいきますからね？　覚悟しといてねぇ～」

香織さんも負けじと言う。

ビシバシは勘弁して欲しいです。

「みんなありがとう、ボク…がんばります！」

そんな感じで話しはまとまり、お茶会はお開きとなったのだった。

勉強――、憂鬱（ゆううつ）だなぁ……はぁ。

ep19．幕間

＝＝　甘えんぼ　＝＝

夏休みが終わり、学校が始まってからの最初の週末。

いつものように蒼空のリハビリが終わって家に帰ってきた春奈が、晩ご飯の支度している日向のところに向かう。

「ただいま～」

「お帰り春奈、リハビリのお手伝いご苦労さま！」

ううん、そんなの当然のことだもん　と健気なことを言いつつ問いかける。

「ねぇお母さん？」

「なぁに、どうしたの？」

「あのねぇ私、お姉ちゃんが目覚めてからずっと、なんとなく思ってたんだけど……」

「何を思ってたの？」

「うん、えっとね、お姉ちゃんってさぁ……、来月には１５才になるって割りにはさ、子供っぽ過ぎないかなぁ？　なんて思って」

妹の私が言うのもなんだけど、といって続ける。

「それってやっぱ、１３才のころから眠り続けてたのとか、女の子の体になったのとか…が原因なのかなぁ？」

「それにお姉ちゃんの体の年齢って、まだ１１才くらいなんでしょ？」

まじで子供だもんねぇ…とため息。

日向はそれを聞いて、ちょっと考えるそぶりを見せてから答えた。

「そうねぇ、確かにちょっと甘えんぼさんだなって感じることは多いわねぇ……、普通１４・５才の子供なら、反抗期でけっこう大変だったりするのかもしれないけど――」

「ウチの場合はちょっと色々あったし、春奈もそうだけど反抗期ってものとは無縁だったしねぇ」

と春奈を見ながら言う。

「やっぱり１年半近く眠っていたことが大きいのかも知れないわねぇ……、蒼空の中では１３才の時のまま止まっていて、まだ気持ちはあの時のままなのかも？」

途中から、ちょっと寂しそうな顔をして話す日向。

「それに目が覚めてすぐ、いろんな環境の変化や、事件のこと、なによりやっぱり女の子として生きて行かなくちゃならなくなったんだもの……、不安な気持ちが大きくなって、どうしても甘えたくなってしまうんじゃないかしら？」

春奈は日向の言葉を受けて、

「うん、そうだね――、そうだよね、不安に決まってるよね」

自分に聞かせるように繰り返し言った。

「体の年齢は確かに11才ちょっとらしいんだけど、それに心が引きずられることがあるのかどうか？　は、お医者さまに聞かないとわからないけど――」

「いずれにしても――私たちは、家族なんだから蒼空のことしっかり支えてあげなきゃね？」

そう言って日向は、隣まで来た春奈をそばに寄せ腕のあたりをやさしくなでてあげる。

「私、お姉ちゃんが不安に思わないよう出来る限りのことする！」

「春奈はホントいい子ねぇ、いい子に育ってくれてお母さんうれしい……」

そう言って今度は頭をなでる。

「えへへぇ」

うれしそに満面の笑みを浮かべる春奈。

「あと、女の子のしゃべり方とか、おしゃれの仕方とか色々覚えてもらわなきゃいけないね？」

とちょっと意地悪そうな顔をして言う。

「まぁ、春奈ったら！」

そういいつつ更に、

「蒼空ちゃんこの先、やること山積みで大変そうね？」

と一言。

そして二人は顔を見合わせて――、「うふふっ」　と笑うのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

＝＝プレゼント＝＝

１０月２７日――、この日はボクの１５回目の誕生日。

目が覚めてから３ヶ月近くが過ぎ、リハビリは苦労しながらも少しずつ進み、車イスでの移動くらいは一人で出来るようになり――、今は立ち上がることまでは出来るようになった。

（まだふらついて、すぐこけそうになっちゃうけど）

そんなボクのがんばり（自分で言うのもなんだけどがんばってるよ、ボク）に対するご褒美もかねて、誕生パーティーをみんなが開いてくれた。

病室での、ささやかではあるけど心のこもったパーティー。

モチロン石渡先生の許可はキッチリもらってるから問題は何もないのだ。

おいしいケーキや、お菓子、もちろん”プレゼント”っも、貰って楽しく充実した日を過ごすことが出来てすごく幸せな気持ちになった。

プレゼントなんだけど、ボクにとってはとてもありがたい病院の方々ならでは、の品物ももらった。

一つは杖、そしてもう一つは携帯用のルーペだ。

杖は、まだまだふらついて危なっかしいボクが、体を支えるのに重宝しそう。

カーボン？っていうすっごく軽くて丈夫な素材で出来てて、長さ調整も出来、しかも折りたたむことまで出来ちゃう！　見た目もけっこうカッコいい…とても杖といってバカに出来ない逸品なのだ！

携帯用のルーペは、視力がかなり弱いボクのために（ホントはしたくないけど）勉強するときや本を読む時なんかに字を大きくして見れるようにと贈ってくれたんだ。

これって暗に勉強しっかりやれって言われてるのかなぁ？

ちなみに、杖が石渡先生、ルーペが香織さんだ。

普段も色々お世話になって迷惑かけてるのに、こんなプレゼントまで貰っちゃうなんて
ボクはホント、感謝の言葉しか返せなくて申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

だからせめて心をこめてお礼をいいたいと思います。

お母さんに春奈、石渡先生、香織さんに麗香さん、いつもボクが迷惑をかけているいろんな人達……、こんなボクをいつも助けてくれて――、

「ありがとう！」

＊　＊　＊　＊　＊

＝＝　ある少女の煩悩　＝＝

私は、病院で天使を見た！

その子を見たのは、私が自転車で転んで左足の腓骨（膝と足首の間）を骨折し手術のため入院したときのことだった。

あ、私は、渡辺（わたなべ）　沙希（さき）　ちょっとドジっ娘？　の１３才、中学２年の　”かわいい”　女の子！（自画自賛よっ）

そんな私は、手術が終わってしばらくは安静にしてないといけないってことで、２週間の予定で入院することになってしまってて。

４人部屋だったんだけど、うまい具合に居るのは私一人。（これも私の人徳ってやつかなぁ？）

骨折の痛みはなかなか治まってくれず、気を紛らわすために何かする？っていっても、そこは病院、見事にすることは何もない。

まあやろうにも足はキッチリ固められちゃってるから大したことも出来ないし。結局ＴＶを見るか、雑誌を読むかってことくらいなわけで……。

誰かお見舞いにでも来て、私の暇をつぶしてくれないかなぁ？

まぁ、来るとお約束のギプスに落書き、なんかされちゃうんだろうけどさっ……。

ママもまだ来ないしなぁ。

はぁ、とりあえずおトイレ行ってこよ。

入院して１週間も経つと松葉杖の使い方なんかはもうお任せ！って状態になってるんだもんね～、うふふ。

そしてトイレに向かってよたよた歩いていく途中……、日曜日で閑散としてる通路で私は　”天使”　を見た～！

その子は、年の頃は私と同じかちょっと下くらい？
車イスに乗ったその子は、すっごく小柄で、かわいくてキレイな女の子、なんだけど何より驚くのはその髪の毛！

真っ白！真っ白なの～！！

それはもう雪のように白くてキラキラしてて、それにお肌まで透き通るように白くて…もう信じらんない！！

マジ天使～♪

ああ、触ってみたい、なでてみたい、ハグしてみたい～！

私は、根性だしてちょっと挨拶でもしてみようと近づいていったの。
そしたら更に驚きの発見！

目が、目が～、赤いの、ルビーみたいに赤いのよぉ～！！
なにそれ、ファンタジー？　ありえない――、か、かわいすぎるわぁ♪

私は脳内で妄想が爆発してしまい、思わずその子の前でよろけてもう少しで転んでしまいそうになってしまった。（は、恥ずかしい）

「あ、危ない！」

天使ちゃんが声を出す。　（今よりこの子は天使ちゃんと命名♪）

きゃ～、声までかわいぃぃ～！！（天使ちゃんは私がうまく歩けないでよろけたと思ったんだろうなぁ…）

「だ、大丈夫ですか？」

天使ちゃんが、なかなか現実復帰しない私を怪訝な顔（その顔もカワイイ！）で見ながらも心配してくれてる――、いけない、このままじゃあやしい子だ。

「あ、ごめんなさい…驚かせちゃって」

私は思いっ切り、猫を3匹くらいかぶって…かわいい声で言葉を返した。

「ちょっと、つまずいただけだから全然平気です！　心配してくれてありがとう」

にこっとスマイル、これでも私はクラスでもかわいいと評判の子なのだ、エヘン。

「そうですか、良かった」

天使ちゃんも安心したのか、そう言いながら微笑みを返してくれた。

すごいよ私、初対面でいきなり会話までしちゃったよ！

天使の微笑みまでもらっちゃったよぉ！

もう私の脳内煩悩はＭＡＸです。

……そして私の、ボウ○ウもＭＡＸです。　ひぃ～！

私は、挨拶もそこそこに慌てて（でも松葉杖なのでよたよたと）トイレに駆け込んだのだった……。

今度はコレをネタにもっといっぱいしゃべって、絶対お友達になってもらうんだから！

あ！　名前…聞いてない――――、がっくり。

ep20．友達

女の子の体になって初めて…、友達が出来たみたい。

事故の前の、中学のときの友達とは会う勇気は持てないし、たとえその気になったとしても今はまだ会いに行くこともできないし――。

だから年の近い子の友達が出来る…、なんてことはまだ当分は無理って思ってた。

きっかけは、偶然だった。（出会いって、そもそも偶然から始まるものかな？）

日曜日の午後、めずらしく春奈が友達と遊びに出掛けた（春奈にはもっと自分の時間をとって欲しいんだ…）ので、暇してたボクは、リハビリもかねて病院内をお散歩しようと、車イスでウロウロしてたんだ――。

車イスを動かすには、両輪についてるハンドトリムを回転させなきゃいけないから、筋力がまだ充分でないボクには結構な重労働なのだ。（もう全身運動みたいなものだ）

土・日は、外来が基本お休みだから通路もあんまり人がいなくて動きやすい。

それに人が多いとチラチラと覗き見されて恥ずかしい……、ボクの姿は、やっぱめずらしいのか、相当目立つみたい。（まあ、あからさまにじっと見てくる人はそうはいないけど）

それでも、最近はこうやって一人で車イスを使っての、お散歩をよくするようになった。

春奈は最初、心配してなかなか一人でのお散歩をさせてくれなかったけど、香織さんも説得に協力してくれて最後には折れてくれた。

今では、行く前に一声かけさえすればよほどのコトがない限り、お散歩に行かせてくれる。　みんな、ずっと病院から出られないボクに、気を使ってくれてるのかなぁ？

話しが、それちゃった。

で、２Ｆの談話室方面に行ってから、そろそろ自分の病室の方へ戻ろうとした時だった――、その子に出会ったのは。

見た目はボクと同じくらいか、ちょっと年上（見た目だよ、見た目）に見える、背の低い、でもボクよりは高い女の子で、

――ボクはこの間身体測定されたら、１４２ｃｍだった……小さすぎてショック大きすぎ。

あ、またそれちゃった。

その子は、髪の毛をツインテールにした、ちょっとたれ目の、でもとってもかわいい女の子だったんだけど……ボクと目があったとたん――、すさまじいまでの　”がん見”　をされてしまった！

いや、たぶんその前から見られてた気がする……。

（ここまであからさまに見られると逆にすがすがしい気がしてくるよ……）

その女の子は、骨折したのか足をギプスで固定されてて松葉杖で歩いてたんだけど、気を（ボクの方へ）そらしちゃったせいか、つまずいて転びそうになっちゃった。

だからボクも思わず、危ないっ！　って声を出しちゃった。

まぁ、なんとか立て直したみたいだったけど、ぼーっとした感じで動きが止まっちゃったから一応、大丈夫ですか？って聞いてみた。

問題なかったみたいで、平気…、ありがとう　って笑って答えてくれたので、ボクも良かった　って笑って答えたんだ。

でも、その後すごく青い顔になってきて、じゃ急ぎますから　って感じで慌てて離れていっちゃた。

大丈夫なのかなぁ？　変わった子だなぁって、その時は思った。

＊　＊　＊　＊　＊

「ねぇ、吉田さん知ってるかな？」
私は検温に来た看護師さんに聞いてみた。

「どうしたのぉ？沙希ちゃん」

「あのね、さっき車イスに乗ったすっごくかわいい女の子を見たんだけど…、その子の髪の毛がね、もう真っ白なの！　キラキラしてすっごくキレイで、そんでもって目もキレーなルビーみたいな色してるの！　ちっちゃくて可愛くてもう天使みたいな子だったの～」
私は興奮していっきにまくしたてちゃった。

看護師の吉田さんは、ははぁっといった感じで納得顔。
「なるほどぉ、その女の子が誰なのかはわかったよ。　けど沙希ちゃん？　その子のこと聞いてどうしたいの？」

「教えてあげてもいいんだけど、それはその理由によるかなぁ？」
興味本位だけで蒼空ちゃんのことを見て欲しくかった吉田はそう聞いてみた。

「もちろん、お友達になりたいの！　さっき見かけたときもホントはそうしたかったんだけど、その時はちょっと、その、オシッコ漏れちゃいそうだったから……」
そう言って赤くなる沙希ちゃん。

「そうかぁ、お友達になりたいかぁ…う～ん」
吉田は、どうしようかと考える。

蒼空ちゃんは、あの外見からどうしても病院内で目立ちやすい。
最近は車イスで動き周れるようになったおかげで色々な人の目に触れるようになり、更に顕著になってきた。
中には不躾にジロジロ見たり、差別的なことを言う人がいたりするから、蒼空ちゃんがキズ付くようなことにならないか心配だ……、というのが看護師仲間の総意だったりする。

「どうしたの？　吉田さん？」
沙希はだまりこんでしまった吉田を見て問いかける。　ついはしゃいじゃったけど、あの子のこと……言っちゃまずかったのかな？
なんかわかんないけど――、ちょっと不安になってきた沙希。

「あ、ごめんごめん。　じゃあさぁ、私一度その子を担当してる看護師さんに聞いてみるよぉ。　お友達になりたがってる、かわい～

子がいるんだけどどうですかぁって？」
　不安にさせたようだったので、わざとふざけ気味に話す吉田。
「ホント？　わぁい楽しみ～！　なるべく早く聞いてくださいね～、吉田さん♪」
　一気にテンション上がった沙希。
「うん、今日その人にあったらソッコーで聞いちゃうから安心して、結果期待しててネェ！」
「お願いしま～す！」
　はいはぁい、といいながら吉田は沙希から体温計を預かり、確認するとバイバイと手を振りながら病室を出て行った。

＊　＊　＊　＊　＊

「蒼空ちゃ～ん、お客さま連れてきたわよ～！」
香織さんが、妙にテンション上げて入ってきた。
後ろにはもう一人看護師さんがいて、その人が、ちょっと離れたとこに居たらしいそのお客さま…を、手招きして病室の方へ呼んでる。
ボクとお友達になりたいって言ってくれてる子らしい。
ボクも出来れば友達は欲しかったから、会ってみてもいいっていい、

こうして病室に来てもらうことになり、ベッドじゃなく車イスにすわって来てくれるのを待ってた。（なんかお見合いみたいだ…）

その子が看護師さんに連れられて入ってきた。
入ってきたのは、昨日の……ちょっと変わった、松葉杖をついたあの女の子だった。

だからボクは顔を見るなり――、
「あぁ！」
と言って指さし、そして自然と笑顔になった。

その子も、入ってきてすぐは緊張してたみたいだけど、ボクがすぐ笑顔になったので、つられたようにパァっと明るい笑顔になった。

「はじめまして？　とはちょっと違うけど…はじめまして。　柚月蒼空っていいます」
部屋の主（あるじ）らしく、まずは挨拶しっかりしなきゃね。

「お友達になってくれるって言われたからうれしくって！　よろしくネ」
続けてこういって返事を待つボク。

「あ、はじめまして？　こんにちは」

その子もそういいつつ思わずにやけてる。昨日の今日だからやっぱそうなるよね…ふふ。

蒼空の考えとは裏腹に、その内心は実は…、「きゃ～！　て、天使ちゃんが、め、目の前に～！」な訳であるが。

「あの、私は、渡辺　沙希っていいます。　昨日は変な対応しちゃってゴメンなさい…、実はあのときすっごくおトイレに行きたくって……」

そういいながら顔をまっ赤にしてうつむく。

「そうだったんだぁ、良かったぁ。　だってあのとき、渡辺さん？　お顔真っ青になりながら慌ててどっかいっちゃったから、心配しちゃったぁ」

ボクは真相を聞いて安心し、また笑った。（まぁ、そんなに心配してたわけでもないけど）

ボクは渡辺さんにイスを勧めて座ってもらい、香織さんともう一人の看護師さんを見た。

それに反応し香織さん、

「蒼空ちゃん、私たちはまだ仕事があるから離れさせてもらうわね、もう大丈夫よね？」

「沙希ちゃん、そういうことだからぁ。　あとは若い二人に任せるから――、私たちは仕事に戻るねェ？」

うふふっ、ともう一人看護師さんもいう、でもなんか言い回しがヘンだし。

「よ、吉田さん？　なんかその言い方、おかしいぃ！」

もうっ、とふてる渡辺さん。

なんかちょっと雰囲気が春奈とにてるかも。

「渡辺さんは骨折しちゃって入院したんだよね、痛くなぁい？」
蒼空は、何をしゃべっていいかわからないのでとりあえず、見たままに感じた質問をして見た。

「あ、沙希でいいよ、沙希で」

「それじゃ、ボクも蒼空でいいよ！」

「ぼ、ボク？」

「あ、いや……」
しまった、ついボクって言っちゃった。
渡辺さん、もとい、沙希ちゃんは、ボクの質問そっちのけでボクのボク発言？に食いついてきちゃった！

「ボク、ぼく…、ボクっ娘ぉ？」
きたーー！　何この拷問！？　白髪、赤目のファンタジー、おまけにボクっ娘～！？　もう、私に死ねとぉ～？　ああダメもう限界よぉ～！

「さ、沙希ちゃん？」
なんか、沙希ちゃんの雰囲気が――、ボク…身の危険を感じるのは気のせい、なのかな？

「そ、蒼空…ちゃん？」

「は、はい？」

「ごめん、まだ知り合ったばかり、なのに、でも――、もう限界ぃ！」

「え、えええぇ～！？」

沙希ちゃんが、ボクに飛びつくように抱きついてきて、

「あ～ん、蒼空ちゃん！　かわいぃ～！　かわいすぎるぅ～～！！」

ボクの胸のあたりで頬をすりすりする。

結局またこうなってしまった……。

なにこの、この既視感（デジャヴ）。　いやハッキリ覚えてるんだからそうじゃないかぁ。

麗香さんに続き、今度は沙希ちゃんですか。

やれやれだよ……。

ep20．友達（後書き）

沙希ちゃん…気に入りました。

ep21．蒼空ちゃん

沙希ちゃんとは、あの後1時間近くお話してたら香織さんが再度登場し、あまり長話はだめよって注意されてしまったため、その日はお開きになっちゃった。

沙希ちゃんは、中学2年の13才（春奈と同じで早生まれみたい）で、学校は違うけど春奈と同じ学年ってことだから、ボクよりは1っこ下になる。　でもボクは1年遅れで高校に入る（予定）だから、もしかすると同じ高校で同級生ってことになったりして？　ふふっ、さすがにそれはないよね。

ボクにも妹がいて、沙希ちゃんと同じ学年だよっていったら沙希ちゃんすごく驚いてた。

うっかり忘れちゃうんだけど、ボクって外見は11才くらいの女の子にしか見えない（実際そうみたいなんだけど）から沙希ちゃん、ボクのこと年下って思ってたみたい……、まぁそりゃそうか。

あの抱きつき…、そのせいもあったのかな？

とりあえず、また春奈のことも紹介するよってお話した。（春奈とも友達になって欲しいもん）

それにしても沙希ちゃんって、かなりの　”天然”　が入ってる気がするよ。

沙希ちゃんは、残念ながらあと5日ほどで退院しちゃうみたい―、せっかくお友達になったのに残念だけど、退院するのはいいことなんだからこんなこといっちゃダメなんだよね……。

でも週に何度かはリハビリのために通院するから、そのとき遊びに来てくれるっていってたから楽しみにしてよっと。

でも、とりあえずは明日も来てくれるから楽しみだ♪

やっぱ友達が出来るっていいなぁ……。

＊　＊　＊　＊　＊

「どお？　沙希ちゃん、蒼空ちゃんとは仲良くなれたぁ？」

夕方の検温をしにきた吉田さんが、今日の成果を聞いてきた。

「うん！　吉田さん、今日は連れてってくれてありがとう！　バッチリお友達になれたよ～♪」

「もうかわいすぎて、つい抱きついちゃったぁ！」

あらあらぁ、とちょっとあきれた顔をする吉田さん。

「それにねぇ、驚いちゃった！　蒼空ちゃん私よりも年上なんだって。　妹さんがいて、その子が私と同じで中学2年なんだってぇ」

「てっきり年下の子かと思って、かわいいかわいいって言っちゃってたから失礼だったかなぁ？」

吉田さんは、ちょっと考えてから話し出した。

「沙希ちゃん、蒼空ちゃんがどうして入院してるかぁ…ってお話し、今日したぁ？」

「ううん、してないよ。　なんかそんなこと、まだ聞きにくいし――、ガッコの話とか、妹さんの話とか…そんなだよ」

「そうかぁ、とりあえず失礼…とかそんなことは、蒼空ちゃん気にしないと思うけどぉ。　あのねぇ蒼空ちゃんの見た目とかはね、病気が原因なのぉ」

吉田さんが真面目な顔で話し出した。

「沙希ちゃんには、簡単にお話ししておくねぇ……、いろいろ戸惑うといけないからぁ。　あ、このことは蒼空ちゃん担当の看護師さんや、モチロン蒼空ちゃんにも話していいって了承得てるからねぇ」

私は、思わずごくりとツバを飲み込んだ――、な、なんなの？　このマジな雰囲気……、緊張しちゃうじゃないぃ。

「蒼空ちゃんは、生まれつきの遺伝子の病気でねぇ、体の色素が欠損して…白く見える状態でぇ生まれたの。　それに体の成長も普通の人より遅れぎみなこともあってぇ、それで白い髪の毛だったり、沙希ちゃんから見て年下の子に見えちゃったりしたのねぇ」

「それにぃ、事故にあって最近までずっと寝たきりだったのね。だから体の筋力が相当衰えちゃっててぇ、今は一生懸命リハビリして普通の生活が出来るように頑張ってるのぉ」

――――この話しは、今後も色々な場面で必要になってくるであることを見越して、日向や、石渡医師、それに看護師の西森……、関

係者みんなで考えた、”対外的に蒼空の病状、見た目を説明するため作った話”　で、もちろんホントの話を交えつつではあるが、一部話すことの出来ない事実を隠した……、身の上話なのだった――

私は、呆然として話を聞いてた。

私は、蒼空ちゃんの見た目に大はしゃぎし、ただただかわいい、かわいいって自分の気持ちばっか蒼空ちゃん（年上だから　”ちゃん”　はダメなのかなぁ）に押し付けてた。

私、蒼空ちゃんにひどいことしちゃったのかな？

不安そうな表情を浮かべ、しょげ返ってる私を見て吉田さんが、言ってくれた。

「沙希ちゃん？　そんな顔しないでぇ？　大丈夫、蒼空ちゃんはそんなこと気にする子じゃないよぉ」

私は、顔を上げて吉田さんを見る――、吉田さんは、うなずきつつ続ける。

「それにねぇ」

なにやら、いたずらっぽい顔をして言った。

「蒼空ちゃんを”かわいい”ってかわいがりまくるの――、沙希ちゃんだけじゃなく、みぃ～んなそうだから！　っていうかぁ、沙希ちゃんなんてまだまだカワイイもんなんだからぁ？」

そんな気の抜けた話しをかましてくれる吉田さん。

――思わずガックリとなる私。

そしてまた真面目になって言う。

「こんな話しを沙希ちゃんに聞いてもらったのはぁ、友達になりたいって言ってくれた沙希ちゃんに、ホントの意味で蒼空ちゃんのお友達にぃ、なって欲しかったから……。　見た目からだけじゃない、ホントのお友達ね？」

おせっかいしてゴメンねぇ、と言いながら私の頭をなでてくる吉田さん。

「要はねぇ、今日と同じように沙希ちゃんは沙希ちゃんらしくぅ、蒼空ちゃんと接してくれればいいのぉ。　だめよねぇ？　大人はずぐ難しいこと言っちゃうからぁ」

”てへっ”っと舌を出し今までの会話を台無しにする吉田さん。

あ、あなたって人は……、短いつきあいながら前から思ってたけど、マジ緊張感ないよねぇ？　しゃべりかたもおっとりさん…だし、――語尾をのばすなぁ！　ドジっ娘の私にそう思われるなんて相当だよ。

もう、蒼空ちゃんに会うとき緊張しちゃうじゃないさぁ、明日も行くって約束してるのにぃ。

でも、いいもん！　大人の考えなんて私にはわからないし、関係ないもん。

そう考えつつ、蒼空ちゃんの顔を思いうかべる……。

やっぱり、かわいい…♪
やっぱり、天使ちゃんは天使ちゃんだよ！

うん。

――でも、抱きつきは自粛だな？　ワタシ。

＊　＊　＊　＊　＊

「そぉ～らぁちゃん！　また来たよぉ～！？」

その日は――、
蒼空と沙希、これからもずっと仲の良い友達でいけそう……
そんな気分にさせてくれる……、秋晴れのどこまでも続く青い空が広がっていた。

ep22．朗報

１２月――。

季節は秋から冬に移り変わり、ボクが目覚めてから４ヶ月が過ぎようとしている。

ボクのリハビリはどうも順調とは言えないようなんだけど、それでも今、ようやく平行棒を使って立った状態での訓練が出来るまでになってる。　これをすることでバランス感覚の向上や、筋力・耐久力の増大をするんだって。

いくら平行棒で支えながらとはいえ、上半身の筋力もまだ充分とはいえないボクにとっては相当キツイ訓練で、終わった後には腕がパンパンになっちゃって手をあげるのにも困るほどだ。

でも、ここまで来るともうちょっとがんばれば、歩けるようになれるって感じ…が、実感として出てくるから辛くてもがんばろう！　って気持ちにもなれる。

足の骨折で入院してた沙希ちゃんは、すでに退院しちゃってて今は術後の様子を見るため週１で通院する感じみたい。　どうやらリハビリ開始するにはもう少しかかるよう……沙希ちゃん見込み、あまあまだったね。

＊　＊　＊　＊　＊

今日も日課のリハビリを終えて病室に戻り、お母さんが買ってきてくれた苺ショートを春奈と二人で（土曜日で、昼から二人で来てくれたのだ）食べていると、そこに石渡先生が香織さんと共にやってきた。

二人揃って登場するなんて久しぶりだ……、なんなんだろ？

「やあ、蒼空ちゃん！　こんにちは。　っと、お、いいねぇ苺のショートケーキか、おいしそうだねぇ」

石渡先生が、挨拶しつつもケーキに目が行ったみたいだ。

ボクは、ケーキの皿を遠ざける。　いくら先生でもあげないよぉ、べぇーだ！

ケーキを気にしつつ、話しを続ける先生。

「そ、それでね蒼空ちゃん、ここに来た理由なんだけどね？」

といいつつニヤッとする先生。

香織さんも、ニコニコしてる。

お母さんの方を見たら……、目が泳いだ。　お母さん――、正直ものですね。

春奈はキョトンとした顔――、春奈は知らないみたい。

とりあえずこれはいい話みたいだ！　ボクは期待に目を輝かせて先生の顔を見る。

「お、いいねぇ！　その表情。　蒼空ちゃんのその期待に充分答えられる話しだと思うよ」

もったいぶらずに早く言ってくださいって顔をするボク。

苦笑しながらようやく本題に入る先生。
「えっとだ、今一生懸命リハビリを続けている蒼空ちゃんに、ウレシイお知らせだ！」
もぅ、まだ引っ張るのぉ？　ボクのジト目に……
「おっと、そう冷たい目で見ないでよ。　続けるよ、えー蒼空ちゃんのリハビリの進捗具合と、体の免疫バランスの改善や予防接種、その他もろもろ…、それらを踏まえた結果――」
「――年末の27日、蒼空ちゃんの一時退院が決まったよ…」
やさしい表情で告げる石渡先生。
ボクは……。
「……」
言葉が出なかった。
たぶん相当呆けた顔をしてたに違いない――。
「あ、あれぇ？」
ボクの反応に、とまどう石渡先生。
「そ、蒼空ちゃん？」
困ったように香織さん、そしてお母さんを見る先生。

お母さんがそばに来て……、ボクをそっと抱きしめてくれた。
とたん、ボクの目から涙が溢れ出す。
お母さんがさらにぎゅっと抱きしめてくれる。
「あ、あれ、おかしいやボク……、ウレシイはずなのに涙が出てきちゃって」
そう言いながらも涙は止め処もなく溢れてくる――。
お母さんは抱きしめていた手を離し、そんなボクのアタマをやさしくなでてくれる。
「蒼空、さみしかったのね？」
「目が覚めてからずっと、いろんな人が見ていてくれる……、とはいってもお母さんたち、蒼空のそばには居てやれなかったんですもの――、一人でさみしい思い…してたのね」
ゴメンねと言いながら、ボクのアタマをなで続けてくれるお母さん。
お母さんも涙声だ。
春奈も隣にきて一緒に泣いてる。
ボクはさみしかったのか……、ボクはお母さんに言われて、自分の思わぬ感情に気が付いたみたいだ。
さみしいって気持ちは自分でもあるとは思ってたけど、いつもみんな良くしてくれてるし、お母さんや春奈、どちらかが毎日来てくれていてそんな涙が止まらないほどの思いがボクの中にあっただなんて自分自身、気付かなかった――――。

「蒼空ちゃん、すっごく頑張ったものね。　さみしいって気持ちに気付かないほど頑張ってたもの」
香織さんもそういって頬をなでてくれた。

「うん。　お母さん……みんな、ありがとう」
ボクはもうなんだか自分の感情がわからなくなってきて……、とりあえずお礼を言った。

でもボクってこんなに泣き虫の、さみしがり屋だったかなぁ？
目が覚めてからこっち、自分の感情に振り回されっぱなしのような気がする――。

環境が激変したからしょうがないといえば、そうなんだろうけど。

「蒼空ちゃん、それにみなさん？」
石渡先生が話しに入る。

「盛り上がってるところ、恐縮なんだけど今回はあくまで”一時退院”だから、そこのところを忘れないでくださいね。　正月を自宅で過ごしてもらった後、もう一度検査入院してもらわないといけない。　それで何も問題がなければ、今度こそ正式に退院ってことになるわけでね？」
と、めずらしく石渡先生が慌ててみんなに再確認した。

香織さんが、それに対して、
「先生、そんなことはわかってるんです――、そんな問題じゃないんです。　デリケートなんですから……、女の子の気持ちは」
と言う。

お母さんと春奈はうんうんとうなずいている。

あれ、それってちょっとおかしくない？？

ボクは、女の子だけど元男の子で、見た目は女の子だけど、心は男の子なわけで……。

だから――。

もう今は考えるのよそう。

わけわかんなくなっちゃうや。

今は帰れることを素直に喜ばなくちゃ！

そういえば、帰るのはいいけどボクまだしっかり歩けるわけじゃないけど大丈夫なのかなぁ？

「あの…、ボクほんとにお家（うち）に帰っちゃってもいいのかな？」

「お母さんや春奈に……、迷惑かけるんじゃ？……」

うぅ、また悪いほうに考えがいっちゃった。

「蒼空！　お母さんや春奈は蒼空のこと迷惑だなんて思ったことなんて一度もない。　蒼空がそんなこと考えてたなんてお母さんさみしいな？」

そう言いながらお母さんは、ボクを再び抱きしめた。

「そうだよ！　お姉ちゃんは私とお母さん…3人で大事な、大事な家族なんだから！　そんなこと言っちゃだめなんだからっ！」

めずらしく春奈が感情的になって言う――、そしてその目は涙でいっぱいになってる。

「う、うん、ごめんなさい――、そうだね、ボクの帰る家はあそこだけなんだもん。　そこに帰るのに遠慮なんかしちゃ、だめなんだよね？」

「ごめんね春奈。　ボク、お家に帰って春奈とお正月過ごすの楽しみにしてるよ。　それを楽しみにあと少しがんばってリハビリするよ！」

ボクは半分自分に言い聞かせるように春奈に言った。

春奈は涙を拭いながら、うれしそうに〝うん〟　とうなずいた。

「よし、話しがまとまった！　２７日まではあと２週間ある！　蒼空ちゃんもいったけどあと少しリハビリ頑張って、正月は自宅でゆっくり、家族水入らずってことで！」

湿ってきた話しをぶった切るように言う石渡先生。　また軽くなってきた。

「それと、だ、蒼空ちゃん。　近いうちに眼鏡とカラーコンタクトレンズを造るために、目の検査するからそのつもりでね？」

「えっ？」

何それ？

「検査の日はまた連絡するけど、とりあえず聞きたいことあったら西森くんにでも聞いてくれる？」

他に用事あるんで…それじゃ！　と結構重要なことを去り際にするっと言って、そのまま立ち去っていく石渡先生。

呆気にとられて見送る、ボクと残り3人。

「何なの？一体？？」

みんな一斉に香織さんを見る。

視線を浴びて戸惑う香織さん。

「え、えっとぉ、先生得意の放り投げ？　ですね――、あはは」

思わずごまかし笑いの香織さん……お気の毒さまです。

その後、香織さんに眼鏡（サングラス）とカラーコンタクトレンズ（度付きのやつ）の説明を聞いた。

そもそもの目的は、先天性白皮症（アルビノ）のボクがお外に出たとき、お日さまの光で目を傷めないようにするってことと、同じ理由で弱視のボクの視力補正をすることみたいだけど。

カラーコンタクトはそれプラス、赤い色の目を目立たなくする意味もあるみたい。　目立たなくなるのはいいけど、痛いのもいやだしなぁ……。

まぁ、その辺は検査のときに専門の先生に聞けばいいんだよね？

色なんか黒にしとけばいいんだろうし？

あぁ、さっきは泣いちゃってカッコ悪かったけど……、やっとお家に帰れるんだ。

よし、これからのリハビリも今まで以上にがんばって、少しでもお母さんや春奈に迷惑かけないようにする！
迷惑かけるって言うと怒られるけど、やっぱいやだもん。

それにしても家でお母さんたちとお正月かぁ……、ホント楽しみだなぁ♪

ep23．充実

お家に帰れると聞いてからのボクは、今までにも増してリハビリに励んだ。

ついつい、いつもの時間以上にがんばってやろうとするものだから、理学療法士の先生に、あまり無理しちゃダメって叱られちゃった。

無理して体壊しちゃったら素も子もないから気をつけなきゃね。

この日は、沙希ちゃんも病院に来てたんだけど、ようやくギプスも取れて、これからリハビリも始めるらしい。なんか普通に歩けるようになるまで、2・3ヶ月はかかるみたい。

どっちが早く歩けるようになるか競争だね？って言ったら、ちょっと間を置いてから笑顔で　そうだねって、言ってくれた。――あれは絶対自分のが早いのにって思ってるよ……、がんばって早く歩けるようになって見返してやるから見てなよぉ～、うふふ。

そんなことを考えつつ、リハビリを終えて病室に向かう。

自分一人でも移動は出来るけど、いつも香織さんが押してくれている。リハビリで疲れたあとに無理しちゃダメ…だって。

最近はけっこう顔見知りの人も出来て、声をかけてくれる人もいたりする。

「やあ蒼空ちゃん、リハビリだったのかい？　いつも頑張っててえらいねぇ」

「蒼空ちゃん、今日もかわいいね」

「お菓子あるよ、ちょっと寄っていかないかい？」
――お菓子もらえるのはうれしいけど、〝おせんべい〟とか〝あられ〟とか、ボク苦手…かといっていらないともいえず――、最近の微妙な悩みの種なんだよね。

みんなカンペキ、ボクを子供扱いしてるのが不満なんだけどいい人ばっかりで、こんなこともリハビリの励みや、お散歩するときの楽しみ…の一つになってる。

「蒼空ちゃん――、みんなやさしくていい人たちね」
香織さんが、車イスを押しながら話しかけてくる。

「うん！」
ボクは、目を細め笑顔で答えた。

病室に戻ると香織さんが一通りボクの体調を確認する。（検温とか脈拍とか、そんなの）

それも終わり一息ついてると春奈がやってきた。　いつも学校が終わるとその足でここまで来てくれてる――、ホント春奈にはアタマが上がらない。

「お姉ちゃん、ただいま！　もう今日のリハビリ終わった？　無理してない？」

「おかえり、春奈！」
春奈もボクもなんだかここがお家みたいな感覚でお話しする。

「リハビリ終わったよ！　……大丈夫、ボク無理なんかしないもん」
ホントは、無理して叱られたけどナイショだ。

そこに香織さんが……、
「あら、蒼空ちゃん？　確かリハビリの先生に無理しちゃダメって叱られてなかったかなぁ？」
ニヤリと笑いながら言う。

「なっ、香織さん！！」
ボクが目を見開いて香織さんを見て、それからそっと春奈の方を……

「お姉ちゃ～ん？」
そこには、笑顔なのになぜか怖いボクの妹さまが――、ひぃ～！

「もう、無理しちゃダメだっていつもいってるのに聞かないんだから！」
そう言いながら、持ってきたトートバッグをごそごそしてる。

「そんなお姉ちゃんには、コレはお預けかなぁ？」
春奈はバッグから、かわいい取っ手の付いた小さめの箱を取り出し、掲げながら軽く振る。

「あ、銀月堂の箱ぉ！　もしかして苺のショートケーキぃ？」
ボクが思わず期待を込めて聞く。

「えへぇ、さあてどうでしょう？　でも言うこと聞かないお姉ちゃんにはぁ……、どうしよっかなぁ？」

「そ、そんなぁ……」

ボクは思いっきりしょぼくれる。　どうにも甘いものに目がなくなってしまった今日この頃なのだ。

そんなボクを見て春奈が言う。

「今度から絶対無理しないって約束してくれたら……」

言いつつ、また箱を軽く振る。

「あげてもいいんだけどなぁ？」

思いっきり子悪魔のような顔をして笑う春奈。

ううっ！　は、春奈めぇ、人の弱みに付け込んでぇ～。

でも背に腹はかえられない。

「うん、約束！　約束するよ？　今日だってホント大した無理はしてないんだもん」

約束すると言いながら、今日の言い訳もするボク。

「ふ～ん、ホントかなぁ？」

ボクの表情を伺うように覗き込んでくる春奈。

その春奈の目を必死の表情で見つめるボク。

「ぷっ」

春奈が思わず吹き出す。

「えへへっ」

ボクもちょっとバツ悪く笑う。

「もう、しょうがないんだからぁ……、今日は特別。　特別だかんね？」

そう言って春奈はベッド脇のテーブルに箱を置いて、ケーキの準備を始めた。

「うん、まかしといて！　ボクは約束は必ず守る、お、女の子だよ」

……そうそう、女の子、女の子。アブナイ、あぶない。

「あ、香織さんの分もありますからぜひ食べてくださいねぇ～♪」

「あら、そうなの？　うれしい～！　銀月堂のショートケーキ…おいしいのよねぇ、ありがとう春奈ちゃん」

どういたしましてと笑顔を返す春奈。

そうして3人でプチお茶会を楽しんだ。

＊　＊　＊　＊　＊

苺ショートを食べて幸せいっぱいになった後――、春奈の学校の話しや友達との話しを聞いてたら石渡先生が現われた。　先生、またケーキの時に登場だ。実は一緒に食べたかったりして？　うふふ。

「やぁ、蒼空ちゃん！　お、それに春奈ちゃんもいらっしゃい。いつもえらいねぇ！」

今日も先生の口は調子いいみたいだ……。

「こんにちは、先生。　今日はどうしたんですか？　何かありましたっけ」

とりあえず聞いてみる。

「あれ、なんだか冷たいなぁ？　用がなきゃ来ちゃだめかい？」
そう言ってニヤリと笑う先生。……いつも楽しそうだなぁ、この先生。

「そ、そんなことないけどぉ……」
思わず言いよどむボク。

「ま、もちろん用があるから…来たんだけどね？」

むぅ…ホント、この先生は――。

「で、今日はだ。　プレゼントを持ってきた！」
そう言って、ポケットから小箱を二つ取り出す。　細長いのと四角いの、二つだ。
そしてそれをボクに手渡してくれた。

「あ、ありがとう？」
ボクは戸惑いながらもお礼を言うと、小さい手で落としそうになりながらもそれを受け取り、説明を求めるように先生の顔を見る。

春奈も興味深そうに覗き込んでくる。

「開けてみてごらん？」
先生がやさしく言う。

ボクはうなずいて、それから手渡された小箱を開けてみける。――まずは細長いやつだ。
ぎこちない手つきで紙の小箱を開けると中にはピンク色の皮ぽい素材で出来たケースが入ってた。　これってもしかして！

ボクは、先生の方をパッと見上げた。

先生はうなずいてる。

そのケースをパカっと開けると――、淡いピンク色をした細めのフレームが、横長に太目の微妙に四角ぎみの楕円を描いてレンズを囲い、テンプル（つる）も、それに合った細長いラインを描いた――、かわいらしい眼鏡が入ってた。

「うわぁ、眼鏡だぁ。　これってこの間、検査して作ってもらってたやつですよねぇ？」

もう出来たんだぁ！　そう言いながらボクはかけてもいい？と、問うように先生を見る。

先生は、もちろん　と、掛けることを促す。

ボクは、そっと眼鏡をケースから取り出し、掛けてみる。

「うわぁ！お姉ちゃん、すっごく似合ってる。　かわいいよぉ♪」

まずは春奈が一言。

ボクは、春奈を見る。

髪の毛を高めのポニーテールでまとめ、全体的にふわっとくくしゅくしゅした感じにしてる。そのかわいらしい顔のつぶらな瞳で、ボクを見てる。――多少見えるようになった？　でも相変わらずのぼやけた視界で、やっぱ目が良くなったって感じ……じゃない。

検査の時も言われたけど、やっぱり無理なのかなぁ。

眼鏡のレンズは、薄く茶色がかった感じでパッと見、これで効果

あるのかなぁと思ったけど、掛けてみるとけっこう光を減らしてくれてる感じがする。きっと紫外線も防いでくれるんだろう？　わかんないけど。

眼鏡を掛けてあちこち見てたら、香織さんが以前も使った鏡を持ってきて、ボクに手渡してくれた。

小さな顔に華奢なフレームのかわいらしい眼鏡…、すごく似合ってる気がする。　付け心地も悪くない気がするし……、ボク的にはスゴクいいんじゃないかなぁ？　と思うんだけど。

「どうだい？　蒼空ちゃん」

「は、はぁ……、えっとカタチや付け心地はとっても気に入ったんですけど……」

「あのぉ、やっぱり視力は良くなった感じ……、しないです」

「なるほど――」

うなずく先生、そして続ける。

「――残念だけどね、蒼空ちゃん。　君の目は、視力の矯正がすごく難しらしいんだ。眼鏡をかけてもほとんど変化がないらしい――、視力はそれで”０．３”あるかどうか？ってとこで、眼鏡を掛けるのはどちらかっていうと紫外線…太陽の日差しや、いろんな光のまぶしさから目を守るってことが主な目的だってことを理解して欲しいんだ」

石渡先生は一気に説明して、ボクの頭をなでる。

「期待させちゃったかな？」

「ううん、そんなことはない…です。　これで外に出られるようになると思えば、うれしいもん！」

ボクは、残念だけど色々やってもらって感謝してるので本心からそう答えた。

「そうか……」

先生は、静かにうなずいた。

「もう一つの方も見てくれよ？　あまり使わないかもしれないけど」

ボクは、もう一つの小箱も開けてみた。　もちろんカラーコンタクトレンズだった。

奇をてらわずに、普通に黒色のカラコンだ。　度付きだから眼鏡代わりに出来るけど目を傷めやすいからあまり使わないほうがいいんだって。

「付け方はこの前にも聞いてると思うけど、不安だったら西森くんに聞いてもらってもいいし、説明書も付いてるからお母さんか春奈ちゃんに読んでもらうのもいいかもね」

「あぁ！　それと一度病院の中庭や屋上とか…、短時間なら出てみてもかまわないから。　西森君にでも連れて行ってもらうといい」

「え？」

「それじゃ、いそがしいんもんでこれで失礼するよ」

じゃあ！　といながら、言いたいことだけ（放り投げるように）言って、いつものごとく去っていった。　先生！　ぜぇ～ったい、わざとやってるよね！

ボクと春奈は、香織さんに説明を求めるように視線を送る。

「えへへへ……、こ、困ったものだよねぇ？　先生ってば」

「私も今さっき聞いたのよ？　ほんと、黙ってたわけじゃなく……ね？」

「「はぁ…」」

ボクと春奈、二人でためいき。

でもその表情はみるみる笑顔に変わっていく。

「お外に出てもいい…かぁ」

貰ったばかりの眼鏡を掛けたまま、ボクはにやけてる。

ようやく外に出られる。

ボクは、そのことでアタマがいっぱいになり――

春奈や香織さんが、声をかけてくれていることにも気付かず、外への想いをめぐらせていた――――。

ep24. 心的外傷（前書き）

挿絵を入れてみました。

ep24. 心的外傷

この日の空は、今にも雪が降ってくるのではないかと思えるくらい厚い雲におおわれていた。　おかげで日差しも少なく、眼鏡の必要なかったんじゃないか？　と思える。

まぁ変わりにすごく寒いわけだけど――。

寒い中だけど、お外に出る（病院の中庭だけど）ってことでボクのカッコは重装備だ。

患者服の上を、ゆったりぎみの淡いピンクのタートルネックのセーターに替え、その上にエリやソデ、スソにファーの付いたふんわりした白いコートを羽織り、赤いタータンチェックのフリースブランケットを膝にかけ、頭にもボンボン付きのピンクのニット帽、足元にもファー付き（内側まで）のベージュ色のブーツ――、というお母さんがこれでもかって言うくらいに着せてくれた。

心配してくれるのはウレシイけど、かなり恥ずかしいよ、病院の中でコレは。

1年9ヶ月ぶり…になる、お外の空気は冷たくって、息をすると肺の中まで凍ってしまうんじゃないか？って思えるほど。　ほっぺもあっという間に冷たくなって表情を変えるのが難しくなってきちゃう。

でも、そんな寒さや冷たさも今は心地いい……。　生きてるって感じがする。

目が覚めて良かった…って実感できる。

この病院の中庭は、テニスコートを2面、縦に並べたくらいの大きさで、中央に楕円の花壇が2つ、木の植え込みも点在していて、その周囲にベンチが適度な間隔で8基ほど並べてある。

ボクは車イスをお母さんに押してもらい、ゆっくりとその中を周って、その久しぶりの空気や、雰囲気、匂いや音を体中で感じて…、女の子になったこの新しい、けど不自由なボクの体――、にその感覚を覚えこませるようにゆっくりと時間をかけて周った。

＞i36918―4403＜

――でも、寒くて凍えるかと思った。

＊　＊　＊　＊　＊

「「メリークリスマ～ス！」」

お母さんとボクが病室に戻ると、待ってましたとばかりにみんなの声が響く。

居るのは、春奈に香織さん、それに沙希ちゃん！　まだ足が不自由なのに来てくれたんだぁ……、もうすっかりみんなと馴染んでるなぁ。

「みんな、ありがとう！　せっかくのクリスマスイブなのにボクの

ために時間とってくれて……ほんとにウレシイよ～」
ボクは、感極まってまた泣きそうになってきたけどなんとか抑えた。（最近すぐ泣いちゃうんで、泣き虫って思われるのいやなのだ）

今日、ボクがお外に出た日――は、クリスマスイブ。　せっかくだから戻ってきたら、ささやかながらでもパーティーしよう！って春奈がいい出し、みんなで準備してくれてたんだ。　石渡先生も快く許可を出してくれた（っていうか先生もすごく出たがってた）みたい。

お、今日はまぁるくて大き目のクリスマスケーキだ。　苺が上に山のように乗ってる！すごぉ～い♪

「さあさあ、お母さん！　もう準備万端、いつでも始められるんだから座って座って！」

「お姉ちゃんは、そのまま（車イスのまま）でＯＫよね？」

「うん！」

「じゃあ、早速はじめましょ～！」

春奈の掛け声とともに、目覚めてから一番といっていい、短くも楽しいパーティーが始まった。

ケーキの他にもシャンパンにコーラ、フライドチキン、お菓子なんかもいっぱいだ。　ケーキは香織さんが切り分けてくれている。
待ち遠しいよ～！

パーティーの的にかかるのは、やはりというか――、ボクだった。

「お姉ちゃん、お外どうだった？」

「寒くなかった？　目は疲れなかった？」

「そのファー付きのコートすっごくかわいかったわぁ…、日向さんが選んだの？　さすがだわぁ」

「め、メガネっ娘～！？」

一部変な発言が混じってたようなぁ？

みんな楽しそうだなぁ…、苺のクリスマスケーキもおいしいし、紅茶もおいしいし……。

でも、ちょっと疲れたかなぁ……。

――クリスマスパーティーかぁ、なんか久ぶり。　ボクが物心付いたころには、お家でいつもやってたなぁ。　お母さんの料理、すっごくおいしかったなぁ。　春奈とツリーを一緒に飾り付けたり…、それにお父さんがいつもプレゼントを夜に……。

家族で……クリスマス…パー…ティー。

家族でお食事……、みんなで……お出かけ――。

……。

ボクと、春奈…、いっつも…言い争ってた…なぁ…

お父さんが、そんなボクたちを――。

おとう…さん――。

……。

あのとき……、あの雪の日も――。

……。

「うぅ…、おと…う…さん」

「いや…だ」

――うぅ、いやだ。　もう思い出したく…ない。　思い出したくなんかない……。

もう思い出させないで……。

――意識が、遠ざかる――。

……。

「……！」

「蒼空！？」

日向が蒼空の様子に気付き声を上げる。

「お姉ちゃん？」
春奈も気付いて蒼空の方を見る。

「蒼空？　どうしたの？　疲れちゃったの？」
日向が、蒼空に大きめの声で問いかけている。

ボクは、聞こえてるんだけど……、どこか自分じゃない他の人を見てるような、そんな気持ちで声をかけれてる自分を感じてる――。

そしてボクの意識はどんどんボクから離れていこうと、何も感じなくていい…深いトコロ……。

――思い出したない。

――忘れたい。

お父さん……。

「日向さん、私、石渡先生呼んできます！」

「え、ええ…、そうね、お願いします」
日向は動揺が隠し切れない。

どうしたんだろう？　どうしてしまったんだろう……、ここへ来ての蒼空のただならない様子。

ついさっきまで楽しそうに微笑んでいた蒼空。

久しぶりに外に出られて、はしゃいでいた蒼空。

新しい、女の子になってから初めてのお友達も出来て……。

毎年やっていたクリスマスパーティーも、事件でとぎれてたけど、また久しぶり…、に――。

「はっ!?」

久しぶりの…、パーティー。　毎年やっていたクリスマス…パーティー。

そこにはいつも、あの人が……いた。

蒼空…、もしかして。

日向は、表情が無くなって空ろな顔を見せている蒼空に近づくと、そのまま肩から抱き寄せその頭に自分の頭をよせ、優しくささやきかける。

――春奈は、突然の蒼空の変わりように言葉も出せず立ち尽くしている。　そんな春奈を沙希は肩をよせて慰めているが、沙希も何が起こったのかわからず不安な面持ちで、日向を見ている。

「蒼空、蒼空聞いて欲しい。　あなた、また思い出しちゃったのね?　昔のこと。　家族との思い出や…、あの人――、お父さんのこと

…も」

蒼空の表情が一瞬ゆれる。

「蒼空は、もう思い出したくないのよね？　そうね、それを思い出すと悲しいし、いやな事も思い出しちゃうものね？」

蒼空の目がかすかに揺れた表情を見せる。

「でもね、逃げてちゃダメなの。　逃げてる限りはそれは逆に忘れられず、それどころか今みたいに何かあるたびに思い出して……、悲しい気持ちを呼び覚まして、つらくて…また逃げ出したくなってしまうわ」

話しながらも蒼空を優しくなでる日向。　ふと前を見ると、いつの間に戻って来たのか、そこには西森、そして石渡医師もいる。

石渡は、続けて…と言うようにうなずいて見せる。

「蒼空、お母さんも……お父さん、雅行さんが居なくなって――、死んでしまって、心の中にぽっかり穴が開いてしまったような気持ちで、どうしたらいいのかわからなくなったこともあるわ……」

春奈が思わず日向の顔を見る。何か言いたそうな表情を浮かべるが……なんとか気持ちを抑える。

日向は、春奈にやさしく微笑むと話しを続ける。

「でもね、私には家族がいた。　そう蒼空、あなたと春奈。　二人の大事な、かわいい子供たち」

日向は、蒼空の頬を両手でやさしく包み込み顔を覗き込む。　蒼空のその色素が欠乏している為に赤く見える瞳、そのままの状態では満足に外へも出られない、その目をしっかりと見つめる。

そして続ける。

「蒼空、だからあなたも逃げちゃダメ。　悲しい気持ちは素直に認めて、現実を見て？　蒼空の周りにはたくさん蒼空を愛してくれている人がいるわ。　助けてくれる人も。　お母さんや春奈はずっと蒼空の家族なの――、これは何があっても変わらない」

「愛してるわ、蒼空。　大事な私の…娘」

そう言うと日向は、蒼空を見て…そのかわいらしい額に軽くキスをした。

蒼空の目に、空ろだったその目が揺れ……、やがていつしか涙が浮かんでくる。

目に光が戻って来るころには、その目は涙でいっぱいになっていて――、ついには溢れ、頬を伝わり流れ落ちていく。

日向はそれを拭いつつ、またキスをする。

「大好きよ、大好きなんだから……もう心配させないで」

「お母さん――、ボクも大好きだよ」

もうしっかりとした表情で、意識もしっかり戻ってきた蒼空がちょっと頬を赤くして言う。

日向は、今度はしっかりと抱きしめ、頬を蒼空の頬に摺り寄せる。

蒼空は、気持ち良さそうに目を細める。そして言う。

「心配かけてごめんなさい」

春奈は、ほっとした表情になり、今度はちょっと蒼空をうらまし

げに見つめ、つい言ってしまう。
「お母さん、私もお母さんのこと大好きなんだからねぇ？」
どうやら、蒼空に嫉妬してしまったよう。

それを聞いて、周りの緊張がすっと解けていく。

西森や、石渡にも笑顔が戻ってくる。
石渡は、そっと思った……、母は強し――だな、と。

そして沙希は……、ちょっと付いて来れてなかった。
西森は何気にフォローを入れるため、沙希に声をかけるのであった。

そして蒼空が、まだちょっと弱々しげながらみんなに声をかける。

「クリスマスパーティー、途中でこわしちゃってごめんなさい。
ボク、まだよくわかんないけど……こんなことにまたならないよう……うぅ」

途中でなんと言ったらいいかわからなくなる蒼空。

「ぷっ」
思わず吹き出す春奈。

「お姉ちゃんったら……、うまく言えないなら、始めからいわなきゃいいのにぃ？　でも言いたいことはわかるよ」

春奈は、蒼空、そして日向を見る。　そして、春奈も2人のほうへ寄っていき日向は春奈と蒼空、一緒に肩から抱き寄せて言う。

「2人は私の大事な子供。　そして雅行さんとの愛のあかし。　3人は家族なんだからね？　お互いで助け合って、困ったことがあったら相談して、そして尊重しあって、幸せに生きていけるよう力を合わせていかなきゃね！」

「「は～い！」」

蒼空と春奈はそろって返事をし、日向に頬をよせる。

周りの3人は、ホームドラマを見せ付けられ、少々引き気味だ――。

――しかし、

一時退院まであと3日、蒼空は無事に家に帰ることができるのだろうか？

心配の種はつきない――。

ｅｐ２４．心的外傷（後書き）

ああ、うまく表現できない。
変な表現多いかもしれませんがご容赦ください。

文章力が……。

なのになぜかこんな話しを書いてしまう不思議。

ep25. お別れ

日向は石渡医師と今しがたの蒼空の症状…と今後のことを相談し――、今は病院の待合室脇のベンチシートで一人座りこんでいる。

蒼空の症状は、心的外傷（トラウマ）……、石渡医師によれば直接の原因はやはり、事故時に受けた強い衝撃や体験、父親を目の前で失ったショック……などにより心に深い傷を負っているのだろうということだった。　今回は、クリスマスパーティーから過去の父親との出来事を思い出し、そこから事故の記憶を想起させてしまい――、それをまた思い出したくない、忘れてしまいたいと心が回避を求めた結果……、あのような症状となってしまったのだろう。

石渡医師はそう語り、この”心的外傷”にはこれをしたら直るといった確定された治療方法はなく、精神的なケアや、薬物治療なども交えながら…あせらず、やさしく見守ってあげて欲しい（先ほどの対処はすばらしかった）と言い、必要に応じてきっちりサポートもさせてもらうと話した。

篠原が起こしたあの事件――、父親を目の前で失ったという喪失感、それに蒼空自身が受けた精神的、肉体的なショックや変化……、蒼空はあの小さな体で今も尚、あの事件の影響から逃れられないでいる。　……そんな蒼空が不憫でならない。　代われるものなら代わってあげたい……、日向はそう思わずにはいられなかった……。

この症状に関しては、今の話のように即効性のある治療が存在する訳でもないため、一時退院については予定通り行うとのことだった。

日向は、帰る際に車に乗ることへの蒼空の反応が心配だった。

そのことがきっかけになり、また過去の記憶で苦しんでしまうのではないか？と……。

石渡医師は、それについては当日、精神を安定させる薬を服用して対処してはどうか？と言う、症状がひどくなるようなら睡眠薬で対処することも出来るとも。　車で帰るしかない…のだから仕方ないと（本当は薬なんかに頼るのはいやだけど）不承不承、承知した日向。

――しばらくシートに座って考え込んでいた日向だったが、これ以上考えても仕方ない！　と心を切り替え立ち上がり、蒼空のいる病室へと戻って行くのであった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

――退院当日。

蒼空はまた春奈の着せ替え人形と化していた。

「春奈ぁ、もうこれでいいじゃん？　疲れちゃったよボク」

ボクは、それはもう女の子然とした、かわいいカッコにされて姿見の前にいる。

裏起毛があったかいラベンダー色のカットソー、クロベースのドット柄のフレアミニスカート。下には同じくクロっぽいレギンスをはかされ、ポンチョ風のベージュのプルオーバー（フードのふちにはファーが付いててかわいい）をかぶってる。　お家に帰るだけなのになんでこんなカッコ？　っていうか、いつの間にかボクのお洋服…どんどん増えていってない？　ボクの知らない間に。

「う〜ん、やっぱお姉ちゃん、かわいいよ！　やばいくらい」
あごに手を指を添えながら言う春奈。ついでにもう一言、
「これ沙希ちゃんに見せたら、反応面白そう？　もだえ死んじゃうかもよぉ？」
うぅ、ほっといてください。　でも、やっぱ…沙希ちゃんに見られたら…また抱きつかれちゃうかも？
「ミニスカートなんて恥ずかしいよぉ！　これやめない？」
とりあえず思うところを言ってみた。
「いいじゃん、下にレギンス履いてるんだからパンツ見えないし、ミニっていったって短すぎるってわけじゃなしぃ」
やはりというか、あっさり却下されちゃった。　どうせ病院から車までの間だけだからいいけどさっ。
そんなやり取りをしてたら、お母さんが入ってきた。
「どう？　準備は出来た？」
お母さんがそう言いながら見てくる。
「まぁ、かわいいわぁ、よく似合ってる！　春奈ありがとね」
「うん、がんばってみました！　えへへぇ」
うれしそうに言い、それからいいアイデア思いついたって顔をしてボクを見る。
「お姉ちゃん、せっかくだから写メ撮ろ？　そうだ、沙希ちゃんにも送って見せてやろっと」

そう言いながら早速携帯を出す春奈。

「お姉ちゃん、リハビリの成果、成果！　ちょっとだけ立ってかわいいポーズよろ！」

「もう、春奈ったらごーいん！　ほんと勝手なんだから…」

ブツブツ言いながらも言うことを聞くボク。昔から妹には弱いのだ、勝ったためしがない…、勝てない戦はしないのだ。

ボクは、車イスからゆっくり足を下ろし立ち上がろうとする。

お母さんが横から支えて立ち上がるのを助けてくれる。

「ありがとう、お母さん。　もう平気だから手を放していいよ」

お母さんが、手を放すとボクはもう一人で立った状態だ。　まだフラフラと心もとないながらも何とか立った姿勢を維持する。（杖を使いたいとこだけど、それじゃみっともない）

お母さんが、うれしそうにボクを見ている。

「はい、お姉ちゃん、ちょっとガマンしてこっち見てくださいねぇ～」

春奈が小さい子に言うような口調で指示してくる。

「むぅ、春奈！　ボク子供じゃないし」

そうやってむくれた表情で春奈を見る。

「はい、それいただき～♪」

――それを写メに撮られた。

そのあとポーズを変えて何枚か撮らされ、ようやく開放された。
ふぅ立ってるだけだけどやっぱまだ疲れるなぁ……、もっと筋力つけなきゃ。

「ああ、しまったなぁ、今までもこうやって写メ撮っておけば良かったよぉ。　春奈一生の不覚だったよぉ～」
変なところで悔しがる春奈。　服はあるんだからまた撮ればいいじゃん？って言うと……。

「何言ってるの、お姉ちゃん。　その時その時に撮るのがいいんじゃない、後でまとめて撮ってもぜんぜん違うじゃん？」
そ、そうですか？　それは失礼しました――。　やっぱ妹の考え？はよくわからない…、たぶん一生わかることはないであろぅ、うん。

「蒼空、お薬は飲んだ？」

「うん、ちょっと前に飲んだ。　大丈夫だよ」
ボクはこの前のクリスマスパーティーのことがあるから、心を落ち着かせる薬を飲んでおきなさい　と飲み薬を渡されていたのだ。
お薬の効果がどんなものか？　は知らないけど、みんなに迷惑をかけるのはいやだし、何も聞かずに素直に飲んだんだ。

「じゃあ、準備出来たなら行こうか？　みんなお待ちかねよ？」

「「は～い」」
ボクと春奈は答える。　そしてボクはお母さんを見上げてお願いの表情をする。

「じゃ、行きましょう」

そう言って、お母さんがボクの車イスを押しにかかると……やはり、

「あ、私が押す～！」

春奈がお母さんに場所を譲ってもらい、車イスを押す。

「じゃ、お願いね？　春奈」

うん任せて、と言いつつ、押す力を増す春奈。

ボクは、離れていく病室を振り向いて見ながらもようやく帰れる、お家のことを考えると心がウキウキとして楽しい気分になってきた。

病室の荷物は、すでにお母さんの車に運び込んであるから、後はボクが乗れば終わりな状態なのだ。

とりあえず１Ｆのロビーに向かうまでに、通路ではこれまでに知り合ってボクに良くしてくれた人がさよならの挨拶をしてくれた。

「蒼空ちゃん、一時退院おめでとう」

「よかったねぇ、蒼空ちゃん！」

みんなやさしくていい人たちだ。

「ありがとう！」

その言葉を何度も言った。

ロビーでは、石渡先生と香織さん、その他にもボクをサポートしてくれた人達が、待ってくれていた。

「お、蒼空ちゃん今日は一段とかわいいね！　春奈ちゃん、いい仕事したねぇ？」

石渡先生がいつもの調子で話しかけてきた。　春奈はニコッと笑顔になる。

「蒼空ちゃん、一時退院とはいうものの…、退院おめでとう！」

そうボクに言いつつ、アタマをなでる石渡先生。

「蒼空ちゃん、ほんとよかった。　おめでとう！」

香織さんも続けて言ってくれる。

「はい、ありがとうございます！　石渡先生や香織さん、看護師のみなさん、他にもいろんな方にも迷惑かけたけど……、おかげさまでこうやってお家に帰ることが出来るようになって――、ホントうれしいです」

ボクは、春奈を、そしてお母さんを見てから今日2度目の立ち上がる動作をし、お母さんに支えてもらいつつも車イスから降りた。

先生や香織さん、他集まってくれた人の前にしっかりと自分の足で立ち、両手を前で合わせ……ボクは軽くだけどお辞儀をしつつ、

「ありがとうございました」

と大き目の声で心をこめて言った。

病院のロビーに、ボクの声、女の子の澄み渡ったかわいい声が響いた。

＊　＊　＊　＊　＊

お母さんが退院の手続きをすませボクと春奈のところに戻ってきた。

「それじゃ、帰りましょう！　ん、そうだ蒼空、眼鏡かけなきゃだめよ。　目を傷めてしまうじゃない？」

「あ、いけない、忘れてた」
ボクは慌てて、眼鏡を掛ける。

春奈が、ほんとに抜けてるんだからってな感じでボクを見てる。
ほっといてよ、もう。

「それじゃ、行きましょ」

その言葉を合図に春奈が車イスを押し、ボクはとうとう……、1年9ヶ月近く居たこの病院から出ることとなった。　ボクが目覚めてからは約5ヶ月だったけど――。

みんながまだ見送ってくれている。
香織さんなんてもう涙目もいいところだった。

エントランスから出て、お母さんの車に向かう途中、ボクは振り返り病院を見た。

長い間入院していたけど外から見たのは、初めてだった。
すごく大きい……まさに大病院の様相だった。　ボクは心の中でさよならを言った。（まぁ、年明けにはまた戻ってくるんだけどさ……）

空は冬晴れで、お日様がさんさんと辺りを照らしている。　ボク

の目は度付きのサングラスで保護しているといえ、やっぱりけっこうまぶしい。
昼中の普通の日差しでこんなにまぶしいなんて…、やっぱりみんなが心配するように気をつけないといけないのかなぁ……。

お母さんの車に着き、ボクは車イスから降り後ろのシートに春奈と一緒に座った。車イスはたたんでリアのラゲージルームにしまう。お母さんのクルマは、アウディの赤いワゴン車でスマートでカッコイイのだ。

「さぁ出発よ、蒼空、春奈、シートベルトした?」

「「うん!」」
2人で元気に答えた。

お母さんは、確認すると静かにクルマをスタートさせた——。

流れる景色、久しぶりに見る風景を見つつ、ボクは、今からお家に帰れると期待に胸がふくらむ。

春奈がボクの手を握ってきた。ボクもそれを握り返す。
2人で顔を合わすと、自然と微笑みがこぼれた。

お母さんは、ボクが心配なのか時折声をかけてきたり、ちらちら後ろを覗き見たりしてる。危ないから運転に集中して。ボクは大丈夫だから。

そう、不思議とボクは落ち着いていた。
みんな、何も言わないけどボクが車に乗ることに対してすごく心配してたんだと思う。　ボクもちょっと心配だったけど――、大丈夫。　なんともない。

だから心配しないで、お母さん。

お家へ向かう車の中、流れ行く景色を見ながら……。

これからの生活が何事もなく出来ますように、家族で楽しく過ごすことが出来ますように！

ボクは、心からそう願っていた……。

ep26．やすらぎ

ボクのお家は、Ｉ市内にある病院から南へ１２ｋｍ、車で３０分ほど走った所にある、湖に流れ込む川沿いに作られた街の中にある。

街の近くには緑も多く、運動公園や学校、公共施設も結構あって、なかなか住みやすい、いい街なんじゃないかなぁと思ってる。東に２ｋｍくらい行くとＪＲの駅があって、その周辺はいろんなお店が立ち並び賑わいを見せてる。

「さぁ、着いたわよぉ！　春奈、先に行って玄関開けてきてちょうだい？」

お母さんが車の後ろから車イスを出す準備をしながら言う。

「りょうか～い！　お姉ちゃんはとりあえずそこでおとなしく待っててね？　準備するから」

「は～い、よろしくお願いしまぁす」

ここはおとなしく言うことを聞くボク。

迷惑かけたくないって思う気持ちはまだあるけど、それを言えば逆にお説教くらっちゃう。家族なんだからあたりまえでしょ？って。だからボクも甘えちゃおうと思うんだ……しっかりとね。

でもいつか２人にお礼ができたらなぁ…とひそかに考えてる。

ふふ、絶対実現させてやるんだから楽しみにしててね！　お母さん、春奈！

「蒼空、準備できたわよ？」

お母さんが車イスをドアの脇に寄せてくれる。　ボクは車のシートからドアのそばまでいざって足を下ろし、お母さんに支えてもらいながら車イスに移動する。

「よし、それじゃあお家に入ろう！」

「うん！」

お母さんの呼びかけに元気に答えて、ふとお家のほうを見る。

２階建ての洋風のお家で、２階には大きめのバルコニーもある。

玄関を挟んで両側に車２台分の駐車場と、キレイに整えられたお庭があって……、見ていると懐かしさがこみ上げてくる。

帰ってきたんだなぁ――。

「ほら、行くわよ？」

つい懐かしさに、ぼーっとしてしまってたボクに声をかけるお母さん。

「あ、うん。　行こう行こう。　お願いしま～す！」

「よし、久しぶりのお家。　見て驚かないでよぉ？」

そう言いながらお母さんは勢いよく車イスを押し玄関に向かって行く。　なんだろ？　驚かないでって？　何かボクを驚かすイタズラでも考えてるのかな？

玄関では、春奈がドアを開けて待っててくれた。

「お姉ちゃん、おそ～い！　待ちくたびれちゃったよぉ」

春奈が文句を言う。

「ごめん、ごめん、つい懐かしくってお家を眺めちゃって……」

「……そっかぁ、ごめんなさい。　久しぶりなんだもんね…、それなのに私ったら…」

しょげる春奈。

「ああ、そんな気にしなくていいから、さあ入ろう？」

思わずふさぎ込む春奈に、声をかけて促す。

「…うん。　じゃ行こ～♪」

あっさり気持ちを立て直す春奈。　やっぱ女の子は強いや。（ボクも今はそうなんだけど…ね）

お家の中に入ると、玄関の土間から床にはスロープが付けてあって車イスでそのまま入れるようにしてあった。　お母さんはボクを乗せたまま床まで押し上げてくれた。

「お母さん、大丈夫？　重くない？」

「平気よ、これくらい。　蒼空は軽いから片手でも大丈夫なくらいよ？　うふふ」

いくらなんでも片手は危ないと思う。　でも、

「ありがとう、お母さん。　ちゃんとこんなの、準備してくれてたんだ」

「どういたしまして！　中もちゃーんとしてあるわよ？　お母さん、まだ荷物持ってこないといけないから先に入っててね」

車イスのタイヤを拭きながらお母さんが言った。

「うん、わかった。　中もどんなか見せてもらうねぇ」

中は何がしてあるのかなぁ？　驚くことってこれのことだったのかな？　ボクはそう考えつつ、春奈とリビングのほうへ向かった。

お家の中は、カベには要所要所に手すりが付けてあり、床も段差

にはスロープが、開閉で邪魔になるドアも引き戸に替えてあった。
ボクのためにここまでしてくれてあったなんて……。

「すごいでしょ？　お母さんが、お姉ちゃんがお家に戻ってきたとき、なるべく不自由しないようにってリフォームしちゃったの。2階にあったお姉ちゃんのお部屋も1階に移したんだよ？　私も手伝ったんだからぁ、うふふ」

驚いてるボクに春奈が説明してくれた。

「ほんとすごいや、これなら車イスで移動するのも楽だし歩くときにも安心だね！　お部屋まで1階に下ろしてくれてるなんて……ありがとね、春奈！」

「えへへぇ、どういたしましてぇ」

うれしそうに微笑む春奈。

「さっ、リビングで休も！　ショートケーキ買って来てあるんだ♪　もちろん苺もあるよぉ。　私準備するからそこで待っててね」

「うん、いいねぇ！　よろしく～」

ウチはリビングダイニングだから春奈がうれしそうに準備しだす姿がよく見えた。　ボクは、ソファーまで車イスを横付けし気合を入れて移動した。　これくらいの小移動なら伝いながらなんとか出来るのだ！　テーブルの上に置いてあったＴＶのリモコンを操作し適当につけて見る。　よく知らない芸人の人達が出てるバラエティー番組をやってた。

ボクは、ソファーにぽすっと体を預け、人心地つけた。

「はぁ、やっぱお家は安心するなぁ」

帰ってきたんだ……。

ボクのお家、ボクの居場所へ――。

家族のもとに。

……。

ボクは安心したのか、急に眠たくなってきちゃった。　まだこれから苺ショート食べなきゃいけないのに……。

でもあまりの気持ち良さにもう耐えられそうにないや――。

日向が荷物の片付けを済ませリビングに入ってくると、そこにはすでにソファーで気持ちよく寝入っている蒼空の姿があった。

日向はその隣に座り、蒼空のかわいらしい頭をやさしくなでる。その真っ白な雪のような髪。　今では肩よりも長いほどに伸びたキラキラと輝く、そしてさらさらなキレイな髪。

そのキレイさと裏腹に蒼空の体は、普通の子と違うハンデを背負わされてしまっている。　そんな蒼空が不憫でならない。　でもそれを蒼空に悟らせていけない、不安にさせないよう家族でしっかり支えてやらなくては……。

日向はかわいい顔をして寝入っている蒼空を見て改めてそう思うのだった。

「あれ、お母さん？　お姉ちゃん……は、寝ちゃったんだ？」
春奈は日向の横で眠っている蒼空を見る。

「なぁんだぁ、せっかくケーキとお茶、用意したのになぁ」

「まぁそう言わないの。　お姉ちゃん、病院からお家に帰ってくるまで、言わないけど相当緊張してたんだと思うわ。　だからきっと疲れちゃったのよ」
日向はそう言って春奈を慰める。　ケーキは、お母さんが代わりにいただいちゃうわ？　といたずらっぽく言い、春奈から受け取る。

「お姉ちゃんには、私の分を後でまた出してあげてね」

「はーい」
春奈はそう言うと、ケーキとお茶をテーブルに置き、向かいのソファーにボスンっと座り日向と食べはじめた。　蒼空は日向の横ですやすやと気持ち良さそうに眠っている。

その表情は、無防備で、安心しきった、やすらぎに満ちたかわいい顔。

日向と春奈は、そんな蒼空を見て2人でしっかりと守ってやらなければ…と、やさしい表情で見つめる。

「ううん。　もう、食べられないよぉ……」
蒼空が突然寝言を言う。

日向と春奈は、その寝言に思わず見つめ合い……、

「うふふっ」

2人して幸せな気分になり、微笑み合うのであった――。

ep27．決意

２年ぶりのお正月をお家で迎え、お母さんや春奈と、楽しく穏やかな気分を満喫した１０日間はあっという間に過ぎ、ボクは病院に戻った。

お家にいる間、ボクはこれといって体の調子を崩すこともなく、いたって健康だった。１週間の検査入院で問題が無ければ、ボクは晴れて正式な退院が出来ることになる。

検査結果を待つ間は、久しぶりのリハビリをがんばってこなした。久しぶりだったけどお家でも出来る運動はしてたし、そんなになまってはいないはず！　と自負してたんだけど、やっぱりきつかった。

退院が決まれば、リハビリは通院してすることになるはずだ。その間はお母さんに送り迎えをしてもらうことになっちゃうから、なるべく早くリハビリに来なくていいようにならなくちゃ！

久しぶりに会った香織さんには、お家での出来事をいっぱい聞かれちゃった。

お母さんや、春奈とお風呂に一緒に入ったことまで白状させられたのはすごく恥ずかしかった……。（まだ危ないからって、一人では入らせてもらえなかったのだ……。　お風呂にも手すりとか付けてもらってあったし、なんとか一人で入るって言ってみたけど、ダメだった）

今は女の子の体とはいえ、元男の子としては複雑なのだ、中学生になってからはもう一人で入ってたし……。

自分の（女の子の）体には、さすがにもう慣れちゃって平気なも

のなんだけど……、目（視力）が弱くなったのだけはなかなか慣れない。

男の子の時もそんなに見えるほうじゃなかったけど、この目はちょっとした光でまぶしさを感じてしまい何も見えなくなってしまう……、視力０．３どころの話しじゃなくなっちゃうのだ。　字を読むにもルーペで拡大して（香織さんに貰ったのが大活躍！）見なきゃ読めないし、遠くのモノを見るのにも一苦労。（双眼鏡なんかも必要だよ）　ホント大変なんだ。

そんなこんなを香織さんと話したり、知り合いの入院患者の人達と話したりと、ボクは病院で、リハビリや、お散歩しながら１週間を過ごした。

もう慣れたものだったから、お母さんは週末に来るだけで、春奈が３日に一度づつくらいで着替えを持ってきてくれるくらいだった。

夜はやっぱりさみしかったけど、春奈とメールとかして、さみしさを紛らわしたりしてた……。

＊　＊　＊　＊　＊

「柚月さん、蒼空ちゃんの検査結果ですが……」

石渡医師が、日向に１週間の検査入院の結果を報告し始めた。

「はい、いかがでしたでしょう？」

日向は、心配げに問いかける。

「結論から言いますと……、ご安心ください。　特に問題もなく、このまま退院しても大丈夫かと思われます」

いつになく真面目な口調で話し始めた石渡。

日向は、それを聞きほっとした表情を見せる。

石渡はそれを見つつ、いくつかの頭部の断面画像を用意し、続ける。

「頭部ＣＴやＭＲＩ、それに脳波測定など、頭部を重点的に検査し、その他一通りの身体検査も実施しました。　結果、それらについて全て異常ナシと出ています」

「リハビリの成果もかなり出てきているようだし……、免疫力の方も、蒼空ちゃんの体力の上昇とともにずいぶんと向上してきています」

石渡がそう言いながら、ニッコリと微笑みかける。

日向はつられて、思わず微笑みを返す。

しかしその後、石渡は表情を微妙にくもらせて言う。

「後は、心的外傷（トラウマ）についてが懸案事項として残るわけですが、これについては私も専門ではないので、正直これ以上突っ込んだ対応はできません。　しかし、今後再び症状が出ることが心配なのであれば、専門の医師やカウンセラーを紹介することは出来ます」

「そうですか、体の方は大丈夫ってことで安心しました。　先生や、病院の方々には感謝の言葉もありません」

日向はまずお礼をいい、

「蒼空の心的外傷……については、あの子が過去の悲しい思い出にとらわれないよう、家族で出来る限りのサポートをして行きたいと思っています」

今後の決意を新たにすることを告げた。

「うん、わかりました。　それでは、蒼空ちゃんは今日をもって退院ってことで手続きを進めておきます。　長い間お疲れさまでした！」

そういって石渡は手を差し出した。

握手を求める石渡に、一瞬戸惑った日向だったが、すぐに手を差し出し握手を交わし再びお礼の言葉を言う。

「石渡先生、本当にお世話になりました。　ありがとうございます」

「こちらこそ、長期にわたってしまい申し訳なかったです。　それにまだリハビリに通ってもらわないといけませんからね？　もう少し頑張りましょう！」

「はい、よろしくお願いします」

そう言いながら日向は、石渡にお辞儀をし、立ち去るのであった。

＊　＊　＊　＊　＊

「ただいま～！」

ボクはお母さんに家の中に入れてもらってすぐ、帰宅の声をあげる。

そうすると中から春奈が駆け出してきた。

「お帰り～！　あ、お姉ちゃん！！　一緒に帰ってきたってことは、無事退院できたんだね？　よかったぁ～これからはずっと一緒だね♪」

「うん！　もう全然問題ないって。　あとはリハビリに通うだけだ

よ！」

「あ、そっかぁ、リハビリはまだ通わないといけないんだね……。
まだしばらくは大変だね？」
春奈は、笑ったり、しょぼくれたりと、見てて表情がくるくる変わってかわいい。

「そうなんだけど、行けば香織さんにも合えるしさ、その方が早く歩けるようになるんだし！　ボク、早く歩けるようになって春奈やお母さんとも、お買い物とか一緒にいきたいし。　がんばらなきゃ」

それを聞いて春奈もぱぁーっと明るい表情になって、
「そうだね！　一緒にお買い物行かなきゃね！？　お姉ちゃん、がんばって早く歩けるようになってねぇ～！」
そう言うが早いか、春奈は車イスを勢いよく押し出し、ボクは危うく舌をかみそうになっちゃった。

「もう、春奈ぁ！　急に押さないでよぉ、舌かみそうになったじゃん！」

「あは、ごめんなさぁ～い」
舌をぺろっと出してあやまる春奈。　こいつ全然悪いと思ってないよなぁ……もう。

そんなやり取りをしていたら、お母さんが入ってきて、
「ほら、２人ともそんなところでグズグズしないで！　蒼空、あなたは荷物早く片付けなさい。　春奈も手伝ってあげるのよ？」

「「は～い！」」

怒られたボクたちは、２人して返事をしながら逃げるようにボクの部屋に向かった。

日向は、そんな子供たちを見てあきれつつも、うれしそうな表情を見せ、自らも荷物の片付けを始めるのだった。

――これから始まる新しい生活に、ボクは期待と若干の不安（勉強とか、勉強とか…）が入り混じりながらも、楽しみで仕方がなかった。　でもとりあえずは早く歩けるようにならなきゃ！

そう思いながら、ボクは　”がんばろう！”　と新たな思いを心にきざんだ――。

ep27．決意（後書き）

次回から第2章に入ります。

学校に入れるようになるといいんですが……、蒼空の頑張りに期待です。

2章・扉絵

＞i36942—4403＜

ある日の蒼空と春奈

――――――

2章．扉絵（後書き）

扉絵なんてものまで作ってみました。

絵だけだと新規作成できないようなので、1章のあらすじも付けてみました。　即席なので、いまいち変な感じです。

ep28．冒険（前）

市内の病院を退院してから2週間がたった――。

退院してからのボクは、朝、春奈を学校へ送り出したあと、お母さんに病院まで送ってもらいリハビリに励んでる。　お昼には、お母さんが迎えに来てくれるから、お昼ごはんを食べてからお家へ送ってもらう。

昼からはボクにとって、これといってする事もない退屈な時間が待っている。　春奈が帰ってくるまではホント誰もいなくて、ちょっとさみしかったりする。春奈の中学の教材を使って勉強をしてみたりもするけど、一人でやっても全然身が入らない。

でもお母さんが時々、様子を見に戻って来てくれるときは、すごくうれしい。

お母さんは、パソコンソフトやＣＡＤ?とかのオペレーターさんを派遣したりする会社を経営していて、オフィスはＪＲの駅のすぐそばにある。　お家からでも１０分かからずに行けるからとっても便利だ。　お母さんは、要所要所で重要な指示だけすれば、あとは部下の人に任せておけるので、案外自由な時間がとれるんだって。

それに緊急な要件があっても携帯もあるからなんとかなるみたいだ。

はぁ、それにしても退屈……、早く春奈帰ってこないかなぁ?

ゲームは、やれば出来なくはないけど元々あんまり好きじゃないし、目がすごく疲れる。　読書も同じで、文庫本とかって字が小さくて、ずっとルーペで追わなきゃいけないからやっぱ疲れちゃう。

みんな教科書なみに大きな字になればいいのに?　教科書は別の

意味で疲れちゃうけどね……ふふ。

ボクは、することもなくお部屋のベッドに女の子らしくない、だらしないカッコで横になってる。　誰も見てないんだからかまわないんだもん。

「ああ、退屈。　毎日退屈で死にそうだよ～」

思わず声を出してしまった。

退院してからの数日は、お家に帰れたうれしさで毎日が楽しかったけど、それを過ぎるとたった一人、することもなく、外に出ることも出来ず、ただお家にいるだけ――。

「お外、行きたいなぁ……」

ボクは、外に行きたくてたまらなくなってきた。

そして、そう思うと止まらなくなってきた。

「……」

「行っちゃおうか？」

ついにガマンしきれずに行動を起こすボク。

ベッドからむくりと起き上がり、ベッド脇に作り付けてある手すりを使って立ち上がる。　ここまでならもうバッチリ出来るのだ。

次に脇に置いてあった松葉杖を使い、よたよたとクローゼットまで行きなんとか扉を開けることに成功。　しかし問題発生。　ハンガーまで手が届かない！　お気に入りのファー付きのコートは、はるか上のハンガー（かなり大げさ）にかかっていて、松葉杖をつきながら上に手を伸ばすのは無謀を通り越して無理です……。

――ちなみに、今リハビリは平行棒から一歩進んで、歩行補助具を使った訓練もしてるのだ。　松葉杖を使った歩行も多少出来るようになったけど、腕がすぐつかれちゃうから大して進めもしないけど。　お家の中をよたよた歩く分には充分！　残念ながら、まだ手すりだけで歩くのはすぐ腰砕けになっちゃうんだけど――。

仕方が無いから、コートのスソを引っ張って、無理やり引きずり下ろす作戦で行く。

「バササッ」

コートがクローゼットの下に落ちてくる。　作戦セイコ～！

あとはニット帽を棚から出して……。　あ、日焼け止めも一応塗っとかなきゃ、冬の日差しにも油断しちゃダメって言われてるし。

準備が整ったボクの姿は、タートルネックのニットカットソーにショートパンツ、裏起毛のあったかレギンスにファー付きのコートを羽織り、念のためにブランケットも準備、足元もファー付きのブーツで行くつもり。

よし、眼鏡（度付きのサングラス）も掛けたし、いよいよ出発だ！

ボクは、車イスにうんしょと乗り移り、意気揚々と玄関まで進んだ。　しかし、ここでまた問題発生！　お家の床と、玄関の土間の段差にスロープがあるんだけど、そこを一人で降りるのって……。

どうしよう。　うーん、ここはちょっとかっこ悪いけど――。

ボクは車イスから降りて、まず車イスをスロープを使わずに土間に落とした。　ちょっと車イスさんには、かわいそうなことしたけどカンベンしてね。　それで土間に下りた車イスに乗り込んで、クリアだ！　やれば出来るじゃん、ボク。　うふふ♪

こうしてボクは、ちょっと苦労したけど玄関のドアを開けて外に出て、モチロンきっちりドアに鍵をかけてから、とうとうお家の外に出ることに成功した！

お家の外は、勝手知ったる自分の庭だった街。　とはいうものの自分の体と、車イスってことで今日のところは、すぐ近くにある公園を目指してお散歩することにする。　時間かけ過ぎると春奈も帰ってきちゃうといけないし。

「よし、公園まで冒険開始だ～！」

ボクは、ワクワクしながら車イスを公園に向けて進めた。

＊　＊　＊　＊　＊

「お姉ちゃん、ただいま～！」

春奈は、家に入るとすぐ蒼空に呼びかける。

……。

「あれ？　寝ちゃってるのかな？」

春奈は、蒼空からの返事がないため部屋で寝ているのかと思い、自分の荷物はリビングのソファーに放り投げると、そのまま蒼空の部屋へと向かう。

「コンコン」

部屋の扉をノックしつつ、返事も聞かずに引き戸を開く春奈。

「お姉ちゃん、ただいま。　寝てるのかなぁ？」

蒼空が寝ているといけないので控えめな声で、呼びかけながら部屋に入る春奈。

静かに声をかけながら…

「おねぇ…ちゃん？」

ベッドを覗き込む春奈。

「……？」

「お姉ちゃん！？」

慌てて部屋中を見渡すも、やはり姿は無く……、

「え、えええぇ～！？　お姉ちゃんがいないぃ？」

蒼空の姿はそこにはなかった。

もしかしてトイレかも？　と思いそこも確認したが……、蒼空の姿は無かった。　念のため、２階も確認したがそこにもやはりいない。

「ちょ、お姉ちゃんったら、どこに？　どこに行っちゃったのぉ～？」

しばらく動揺していた春奈だったが――、よくよく冷静になって考えてみると……、まず車イスが無い。　そして、お気に入りだったファー付きの白いコートも無くなっている。そもそもクローゼットの扉が開きっぱなしで、しかもそこには松葉杖も転がっている。

玄関のほうに行ってみれば、案の定、下駄箱からお姉ちゃんのブーツも無くなっている。

「むむぅ、お姉ちゃんめぇ。　さては外に散歩にでも行きやがりましたねぇ！」

春奈は、なんともいえない口調で蒼空の行動を攻め立てた。

「ったくぅ！　自分の体のことちっともわかってないんだからぁ……、一人でどこにいっちゃったのよぅ」

春奈の口調からは、勝手に外に出た蒼空に対しての怒りよりも、心配のほうが大きくなってきていた。

春奈は蒼空が行きそうなところを考えてみる。　答えは簡単だった。

「公園ね……」

蒼空の足（車イス）と体力で行けるところといえば限られてくるし、落ち着けるところという意味でも公園がイチバンだ。

春奈は、目星を付けるととりあえず、お母さんに電話を入れた。

「あ、お母さん？　今大丈夫？　仕事中ゴメンね。　でも緊急事態なの！」

そう言って蒼空が家から抜け出したことを伝える。　そして行き先の目星も付けたからとりあえずそこを見に行くと告げる。

日向は、また何かあったら連絡ちょうだいね、といい電話を切り、自分も仕事を切り上げて部下に早退を告げ会社から家に向かうのだった。

お母さんに連絡を入れて人心地ついた春奈は、再度気合を入れて言う。

「よし、とっととお姉ちゃんを連れ戻しにいくぞ～！」

言葉とは裏腹に、蒼空が一人でそんなところに行っていることが心配でならない春奈は、学校から帰ってきたそのままの姿で、家を飛び出していくのであった。

公園に向かいながらも春奈は心配でつい考える――。

もう、お姉ちゃんったら……、もうちょっと自分の姿に自覚持って欲しいよぉ。　車イスに乗った１１・２才くらいにしか見えない、あんなキレイで真っ白な髪した、かわいい女の子が……、いくら住宅街の中の公園っていったって、一人で……。

「あぁん、もう！　お姉ちゃん、無事でいてよね！」

時間は、いつしか１６時をまわろうとしている。　真冬であるこの時期の、日暮れは早い。　春奈の心配が杞憂である……と祈るしかない――。

ep29．冒険（後）

ボクのお家から公園までは、ボクが男の子だったころで、歩いてだいたい5・6分くらいで着くくらいの、近いところにある公園だ。
距離でいったら４００mもないくらい。
それくらいなら車イスでも充分いけるよね。　ボクはそう思ってあまり深く考えもせず、家を出たんだ。　でもそれは大きな間違いだった――。

元気だったころはなんとも思わなかった道路のデコボコや、段差、石ころや砂利……。　そんなちょっとした変化が、車イスで移動するボクの妨げになった。　ボクが公園に行くのに選んだ道は、多少距離が増えても車がなるべく通らない道を選んだんだけど、それが余計に、そんなやっかいな所がいっぱい出てくる結果になっちゃった。

途中、道行く人が不思議そうに見ていったり、何か言いたそうにする人（やっぱりボクの姿とか、車イスで一人いるのって相当な違和感？）とかもいたけど、とりあえずは何事も無くすんでいった。

結局ボクは公園に着くまで、段差やデコボコに悩まされ、疲れては休憩しつつ……で、1時間以上かかってやっと到着するありさまだった。　ボクは途中で何度もあきらめて帰ろうかと思ったけど、なんに対する意地なのか？　あきらめないで、結局公園まで到着したのだ。

「もう、ダメ。　もうヘトヘトで動けないよぉ」
せっかく公園に着いたっていうのに喜ぶ余裕なんて全然なかった。
小さく華奢な体が悲鳴を上げてる。　この体になって、こんなに

動いたのは今日が初めてだった。　おまけにずいぶん汗をかいてしまってる。　このままだと冷えてカゼひいちゃうかも？　それにノドが乾いてしかたない……。

「どうしよう、まだ帰らなきゃいけないのに……」

ボクは今さらながら自分のしたことに後悔してた。　昔の……、男の子だったころの気分で、公園までのお散歩くらい簡単！と、甘く考えてしまってた。

こんなにもボクは、力なく、ひ弱になってしまってた――。　わかってたことなのに。

ボクは、落ち込んだ気分、それに疲れのせいで、しばらく、ぼーっとその場にたたずんでいた。

「帰らなきゃ…」

ボクは、ふと我に返ってそうつぶやいた。

今になってようやく辺りを見回す。　真冬の公園は人影もほとんどなく、着いたころには多少でも聞こえていた小さい子の遊ぶ声も、今は聞こえない。　いつの間にか日は傾き、夕暮れの気配がただよい始めていた――。

「寒い……」

――汗が衣類を濡らし、それが冷えて寒気を誘っていた。

ボクはとりあえず公園のトイレ脇にあった自販機で、あったかい飲み物を買おうと前に向った。　たった４・５ｍの距離だったけど

腕が鉛のように重くて、自販機まで永遠にかかるんじゃないかと思えるほどだった。

なんとかたどり着き、おサイフからお金を出し、手を伸ばしてお金を自販機に入れ、選択ボタンを押す。ボタンは上から3段に分かれてあったけど、なんとか届くのは一番下の段だけだ。あったかいの…、コーヒーしかないや。苦いからいやだけど、しかたない……。出てきた缶コーヒーを取り出すのにも苦労しながらなんか手に取る。

「あたたかい……」

しばらく、ゆたんぽ代わりにして暖まり、いざ飲もうと思うと今度はフタを開けるのにも一苦労。普段でもちょっと硬くて開けづらいのに、今は手の力も入らないから大変なのだ。

「もう、ふんだりけったりだよぉ…」

フタと格闘し、なんとか開けてようやく飲めた――。

暖かい飲み物で人心地ついたボクは、お家のことに考えが及ぶ。

「今何時だろ？　春奈もうとっくに帰って来て、ボクがいない事気付いてるよね……、怒ってるだろうなぁ」

――それに心配してるだろうなぁ。

「帰ろう！」

ボクはようやく帰る決心を固め、重い体を無理矢理動かし、元来た方向に車イスを進め出した。

西の空はすでに夕焼けに染まり始めている。

「早く帰らなきゃ日が暮れちゃう！」

気は焦るけど、やっぱり疲れで全然力が入らず遅々として進まな

い。　やっと進めたと思ってもちょっとした石一つでもあれば引っかかって止まっちゃう。　行きはそんなのは避けながらいけてたんだけど今はそんな余裕すらない。

　ボクは、なさけなさとさみしさで悲しくなってきて、とうとう半泣き状態だ。　ぐずりながらも、引っかかっては進み…を繰り返し、少しずつ、少しずつ進ませるボク。

　そんな時だった。

「お嬢ちゃん、どうしたの？　大丈夫？」

　そう言って声をかけてくれた人がいたんだ。

　その人はくぼみに引っかかって動けなくなってるボクのところに近づいてきて、車イスをその場所から移動させてくれた。

「あ、ありがとう……」

　ボクは戸惑いながらもお礼をいい、その人を見た。

　２０代半ばくらいの女の人で、背は低め、すごい美人ってわけじゃないけど、かわいらしい感じのやさしそうな人だ。

「いえいえ、どういたしまして。　それにしてもどうしたの？　こんな夕暮れ時に……、お嬢ちゃん一人なの？」

　そう言いながらボクの方を見てくる、女の人。

　その顔は、ちょっと驚いた表情を見せる。　けど何も言わない。

　ボクはそれを見てちょっと安心した。　興味本位でズケズケと聞いてくるような人じゃなさそうだ。　そして素直に答えた。

「は、はい…。　一人でちょっと公園までお散歩しようとしたんだけど、思うように動けなくなってしまって……、いつの間にかこんな時間になっちゃって――」

「そうなんだぁ？　一人でお散歩かぁ、えらいねぇ。　でもこの辺の道って裏通りのせいもあってか結構荒れてるでしょ？　車イスだと大変だと思うな。　お嬢ちゃん、よくここまで一人でこれたね？　すごいなぁ」

この人、絶対ボクのこと小学生だと思ってるなぁ…、仕方ないけど。

「それで、お家はここから遠いの？　車イスで来たんだからそんなこともないのかな？　お嬢ちゃんさえよかったら、お姉さんが送ってってあげようか？」

「え？　そんな、今さっきあった人にそんなこと……」

ボクが戸惑っていると……、

「あ、私のこと変な人だと思ってる？　心配しなくていいよ、私こう見えても学校の先生してるのよ？　ほらすぐそこにある高崎中よ。今学校の帰りなのよ？」

そしてこれを見てと言って小さな長方形の紙を差し出した。

ボクは、恐る恐る受け取って、それを見る。　これって名刺ってやつかな？　お母さんがいっぱい持ってたのと似てるし。

ボクは書いてある字を読もうとしたけど小さくてよく読めず、目の前まで近づけて読もうとした。

それを見た自称先生は、

「あらゴメンなさい、まだ読めなかったかなぁ？　そこにはね、学校の名前と先生であること、それにもちろん私の名前が印刷してあるの」

どうやらボクが漢字が読めないと勘違いしたみたいで名刺の説明をしてくれた。

「あ、遅れましたけど私は、井上（いのうえ）　夏帆（かほ）っていいます。　国語の先生をやってるのよ？　よろしくね」

ついでに自己紹介までしてくれた。　夏帆先生かぁ……、あれ、まてよ？　高崎中っていえば、春奈が行ってる中学じゃん！（ボクも1年だけ行ってたけど……、自主退学？てことになってるんだっけ？）

「あ、あの、私はぁ…、柚月　蒼空っていいます」

ボクもちゃんと自己紹介した。　ウソはいってなさそうだし、どう見ても悪い人に見えないし。

「柚月（ゆずき）さんかぁ、めずらしいお名前ねぇ？　ウチの学校にもそんな名字の女の子がいるはずだけど？　…まぁ、いっか。　それじゃ行きましょうか？」

どうやら、絶対ボクを送っていく気満々のようだなぁ。

「ほ、ほんとにいいんですか？」

ボクはまだ、お願いしていいのか迷ってる。　だって余りにも申し訳なさすぎるもん。

「いいの、いいの！　子供はそんなことで遠慮なんてしないの。こんなところにかわいい女の子一人で放っておくなんて、私にはできっこないもの！」

そう言って井上先生（もう先生でいいよね）は、さっさとボクの車イスを押しにかかる。

「さぁ、どこに行けばいいのかなぁ？」

ボクは、もうあきらめて素直に家の住所と、とりあえずの方向を指差した。

「あら、なんだ、すぐ近くじゃない！　こんな距離で遠慮なんてしなくて良かったのに」

ボクは、ちょっとムッとした。　どうせボクはこんな距離も満足に動くことも出来ないダメな子なんだもん……。

「……」

だまりこんだボクに、すぐ井上先生は自分の失言？に気が付いたみたいですぐさま、

「あ、ご、ゴメンなさい。　こんな距離なんて言ってしまって。そうよね、柚月さんにとっては大変な距離だったんだもんね。　私ったらダメねぇ」

井上先生は、やっぱりいい人みたい！

「ううん、いいんです。　私こそ、無理して一人でお散歩したりしたから、いけなかったんだし…、ごめんなさい。　助けてもらってほんとうれしいです！」

「ありがとう！」

ボクはそういって、車イスを押してくれている井上先生を仰ぎ見た。

「か、かわいいっ！」

井上先生は思わずそう口に出す。

「はぅ」

ボクは慌てて正面に向き直った。　これではいつものパターンに入ってしまう。　これ以上刺激を与えないようにしておこう。（ボクも学習するのだ）

井上先生は、ちょっと残念そうにしながらも車イスを押してくれている。

ボクはさっきまでの緊張がウソのようにほぐれてきて、とたんに疲れが出てくるのを感じていた。　そしてちょっとうとうとしだしたとき――。

「お、お姉ちゃん！」

うとうとしだしたボクは、はっとして声のほうを見た。

「は、春奈？」

春奈はボクを見るなり思いっきり駆け寄ってきてこう言った。

「お姉ちゃん！　もう一人で外に出るなんてぇ！　私どれだけ心配したか……」

そして、思いっきり肩から抱き寄せられちゃった。

春奈はボクの背中をなでながら、

「ほんとに心配したんだから…、携帯にかけても出ないし、どんどん日は暮れてくるし」

春奈…、涙声だ――。

「ご、ごめん。　ごめんなさい」

ボクは、心から悪いと思い、あやまった――。

「もう、謝ったってそう簡単には許してやらないんだからぁ～」
春奈はまだ怒りたりないようだ。　でも仕方ないか、今回はボク自身も自業自得とはいえ大変な日になっちゃったし……。

「春奈？　ほんとごめんね？　ボク、もう2度とこんな勝手なことしないから…ね？」

「う、うん…、ほんとにほんとよ！？　うそついたら承知しないんだからぁ」

「うん、絶対。　約束！」
ボクは、そう言って春奈のアタマをなでる。

それを見て微笑みながらも、春奈の”お姉ちゃん”発言にちょっと不思議そうな表情を浮かべている井上先生。　そりゃあ、ボクがお姉ちゃんって言われるのは変なのかもしれないけどさぁ……。

そんなことはさておき――、ボクは先生を春奈に紹介しようとした。
「春奈、この人が困ってたボクを助けてくれたん……？」

ん？　春奈？

「かほりん～！？」
春奈は井上先生を見て指さした。

「あら、柚月さんってやっぱり？」
井上先生はどうやら、ボクの名字から気付いてた？

でも、〝かほりん〟って？

ep29．冒険（後）（後書き）

ちょっと思ったより長くなって、まとまりきらなかった…

ep30．代償

「か、かほりん～？　どうしてお姉ちゃんと一緒に？」
春奈が驚いて井上先生に声をかけてる。”かほりん”は先生のアダ名みたい。　アダ名で呼ばれてるなんて、けっこう生徒たちに人気あるのかな？

ボクはとりあえず、春奈にコトのいきさつを簡単に説明した。
春奈は聞きながらボクを攻めるような、あきれるような、そして最後にはホッとした表情になって話を聞いてた。

ボクの説明が終わって、話し出す井上先生。
「ふふ、ついさっきお友達にしてもらったばかりなのよ？　柚月（ゆずき）って名字、教えてもらったからもしかして？って思ってたんだけど、やっぱりあなたとご姉妹だったのね…ふふふ」
井上先生は、そう言って春奈とボクを見る。　今はもう車イスを押す役は春奈と交代していて、井上先生は、ボク達の隣を歩いていた。

「それにしても……、あなた、春奈さんが…妹なんだぁ？」
井上先生は、やはりもっともなことを口にする。　ちょっと遠慮がちに聞いたのはボクを気遣ってくれてるのかな？　それでもやっぱ聞きたくなっちゃったんだろうなぁ。

春奈はそれを聞いて、”あぁ、そっか”って顔をし、ボクと目を合わせながら話し出す。
「う…はい、この人私のお姉ちゃんなんです」
そう言ってボクのアタマらへんを指さしながら言う。　人のこと指さしたらダメなんだからぁ…むぅ。

「あ、まずは、お姉ちゃんを助けてもらってありがとうございます」
ボクから事情を聞いた春奈がお礼を言った。　そうそう親しき仲にも礼儀ありだよね。ボクが言うのもなんだけど――。

いえいえ、どういたしまして、そして当然のことをしただけ……と、返す井上先生。
それに笑顔で答え、続ける。

「えー、見た目はそのぉ、私のがお姉ちゃんにように見えるんですけど――」
そう言いながらボクの方を見る。　ボクは気にせず言っていいよって感じでうなずく。

「私がほんと妹なんです。　お姉ちゃん、見てもらってわかる通りその、色々あって……、ちょっと人より成長が遅れちゃってて、見た目がお子チャマなんです」
うぅ、最後の一言がちょっと気になるゾ！

それだけの話で納得したのかどうかはともかく……、井上先生はうなずいて言う。
「なるほどねぇ……、春奈さんが妹さんかぁ。　――そういえば学校でも、よくお姉ちゃんが、お姉ちゃんがぁって、言ってたのは蒼空さんのことだったのね？　ほんとに仲のいいご姉妹なのね」
ちょっといたずらっぽい顔で言い、春奈の顔を見る。

「ちょ！　かほ…、先生！　変なコト言わないでくださいよぉ。別に何も言ってないじゃないですか～」
春奈が赤くなって井上先生に抗議してる。　春奈ったら学校でボクのこと何って言ってるんだろ？　ボクは気になって春奈を見る。

「お、お姉ちゃんも、き、気にしなくていいからっ！　何もない、何にも言ってないって」

春奈は、なんか誤魔化そうと必死だ。　そんな必死になるほどのこと言ってるんだろうか？　むぅ……。

そして春奈は話をそらすように、

「そ、そうそう、かほりん…井上先生は私の担任の先生なんだよ！」

「えっ？　そ、そうなの？」

は、春奈！　そんな重大情報を今になって。　どおりで春奈がやたら、なれなれしいくらいに先生とお話ししてると思った。　だったらお姉ちゃんとしてココは……。

「井上先生、あの、妹……春奈がいつもお世話になってます」

ボクはそう言って、感謝の気持ちを伝えた。

井上先生は微笑みながらうなずき、言う。

「はい、ご丁寧にありがとう。　蒼空さんもいいお姉さんなのねぇ。でもこれからはご家族に迷惑かけないようにしなきゃね？」

最後に先生らしく、注意の言葉もついてきちゃった。　はい、反省してますぅ……。

――そんな話をしながら歩いていくと、お家になんかあっという間についちゃうわけで。　実際普通に歩けば近いわけだけど……さ。

今はお家の門の前だ。

「先生、ここが私たちのお家です。　もしよかったら寄っていかれ

ませんか？　お母さんも会って話したいって言うと思うし……」
春奈は、井上先生に寄ってもらうよう勧めてる。

「う～ん、ゴメンなさいね春奈さん。　せっかくだけど今日のところはこれで失礼させてもらうわ」
それにもう暗くなるし、夕方はなにかとお忙しいでしょう……と、井上先生は春奈に言い、最後にボクに向って言う。
「蒼空さん、妹さんにあんまり心配かけちゃだめよ？　それに自分の体ももっと大切にしないと……、今日は体をゆっくり休めてカゼとかひかないようにね？」
そう言って最後にボクのアタマをなでる。　やっぱ最後には子供扱いになってきてるし……。
「は…い、気をつけます。　ありがとうございました」
最後にもう一度お礼をした。
うん、と井上先生はうれしそうにうなずいた。
そして、
「それじゃ！　春奈さん、また明日」
そう言って軽く手を振り、井上先生は帰って行った。

いい先生だなぁ……、そう思いつつボクは今からのことを考えると、ちょっと憂鬱（ゆううつ）になった――。

＊　＊　＊　＊　＊

「お母さん、ただいま！　お姉ちゃんもちゃん一緒だよ～」
春奈が家に入るなり元気に言う。　そして車イスを床まで押し上げてくれているところで……、
「蒼空！」

お母さんが緊張感あふれる声……と共に、ボクのトコロまで近づいてきた。

「お母さん……」

ボクは恐る恐るお母さんを見る。

ボクを見つめてるお母さん。　目が少し赤い……、ボクは心がチクリとうずいた。

ちゃんと言わなきゃ――。

「お母さん……、勝手にお家から出ちゃって…ごめんなさい。　し、心配かけて……ごめんなさ…い！」

ボクは、最後のほうはちょっと涙声になりながら……、お母さんにあやまりの言葉をつげた。

「蒼空！」

お母さんはもう一度ボクの名前を呼ぶと……、ぎゅっと思いっ切り抱きしめてきた。

「この子ったら、ほんとに、ほんとに心配かけて！」

「ごめんなさい……」

ボクは、再びあやまった。

抱きしめられると、ボクもホッとしたのか今までの疲れがどっと出てきて、それと一緒に涙もあふれ出してくる。

お母さんは、泣きながらもどうしてこんなことしたの？　と聞いてくる。

ボクは涙ながら答えた。

「あの、ね。　退屈で退屈でしかたなくって……、ついお外に出たくなっちゃって。　それに街の公園くらいなら近いし、すぐ行って

帰ってこれると思って――」
だけど、実際には外の道を車イスで進むことの大変さを思い知り、なんとか公園までたどりついたものの力つき……
「車イスが溝にはまって出られなくなって困ってたトコロに春奈の学校の先生……、井上先生が偶然通りがかって、助けてくれたの。すごくうれしかった……」

ボクは、今までのいきさつを話つつ、井上先生への感謝の気持ちもお母さんに伝えた。

お母さんは、話をするボクを目を涙で潤ませながら見てる。
ボクの顔は、お日さまの光を長い間あびたせいか赤くなり目も充血し、かなりひどいことになってるみたい。体も無理がたたって、もう車イスから立ち上がるどころか腕を上げるのもつらい状態になってきてた。

「ほんとにあなたって子は……無茶をして」
再びぎゅっと抱きしめて、アタマをなでてくれる。

「もうこんなこと2度としないでね？　お願いよ。お母さん心配で心配で……もう、生きた心地しなかったんだから……ね！」
言った最後にボクのおでこをペチっとたたいた。

「井上先生にもまたお礼しなきゃね。通りすがり……、見ず知らずの蒼空にそんなにやさしく救いの手を差し伸べてくれたんですもの。――でも春奈の担任の先生だったなんて……不思議なものねぇ」

「うん。あの時はホントうれしかった。もうあの時はボクどうしようもなくて泣いちゃってたんだもん……、春奈の先生だって聞

いたときはビックリしちゃった」

「あら、蒼空ったら公園で泣いてたの？」

ううっ、しまった余計なことまで言っちゃった。　お母さん笑ってるし……、カッコ悪いなぁ、ボク。

「さぁ、蒼空。　お説教はこれくらいにして……まずはお風呂に入りなさい。　汗ずいぶんかいたみたいだし、寒い中ずっとお外にいたせいで体が冷え切ってるわ！」

「春奈、母さんは着替えとか準備しておくから、あなたお姉ちゃんと一緒に入ってあげて？　お姉ちゃん、もうふらふらみたいだからしっかり支えてあげてね？」

「は～い、じゃお姉ちゃん行こっ！」

春奈は返事するなり、ボクの車イスをお風呂場の方へ押し始めた。

お母さんは、気持ちを切り替え、テキパキと動き出した。

ボクはというと、疲れ果ててもう春奈とお風呂に入るの恥ずかしいって、言う元気も残ってなかった――。

＊　＊　＊　＊　＊

翌日、ボクは見事に熱を出し寝込んでしまった。

日焼けの余韻と熱のせいでボクのお顔はまっ赤になってるらしい、目もまだしみるように痛い……。　動くことも全然出来ない。　まるで8月の……目が覚めたときのよう。　手を目の前に持ってくることすらつらいんだ。

こうなってボクは、昨日以上に昨日の行いを後悔し……、2度とあんな真似はしないとほんとに心に誓った――。

そして――、今からお母さんに病院に連れて行ってもうんだけど、ボクがほとんど動けないから移動が大変なのだ。　お母さん、ほんとにほんとに……

「ゴメンナサイ」

ｅｐ３１．伯母さんが来る

”無断外出事件”から１週間……、ボクはずっとベッドから出してもらえなかった。

退屈でたまらず無断外出して――、その結果が１週間のベッド暮らし。我ながら意味のない、自分の首を絞めるようなことをやっちゃたなと……、ただただタメ息が出るばかりの時間を過ごすしかなかった。

病院では、石渡先生に心配されながらもからかわれ、香織さんにはお説教をくらっちゃうし……。

ほんと散々だったよ……。

今はようやく熱も下がり、日焼けで炎症を起こしかけていた肌も、適切な治療のおかげで大事に至ることもなく、普通にお家の中をうろうろ出来るようになった。でも寝込んでたおかげでリハビリが進まなかったどころか、また弱っちゃう結果になってガッカリだ……。

でもボクが無断外出をしようとした原因……、お家で一人っきりでいるしかないボクの気持ち……は、お母さんや春奈もわかってくれていて、色々気を使ってくれているのがうれしかったりする。

ありがとね、お母さん、春奈！

――そんなことがありながらも、また平穏な日々の暮らしが戻ってきたある日の日曜日。

「蒼空、今日はお客さまが来るから、ちゃんとお外に出ても恥ずか

しくないカッコしましょう！」

お客さま？　誰が来るんだろ？　そう思いながら自分の姿を見る。淡いピンク地に花柄をあしらった裏起毛の長袖、長ズボンの部屋着で、上着の襟元にはボアがついててカワイイ。　そして足元はもこもこした、これもピンクのルームブーツを履いてる。　はっきりいってやたらとカワイらしいかっこですごく恥ずかしい（やわらかくて着心地はいいけど）。　もちろん選んできたのは春奈だ。　なんだかボクのために用意してくれるお洋服って、ピンク色が多くて女の子女の子してる。　２人ともボクのこと子供扱いしずぎだ！

そしてお母さんがボクの部屋にお洋服を持って入ってきた。　どうやら今日のためにまた新しいのを用意したみたい。（お母さんってなんでこういう時、お洋服をきめたがるんだろ？　いつも着てるのでも充分じゃないかと思うんだけどなぁ）

ボクは、着ている服を有無を言わさず脱がされて、下着姿にされちゃった。　胸がまだほんのちょっとしか出てない（これから成長するのかなぁ？　でも胸のあるボクを想像するのもなんだか変）ボクはキャミソールにパンツ姿だけど、お色気なんて全然ない。

新しいお洋服を着せられたボクは、姿見の前に震えながらもなんとか立ってその姿を見てる。モチロン横でお母さんが支えてくれてるけど。

今度のお洋服は、ちょっと清楚なイメージのするお嬢様っぽい服だ。　白い長袖のブラウスに赤いチェックのティアードスカート、首元にはこれも赤チェックのリボン。　黒っぽいジャケットを羽織って、キラキラしたチェーン付きのボタンで留めてアクセントにしてる。　お母さん、こんなにきめてボクをどこの発表会？に連れ出すつもりなの？って感じの仕上がりですね。　正直、お家に来るお客さまへの対応？としてはやりすぎだと思うんだけど……。　ボクがそんな思いで、お母さんを見ても全然相手にされないどころか……

「蒼空、すごく似合ってるわぁ！　かわいいわよ～」
一人盛り上がってます。　だめだこりゃ。

そこに輪をかけるように春奈が入ってきた。
「お母さん、お姉ちゃんの着替え終わったぁ？」
入るときはノックしようよ？　春奈。

「終わったわよぉ、見て春奈。　かわいいでしょう♪」

「きゃー！　すんごくかわい～！　お姉ちゃん、フォーマルなスーツも似合うね」

す、スーツ？　これってやっぱスーツになるの？　女の子のお洋服はよくわからないけど……、やっぱ思いっ切りよそ行きのかっこなんじゃない？

「これなら伯母さんもきっと褒めてくれるよ～？」

「お、伯母さん？」
春奈の言葉にボクは思わず聞き返した。

「え？　うん、そう伯母さん。　あれ、聞いてなかった？」

「聞いてない……」
伯母さん……。　お母さんのお姉さんで、某有名広告代理店に勤めてる、超が付くほどの…昔で言うキャリアウーマンで、ボクがすごく苦手にしてた人だ。　海外に長く赴任してることもあり、スキンシップがハンパなく、当時キスされまくってたボクは、いくら小さかったとはいえあまりの恥ずかしさに、いつからか伯母さんの目

から離れるよう、目に付かないような行動をとるようになった――という、いわく付きの恐ろしい人なのだ！

「あら？　そうだったかしら。　言ったと思ったんだけどなぁ？」

お母さんが白々しく誤魔化した。　ぜったいわざとだよね。

ボクはジト目でお母さんを見る。　お母さんは目をそらし、春奈を見る。　春奈は、あはは　と笑って誤魔化す。

ま、いいけどさ。

でも、お母さんがすごくうれしそうにしてる。　ボクはいつも心配かけてばかりで、お母さんに悲しい思いさせてるから、これはやっぱいいことなんだもん。　ボクは伯母さんのキス＆抱き付き攻撃に耐え切ってみせるもん！

あ、でも伯母さん……、ボクのことって――。

ボクは突然不安になり、表情を曇らせた。　それをお母さんは見逃さず…察して言葉をかけてくれた。

「蒼空…？　心配しなくても大丈夫。　伯母さん…私のお姉さんはねぇ、蒼空のことはちゃ～んとわかってくれてるわ。　だから蒼空は全然気にしなくていいの」

そう言って、ボクのアタマをなで、笑いながら続ける。

「何しろ、あの（事件の）後、私一人じゃ心配だから一緒にこっちに来て住めばいい…なんて言ってくれたくらいなのよ」

お母さんはホントにうれしそうにそう語り、ボクのお洋服（スーツ）姿を再度確認する。

「よし、完璧ね！」
　ボクの両肩を軽くポンッとたたきながらそう言うと、車イスに座らせてくれた。　ボクはそれが少し残念だった。　ボクがあんなことさえしなかったら……、もうちょっと長く立っていられるくらい、それこそ伯母さんを立った姿でお迎えすることも出来たかもしれないのに――。

「それじゃ、蒼空。　お母さんは空港へ姉さんを迎えに行ってくるから、あなたは春奈とおとなしくお留守番しててね？　……お外に出ちゃだめだからね？」
　最後の一言を茶目っ気たっぷりに追加して、再度ボクのアタマをなで、次いで春奈もなでるとお母さんは、見送りはいいからと言い、いそいそと部屋を出て行った。

「お姉ちゃん、今日は覚悟しておいた方がいいかもね？　最近のお姉ちゃんはいつも会う人会う人に抱きしめられちゃってるけどぉ……」
　そう言って春奈はボクの方を見てニヤリと笑い、
「今回はそれの比じゃないと思うなぁ……いひひひ」
　は、春奈。　なんていやな笑い方。　ボクはなんだかアタマが痛くなってきた気がするよぉ。

「でも、お姉ちゃんはあの時ずっと寝たまま目が覚めないし……おと…さんは、……だし、ほんと真剣に伯母さんは、お母さんを連れて行きたがってたよ。　……心配してくれてた」
　春奈は、ぽつりと当時のことをボクに話した。

「うん。　お母さんの大事なお姉さんだもんね。　ボクも逃げてばっかじゃお母さん悲しむもんね。　まかせといてよ、ボクちゃんと

伯母さんにご挨拶するしその後も……」
ボクはちょっと言葉をさがして……、こう言った。
「がんばるよ！」

「がんばれ！」
春奈がそれに同じように答えた。
そう言った春奈の顔は、やっぱ、ちょっと……にやけてた。

もうしばらくして、お母さんのクルマが出て行くのが窓から見えた。

伯母さん？　どうかお手柔らかにお願い――。
ボクは飛んで来ているだろう飛行機の方向に向って……、お祈りした。

モチロン心の中で……。

ep32．伯母さんの作戦

お母さんが出かけてから、ボクと春奈はお昼ごはんを食べたり、春奈がお洋服を着替え（タンクトップの上にトレーナー、コーデュロイスカートにレギンス…と普通にカジュアルなカッコだ。ずるい！）たり、リビングでＴＶを見たり……と、適当に時間をつぶしながらすごした。

２時間半ほど過ぎ、ＴＶにも飽き、やることもなく退屈になってきた頃、お母さんの車が帰ってくるのが窓から見える。

「あ、お姉ちゃん！　お母さん帰ってきたよ」

春奈がそれにいち早く気付いて言う。

「え、ホント？　良かったぁ、ボクもう退屈でどうにかなっちゃうかと思ったよ～」

「よし、それじゃお姉ちゃんはココで待っててね？　私出迎えてくるから！」

「えぇ？　ボクも行ったほうがいいんじゃない？」

ボクが疑問に思って聞くと、

「いいのいいの！　お姉ちゃんが行くと玄関で抱擁劇が始まっちゃうじゃない？　そんなことになったら面倒じゃん」

春奈、なにげにひどいこと言ってる気がするなぁ……、でも一理ある、かな？

「……う、うん、わかった。　じゃそうする」

「じゃ、そういうコトで～」

春奈が、手をヒラヒラ振って玄関のほうへ向かって行った。

ボクは車イスに座ったままで、ソファーには座らず伯母さんが来るのを待っていた。

しばらくすると玄関のほうから騒がしいくらいの声が聞こえてくる。　春奈のもう悲鳴に近いんじゃないか？っていうくらいの声も聞こえる。　……一体何が起こってるの？　ボクやっぱりこの場から逃げたくなってきた――。

その声はだんだんリビングに近づいてきて……、その女の人としてはかなり高い身長の……お母さんのお姉さん、瑞穂（みずほ）伯母さんが春奈と腕を組みながら（引きずりながら？）入ってきた。　お母さんはその後ろから苦笑いしながら付いてきてる。

伯母さんは、リビングに入るとすぐボクに気付き、春奈と組んでいた腕をほどき、そのままの流れでボクに近づいてきて、以外にも落ち着いた感じで話しかけてきた。

「蒼空…ちゃん、ほんと蒼空ちゃんだわ！」

そう言うと、伯母さんは背の高いその体をかがめ、ボクの顔に両手を添えて……そのお顔を近づけてきた。　伯母さんはもう４０を越える年のはずだけど肌はまだ若々しく３０代前半でも通用しそうで、面長ですっきりした目鼻立ちのその顔は、姉妹だけあってお母さんにソックリですごくキレイ。すっきりお顔に沿うようにきめたショートヘアが活発な伯母さんに良く似合ってる。――そしてそのままボクのおでこにまずキスをする。

「蒼空ちゃん。　蒼空ちゃんはあの時、お眠りしてたからもちろん覚えてるはずないんだけど、あの時も私、蒼空ちゃんのおでこにキスしたのよ？　……今こうしてかわいらしい目を開けてる蒼空ちゃんにキスできるなんて……、ほんと夢のようだわ！」

そう言うと伯母さんは、再びボクにキスをする。　おでこ、アタマ、ほっぺ、耳……、次々キスをする。　ボクは恥ずかしいけど、伯母さんのその気持ちもわかるから素直にキスを受けてる。　でも次に伯母さんは力技をかけてきた。　ボクの両脇に手を差し入れ、そのまま抱き上げちゃったのだ。　ボクは落ちないよう伯母さんの首に手を回してぎゅっと抱きつくカッコになる。　それがまた伯母さんを喜ばせたようで、そのままクルクル回りだしちゃった。　いくらボクが小さくて軽いっていっても３２・３キロはあるのに……。

「蒼空ちゃん、ほんと目が覚めてよかったね～！　こんなかわいらし～子なんですもん。　ずっとベッドに寝かしとくなんてもったいないわよねぇ？　うふふ」

「それにまぁ、なんてかわいらしいお洋服！　日向ったらずいぶんおめかしさせちゃって、ねぇ」

そう言って、回りながらもボクのほっぺにキスしまくる伯母さん。　ボクは、落ちないよう伯母さんに抱きつくのに必死だ。　そしてだんだん目も回ってくる。

お母さんが見かねて、

「ね、姉さん！　蒼空が目を回しちゃうわ！　いいかげん下ろしてあげて？」

「あらあら、いやだっ、私ったら！」

伯母さんは、お母さんの言葉でやっとボクの様子に気付いてくれたようで……、ようやく車イスに下ろしてくれた。　ボクは、軽くアタマを振って落ちつかせた。　そんなボクの様子を見ながら、伯母さんは今度はボクのアタマをいたわるよう、なでだして言う。

「でも蒼空ちゃん、前もかわいかったけど、今のかわいさは、ほん

と他に比べるものがないレベルよねぇ！？　国宝級？」

お、伯母さん……。　身びいきもココまで来るとすごいよ。　ボクはもう人ごとのように関心してしまった。

「日向から、蒼空ちゃんが目を覚ましたって聞いた時は、私神様に感謝したわ！　……普段は無神論者なんだけどね。　で、それを聞いたらもう、早く蒼空ちゃんの顔が見たくて見たくてしょうがなくなっちゃって。　でも仕事の区切りがなかなか付かなくてぇ――」

――色々表情を変えつつも話しを続けてる伯母さん。　もう独壇場です。

今は伯母さんはソファーに座ってるんだけど、ボクはというと、その伯母さんの膝の上に座らされてる状態で……抱えられてます。

正直、相当恥ずかしいです。　見た目はともかく精神年齢１５才のボクにはつらいです。

そんな中、ボクはふと春奈のほうを見てみると、やつめぇ、肩を軽くすくめながらニヤっと笑い、小さく口を動かし……（かわいいよ、お姉ちゃん。　あきらめなよ）　と言いやがりました。（いや実際にはっきり聞こえたわけじゃないんだけど、絶対そう言ってる）

ボクは思わず春奈に向って　”いぃ～”　って顔をしてやった。

それを見た春奈は……、ふっ　って……ふっ　って鼻で笑ってきたよ！　悔しい～！

そんなやり取りをしてたら話がまたボクに振られてきた。

「蒼空ちゃん、中学卒業の資格とらなきゃダメなんですって？　それに高校のこともあるものね？」

「う、うん」
ボクは突然の学校の話にちょっとついていけない。
「今、日向と話してたんだけど、私の娘の千尋（ちひろ）が国立の大学に行っててねぇ、教育学部の確か今2年生かな？　その千尋に蒼空ちゃんの学校の勉強みさせたらどうか？って勧めてるとこなのよぉ」
え、千尋姉さん？　従姉の千尋さんには、小さい頃、春奈と一緒によく遊んでもらった記憶はあるけど……ここ数年は全然会ってなかったなぁ。
「へぇ～、千尋姉ちゃんがお姉ちゃんにお勉強を？　それすごくいいよ！　春奈は賛成～♪」
春奈が先手を打って伯母さんに言う。
「まぁ春奈ちゃん、ありがとう！　蒼空ちゃんはどう？」
「もう、姉さんったら、まだ本人の了解も得てないんだから。　気が早いわよぉ？」
お母さんも伯母さんには頭が上がらないみたい。　伯母さんに完全にペースを握られてるよ。
「ぼ、ボクは、お母さんがいいならそれでいい。　千尋さんも好きだし」
ボクはお母さんにお任せだ。　どうせボクの意見なんて通らないだろうしさ……。
「よし、それじゃこの話進めちゃう！　日向？　私、千尋に確認取るから、あなたこの家にあの娘を住まわせたらどうかしら？　どうせ勉強教えるなら、住み込みでやらせたほうがお互い楽でしょ？

それにあの娘もその方がアパート代やら食費とか浮いて助かるだろうし、家庭教師を引き受けさせるいい”エサ”になるわよ？」

伯母さん、ってスゴイ。あのお母さんに有無を言わせない圧倒的なパワーだよ。やっぱ伯母さんオソルベシ――。

「ね、姉さん……、住み込みって。私は別にかまわないっていうか、むしろ家に人が増えること自体は、その歓迎なんだけど、……ほんと千尋ちゃんの了解、キッチリ得てからにしてちょうだいね？それに無理強いも絶対しない！それさえ守ってくれるなら……」

お母さんはここで一呼吸おき、それから改めて言った。

「こちらこそ、ぜひお願いします」

「うん、了解！」

伯母さんは満面の笑みでそう言って、更に言う。

「まあ千尋は間違いなくこの条件なら乗るから、日向は準備、進めといていいわよ？」

「蒼空ちゃん、千尋じゃ頼りないかもしれないけど、しっかりお勉強してちゃんと高校行けるようになれるといいわね？」

伯母さんは、そう言ってボクをぎゅっと抱きしめた。

「うん！　ありがとう、伯母さん。　ボクがんばる！」

ボクはいつの間にか決まっていった、千尋さんの住み込みでの家庭教師の話に、すごく気持ちが高ぶっていき、知らず知らずのうちに笑みがこぼれて出していた。

その後、お母さんと伯母さんは今後の打ち合わせをしばらくしていて、ボク達はようやく解放されていた。　ボクの部屋に戻ったボ

ク達は、千尋さんが来る（ことになる？）と思うとワクワクし、その話をして大いに盛り上がった。

――用件が済み、夕食を一緒に食べたあと、帰る段階になって伯母さんはボク達にプレゼントをくれた。　どうやら話に夢中になって渡すのを忘れてたらしい――。　ボク達は大喜びでプレゼントを受け取りお礼を言った。

「それじゃ伯母さん、千尋と話しつけたらまた（海外の赴任先へ）戻っちゃうから、当分あなた達とも会えないわね。　次はたぶん夏季休暇のとき帰って来るから、その時は二人共かわいいお顔見せてちょうだいね？」

そう言って伯母さんは、ボクと春奈のおでこに次々とキスをし、手を小さく振りながら玄関から出て行く。

「「伯母さんありがとう！　また遊びにきてね」」

ボクと春奈は、伯母さんにそう言って手を振りながら、さよならの挨拶をした。

お母さんは、伯母さんを車で送るため再び一緒に出て行った。

＊　＊　＊　＊　＊

ボクは今まで伯母さんが、……すごく苦手だったけど、今日一日で大好きになっちゃった。　瑞穂伯母さんがまた次に会いに来てくれるのが今からすごく楽しみだ！

今日はホントいい一日だった。

気持ちよく眠れそうだよ……、それにしても家庭教師かぁ、楽しみだけどちょっと不安かも？　お勉強ちゃんとできるかなぁ……。

――そんなことを考えながらうとうとし出し、いつしか眠ってしまった蒼空なのであった。　お風呂もまだ入っていないというのに。その表情は、とても幸せそう……、そんな寝顔を見せていた――。

ep33．ちーちゃん

あれから伯母さんと千尋さんとの間で、どんな話し合いがあったのかは分からないけど、千尋さんはどうやら住み込みでの家庭教師の件を引き受けてくれたみたいだ。

お母さんと電話でやり取りもしたみたいで、今日の昼から、お部屋の様子見と挨拶をかねてお家に来るみたい。　お部屋はボクが以前使ってた、2階の部屋を使ってもらうみたい。

「蒼空、千尋ちゃんが来たらちゃんとご挨拶するのよ？　今住んでるアパート引き払ってまで来てくれるんだからね？　よーくお礼をいうこと」

お母さんは、ボクに念を押す。

「うん、わかってる。　ボクちゃんとお礼いうよ！　まかせといて」

ボクは自信たっぷりに答えた。

千尋さんは、今大学に通うのにアパートを借りてるらしい（実家からの通学だと時間がかかりすぎ、学生宿舎はいやなんだって）んだけど、住み込みでの家庭教師をしてもらうわけで、その間ずっと借りっぱなしなんて出来ないから引き払うんだって。　でも、もしボクがすんなり高校に入っちゃって（もちろん入るつもりだけど！）、家庭教師はそこまでってことにしちゃうと、千尋さんはまたアパート借りなきゃいけなくなっちゃう。　だから家庭教師が続く続かないにかかわらず、大学卒業まではボクんちにずっと住み込みしてもらうってことになったみたいだ。

ちょっと千尋さんに申し訳ないような気もするけど……ボク的にはうれしいな。　千尋さんには、ボクが小学校の5年生くらいまではよく遊んでもらってた。　――あの頃のボクは、当時すでに高校生だった、やさしくてキレイな”ちーちゃん”（千尋さんのこと）

に会うのをいつも楽しみにしてたなぁ……。　伯母さんが海外へ行ってからはあまり会えなくなっちゃったんだけど――。

今日はお母さんも、さすがによそ行きの服を着せようとはしないみたいだけど、でも部屋着はやめなさいね　とはいわれた。　ボクもあのピンクのカワイイので、久しぶりに会う千尋さんをお迎えするのはいやだから、素直に従おっと。

＊　＊　＊　＊　＊

お昼ごはんを食べて、ちょっと眠たくなってきた頃……。　千尋さんは、自分で車を運転してお家までやってきた。　やっぱり車があったほうがなにかと便利なんだろうなぁ……、この辺りは車がないと何かと不便なのだ。　千尋さんは、有名な泥棒アニメの主人公みたいな名前の、淡い緑っぽい色をしたかわいらしい軽自動車に乗って来て、今お母さんが、自分の車の横に止めるよう案内してる。

「おじゃましま～す！」

玄関から聞こえてきた、久しぶりに聞く千尋さんの声。　以前とあまり変わってない感じだ。　リビングに入って来たお母さんの後ろから、続いて千尋さんが現われる。　背が高めのお母さんと同じくらいかちょっと低いくらい（結城の家の人ってみんな背、高いなぁ…みんな１７０ｃｍ前後ありそうな人ばっかだ）、髪の毛は以前より伸ばしてるみたいで、肩を少し越えるくらいまであって、ゆるいウエーブさせた髪を内巻きにした感じで、前は真ん中よりちょっと右に寄せたくらいで分けてる。　お顔は、お母さんや伯母さんは面長のすっきり顔の美人さんだけど、千尋さんは、ちょっと卵型した顔の、目元がやさしい雰囲気の美人さんだ。

「ち～姉ちゃん！　こんにちは～」
春奈がまず、うれしそうに駆け寄ってく。　すばやい！　しかもアダ名で？　そういや春奈はボクが眠ってた時、伯母さんと一緒に会ってるのかな？　他にも会う機会あったかもしれないし……。

「あん、春ちゃんっ。　久しぶり～、元気してたぁ？」

「うん！　今はもう、と～っても元気だよぉ！」

そう言葉を交わすと、千尋さんと春奈は両手を取って、上下に振り合って再会を喜んでる。　そして一通り再会の挨拶が終わると、次はボクのほうに近づいて来てくれた。

千尋さんはボクを前にして、戸惑いがあるのかちょっと動きがとまる……。

ボクは、先に声をかける。
「あ、あの、千尋さん？　こ、こんにちは……、蒼空…です。　こんな姿になっちゃったけど……」
久しぶりに会う緊張からか、ちょっとたどたどしくなっちゃった。
最後の一言余計だったなぁ。

「……蒼空ちゃん！」
千尋さんが、ボクの両手を取りぎゅっと握った。　そしてボクの方をしっかり見て言った。
「蒼空ちゃん。　目、覚めてよかったね」
千尋さんは握っていた手を、今度はボクの肩に回し軽く抱きしめてくれた。　そしてもう一度、
「よかったね、蒼空ちゃん！　おかえり」
と言って、再度、今度はぎゅっと抱きしめてくれた。

「あ、ありがとう！　千尋さん」
ボクは、抱きしめられながらもお礼を言った。　う〜ん、一体何度目のハグなんだろ？　ふと不謹慎なことを考えてしまうボク。
それから、あのこともちゃんと言わなきゃ。
「千尋さん――。　今回はボクのために家庭教師をしてくれて、住み込みまでしてやってくれて……。　その、無理なお願いしてごめんなさい。　でも来てくれてありがとう！」
よし、何とか言えた？
「うん、うん。　どういたしまして！　私で役に立てるなら、かわいい従妹のためだもの、頑張らせていただきますよ？」
千尋さんは、そう言って笑顔を見せる。
「それに、これは私にとってもすっごく大助かりなコトなんだから。蒼空ちゃんは何も気にしなくていいのよぉ？」
今度はちょっとニヤリと笑って、ボクを見る。　やっぱり伯母さんが言ってたようにメリットは大きいみたいだ……うふふ。　でも、千尋さんだって一人になりたい時とかあるんじゃないのかなぁ…、いつもボク達が一緒だと自由な時間とかあまり取れないだろうし。
ボクがそんなことを考えたのを、知ってか知らずか千尋さんが更に言う。
「まぁ、たまに羽目はずしたい時とか、一人になりたい時とかは、どっか出かけたりすると思うけどね？」
そう言っていたずらっぽく笑う。
「あ、それとぉ、”千尋さん”　なんて他人行儀な呼び方しなくていいから？　昔一緒に遊んでた時みたいに、”ちーちゃん”　でいいよ？　ねっ、蒼空ちゃん？」

「まぁ、なぜか春ちゃんは、ちー姉ちゃんって呼ぶけどね？　やっぱ妹だから？」

そう言って笑いながらも、ボクのアタマをやさしくなでる。　これパターンだよね……。

「うん。　あ、ありがとう！　その、ち、ちーちゃん…」

ボクは、はにかんで頬を赤めながらもそう言った。　最後の一言に小首をかしげるオマケ付きで……。

「！」

きゅう～……。

ちーちゃん撃沈だった。

――後で春奈がボクに言った。「お姉ちゃん、最近自分の武器が分かってきたみたいだよね？　にひひ。　あれはない、あれはないよぉ！　一撃必殺だよ？　使う時はよ～く考えて使わないとヤバイよぉ？」と……。　ボクだんだん女の子としての自分に慣れてきちゃってるのかなぁ、やっぱり。　案外小悪魔みたいな娘になったり？　いや、それはないな、ないよ、たぶん――。

その後、ちーちゃんが落ち着いてからお母さんがお家の中を説明したり、元ボクの部屋の様子（広さとか、どんな物が使えて、何が必要かとか）を確認したり。　細かいとこだと、ちーちゃんの好きな食べ物が何？　とか、生活にまつわるいろんなこととか、ｅｔｃ……。

あ、それと忘れちゃならない、これがメイン！　の、ボクのこれからの勉強の進め方と、その後、どの高校を目指すのかってことについてとか。

”中卒認定試験”　はともかく、高校については今の段階では、ボクの力がまったくと言っていいほどつかめないから決めようがないみたい。　まぁ、そりゃそうだよね。

「ボク…は、出来たら春奈と同じところに行けたらいいなぁ？」

どこか希望はあるのって聞かれたときは、一応そう答えたけど。

これは前にもそう言ってたことだし、ボクも一人ぽっちはいやだから……出来ればそうなれるよう努力したいんだ。　――そういや春奈って、成績どうなんだろ？

「まぁ高校については、ある程度勉強が進んでから改めて相談しましょう？」

お母さんが無難なところを言って、ちーちゃんもそれがいいですね　と同意した。

＊　＊　＊　＊　＊

だいたいの話しがまとまったところで、ちーちゃんは帰ることになり、ボクは玄関でお見送りし、お母さんと春奈は外まで行って、車が見えなくなるまで見送ってたみたい。

ちーちゃんは、アパートの契約の関係で2月いっぱいまでは向こうで生活するみたい。

そして2月の最後の日までには引越しを終わらせて、3月からは、いよいよこっちでの生活ってことになるらしい。

3月までは、あと2週間と少し。　う～ん、待ち遠しいなぁ。

――ちーちゃん。

たぶん苦労させることになっちゃうと思うけど……、3月からよろしくお願いします！

……ボクは、心の中でそう願うのだった――。

ep34．ふたりのボク

ちーちゃんが住み込みでボクの家庭教師をしてくれることが決まり、3月からはボクのやることは一気に増えそうな気配だ。

1月は退屈しのぎのボクの行動から、みんなにずいぶん迷惑かけちゃったけど、これからはそんな退屈だと思うことは少なくなるのかな？

大学生のちーちゃんがどれくらいのペースで家庭教師をしてくれるのかまだわからないけど、大学は”中学や高校”と違って毎日通う必要はない？って聞くから、結構お昼からとか勉強することになるのかな？

心配ごとの一つだった勉強の件が、実際の勉強はこれからって言ってもようやく目処が立つと、もう一つの……ボクにとってはこれこそ一番の心配事。

未だに歩くことが出来ない自分の足。そのことにどうしても考えがいってしまう。

最近リハビリに行っても以前のように良くなってきてるって実感がわいて来ないんだ。

立ち上がれるようになるまでは結構順調に進んだ。そのせいもあって1月の騒動を起こしてしまったわけだけど……。

その先が思うようにいかないんだ。

最初は無理して1週間以上サボることになってしまったのが原因かと思ったけど、2月ももう終わりが近いっていうのに1ヶ月近く前のことが未だに影響してるなんて思えないし、思いたくもない。

――この体は元々歩けるようなモノじゃなかったのかも？　いくらリハビリしたって、そもそも歩ける体じゃないんだ！

そんな、ろくでもない考えが次々と浮かびボクのアタマを支配する――。

こんな体のままじゃ、そもそも春奈と同じ高校に行くってことすら出来ないじゃないか？

ついにはそんなことまで考えてしまうボク。

いったいどうしちゃったんだろ……。

どうしてこんなに心が沈んでいってしまうの？

ボクはなぜか湧き上がる、このいわれのない不安感に心がしめつけられる。

＊　＊　＊　＊　＊

ボクは、近頃よく同じ夢を見る。

薄暗いけど怖くはない、どこか暖かく気持ちのいい……まるで海

の中でゆるやかにただよっているような感じのする、なぜだか懐かしい気分にさせるところ。

そんなトコロにそれはただよう。

それは、そこにあり、そこにいる、ただそれだけの存在。

見るのは、それの〝記憶〟というより写しとっていただけの周りの事象。

それは……アタマではないどこかに、はからずも〝記録〟されたもの。

覚えてるいるのではなく、写し取った何か――。

そんなモノをボクが見る……それはボクの夢として。

＊　＊　＊　＊　＊

あの夢を見るとボクは不安になる。　落ち着かないんだ。

夢の中では落ち着く雰囲気なのに、実際目が覚めると落ちつかない。

あそこでは、落ち着くけど何も出来ない、することが出来ない。

それは今の自分も同じ。　それがボクを不安にさせる。

何も出来ないボク。

……。

＊　＊　＊　＊　＊

ボクはリハビリに行ったある日、お母さんと別れてから一人石渡先生のところに向った。

約束も何もしてなかったけど……。

「やぁ、蒼空ちゃん。　今日はいったいどうしたんだい？」

石渡先生は、忙しい中（たぶん休憩時間をさいて）いやな顔もせず、脳神経外科の待合室に居たボクに会ってくれた。

「先生、ごめんなさい。　急にこんな我がまま言って……」

ボクは、急なお願いを聞いてくれた先生にあやまってからあの夢の話をした。

先生はしばらく考えてから、ボクを見てやさしい顔をして話してくれた。

「蒼空ちゃん。　私が思うに君の夢は、君の夢じゃない」

「え？」

ボクは思わず聞き返しちゃった。　ボクが見た夢なのにボクの夢じゃない？

「あぁ、う〜ん。　ちょっと言い方がまずかったかな？　確かに蒼空ちゃんの頭の中で見た夢ではあるんだけど、君の、その脳の中で作り出された夢じゃないって言うべきかな？」

先生はそう言ってボクのアタマを指差した。

「ボクの脳が作った夢……じゃない？」

「そう、脳が作った夢じゃない。　まぁこれも別に確たる根拠があって言ってるわけじゃないからそのつもりで聞いて欲しいんだけど」

ボクは小さくうなずいた。

「よし、進めるよ。　根拠はないって言ったけど、蒼空ちゃんの話を聞くとある光景が容易に想像出来る。　それは……」

そこまで言ってから先生はボクを見る。

「先生、ボク大丈夫だから気にせず続けてください」

ボクは先生が躊躇（ちゅうちょ）したことから話の方向が見えてきた気がしたのでそう言って続きをお願いした。

「ごめんよ。　じゃあ……、その想像できる光景なんだけど、端的にいってそれは、篠原製薬の　”再生医療研究所”　内の培養施設、そこでの　”素体”　が置かれた状況と一致するように思えるね」

ボクは目を見開き、それから息をのんだ。

「蒼空ちゃんが知っているはずのない光景だよ。　だから君の脳が見た夢じゃない」

石渡先生は、間を空けボクを見てから続けた。

「それは蒼空ちゃん、君の体。”素体”であった体自体が覚えている光景だよ。体が覚えていた光景をその体の脳、君の脳に夢として見せた。それがここ最近蒼空ちゃんを悩ませている夢の正体だ」

石渡先生はそう言いきり、ボクのアタマにポンっとその大きいけど細い指の手を乗せた。

ボクは緊張していた気持ちと体が、それでふっと楽になった。

……気がする。

「まあ、なんだ。さっきもいったけどこれはなんの科学的根拠も、もちろん証拠もない、あくまでただの推論だ。でも私は思うね。”素体”と君はＤＮＡレベルでほぼ同一の存在。まさにもう一人の君だった」

ま、細かく言えば男と女の違いはあるんだけどね。ぼそっと細くする石渡。

「そんな存在だった”素体”が見た？光景だ。蒼空ちゃんが夢に見てもなんの不思議はないと思うな？」

もちろん脳は違うけどな？そう言うとまたいつもの石渡先生に戻ってニヤリと笑った。

「これが蒼空ちゃんの最近の不安の解消になるかどうかはわからないけど、要は蒼空ちゃんがみたのは、”素体”がぼーっとしてたときに見てた部屋の光景ってことさ」

どうってことないだろ？と言って再度ボクのアタマを今度はちょっと強めにたたき、じゃ、私は忙しいからっと、足早にこの場か

ら立ち去っていった。

またいつものごとく言うだけ言って行っちゃった。

（いつものように）しばらく呆然と見送っていたボクだったけど、

「ぷっ！　ふふふ」

ボクはなんだか知らないけどおかしくなって思わず笑っちゃった。

ボクの不安が、なかなか思うように歩くことが出来ないイライラから始まったのか？　それともあの夢から始まったのか？　それは今さらどうあがいたって分かることのないコトだけど……。

今のボクにとってはもうどうでもいいことだ。

「やっぱ先生はすごいや！　なんだかわかんないけど、すっきりしちゃった!?」

実は難しいコトバにだまされただけだったりして？

それにしても……”ぼーっとしてたときに見てた部屋の光景……”　かぁ。　ふふ、そんなので不安に思うだなんて知らないってほんと恐ろしいことだなぁ……。

ボクは変なところで妙な納得の仕方をした。　ん。　いいじゃん、それでボクは納得しちゃったんだから！　これでＯＫだよ。

ふと、カベの時計を見るともう１０時をまわっている。

「いっけなぁい、リハビリが始まる時間とっくに過ぎてる！　理学療法士の先生に叱られちゃう！」

ボクは慌てて車イスをリハビリルームへ向けて進めた。

＊　＊　＊　＊　＊

石渡先生との話し以降――。

あの夢を見ることは、少なくともボクが覚えている中では一度もなかった。

人って気持ち次第でこうも変わるものなんだと、身をもって体験した蒼空なのだった。

ep34．ふたりのボク（後書き）

理屈は完全創作です（屁理屈とも？）、あしからずご了承ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3390y/

心のゆくえ

2011年12月13日07時46分発行